

丹波誌

何廣都
上卷

卷八

京都府立総合資料館所蔵



特
992
31
8

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

丹波諸藩百五十五石
 面何麓郡合四 五十四百三十六田三
 本郡也國ノ北部ニアリ東南ハ北桑田郡ノ山脈ニ
 接シ東北ハ若狹ノ大飯郡ニ隣リ南方ニ於テ船井
 天田ノ兩郡ニ面シ西北ニ於テ丹後國加佐郡ト向
 背ヲ相爲シ地勢東西ニ延ビ南北ニ縮ム弘キ所東
 西ニ於テ八里十二町南北ニ於テ五里二十五町四
 方山嶽ニ圍遶セラレ西ノ方ニ細キ口ヲ啓ク其ノ
 狹キ所ヲ小貝高津ノ間トシ奥ニ沂レバ老富ノ谷
 ト相沿ノ田野アリ亦從テ長シ細シ
 郡名ノ起因詳ナラズ斑鳩イカルカノ產地ナルヲ以
 テ古人カ爾名ケタリト云フ斑鳩一ニ歸ト書ク

丹波志

古書ニ用明天皇御宇厩戸皇子守屋大臣ト大和國
 二戰ヲ妹子大臣左將軍トナリ秦川勝副將軍トナ
 リ河合縣ニ戰テ敗績ス又曰郡川勝敗兵ヲ収メ不
 意ニ歸縣ニ戰テ之ニ勝ツ是ニ於テ川勝ヲ北ノ
 地ニ封ス云々萬葉假名ニテ如何流鹿ト書キ或ハ
 何如留鹿トド書キタルヲ國名郡名ヲ二字ニ定メ
 ラレタル時コレヲ省キ今ノ二字ニシタルナリト
 カヤ船井郡須知町字會根ニ何鹿神社アリテ之ヲ
 新ウ主カト訓稱ス一社郡同字ニシテ
 異讀ナクハ此稱ニテ東南ハ北桑田郡ハ山瀬ニ
 面積ハ桑田郡四分四厘 五十四百三十六町三段
 高田萬千八百八十石二斗四升六合正保 六十三村同

村同	四萬千三百五石五斗五合三勺	元祿	七十四
戸數	九千九十五	明治二十九年	九千十九
		三十年	八千八
		四十一年	
人口	四萬三千五百八十三	二十九年	四萬五千三百
		三十一年	二萬二千七百五十四人
			女二
	二萬二千五百七十		四萬六千二百二十九
			四十一年
	内男二萬二千九百八十五		女二萬三千四百四十
	四		
寬永	八十七村	高	四萬七百二十八石四斗五升一
合			
何鹿郡	ヨリ山家藩ハノ山年貢高		一十五石七斗

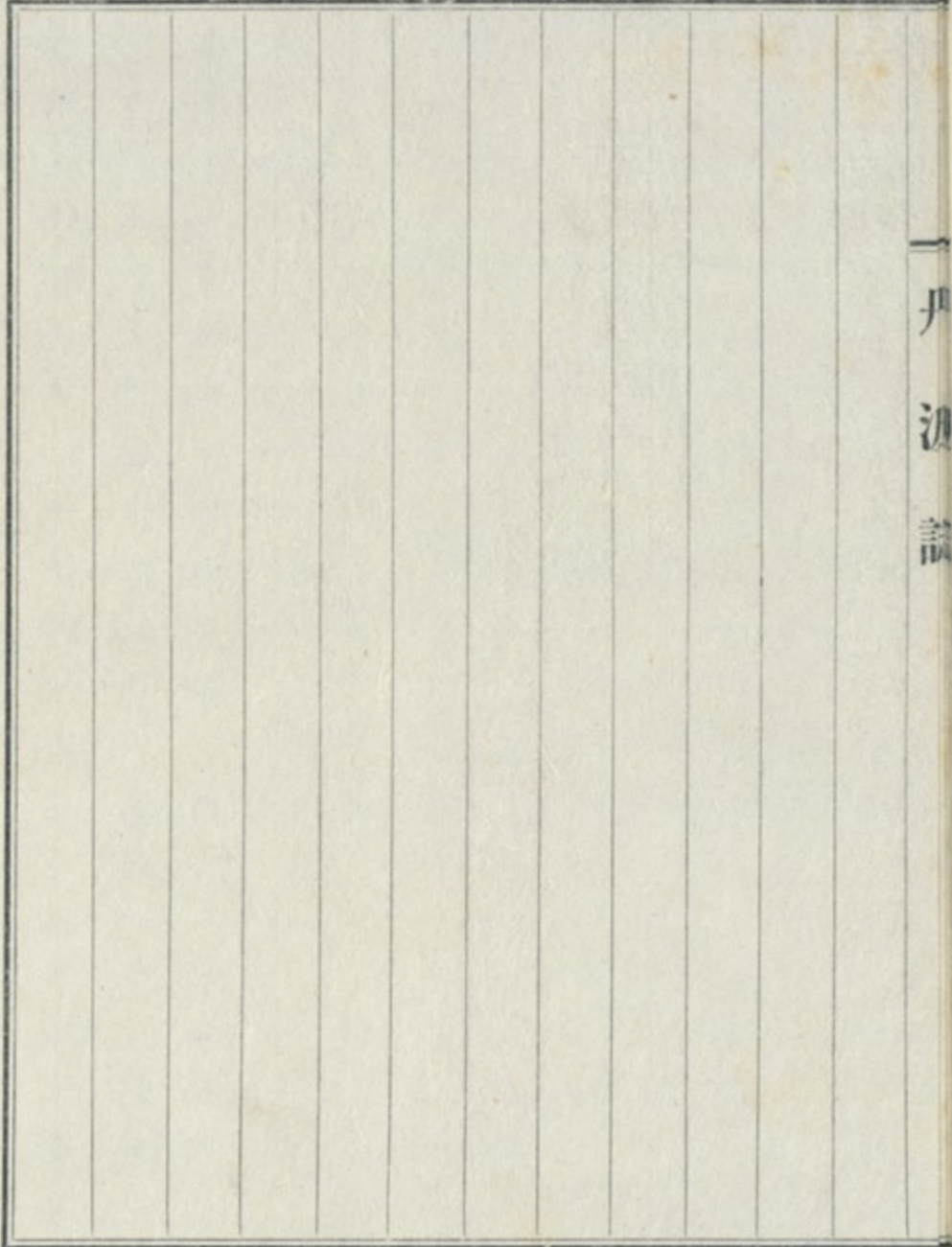
京都府立総合資料館所蔵

二分 綾部 一十二石二斗三升六合 為村 一四石
 八斗八升 高津村 一九石一斗二升八合 粟村 一
 十七石 小加四ヶ ヲ五十八石九斗三升一合六夕 十
 ニヶ月分ナリ但シ閏アレバ増アリ
 内部ニ三山彙アリ西南ヨリ東北ニ互ル其ノ遠坂
 山脈ハ位田ヨリ遠坂峠ヲ經テ丹後ノ境ニ達ス其
 ノ中央山脈ハ横峠黒石峠ヲ通シテ彌仙山ニ達ス
 其ノ君尾山脈ハ五津合ヨリ君尾山ヲ形造リテ胡
 麻峠ニ互ル 爾ク山脈ノ東南北三方ニ連綿シ蟠
 屈スルヲ以テ中央自然ニ凹狀ヲ呈シ川流隨フテ
 中央ニ會ス 郡中ノ平野ヲ數フレバ綾部西北ノ
 關ヶタル位田一帶ノ廣キヲ第一トシ米穀ノ產地

トス由良川ニ沿ヘル所ニハ孰レモ細長ノ耕地アリ
 由良川細口ノ處ニ高龍寺山アリテ山脈此所ニ隆
 起シ環廻シテ本郡ヲ包マントスルノ狀ヲ示ス東
 川岳天狗畑ハ東極ニアリ三國嶽ハ北方若狹丹後
 ノ境ニ跨ガリ君尾山ハ東北層巒ノ中央ニ居リ彌
 仙嶽ハ西北ニアリ尼采尼公長谷口猪鼻ノ五嶺ハ
 若狹ニ趨クノ路中ニアリ護摩八代管坂神子小吹
 幾見ノ六峠ハ彌仙嶽ノ東ニアル東北國界トシ大
 股見内廣野久田美小原古路枯木千原ノ八險ハ彌
 仙嶽ノ西ニ并ヒ西北國疆トス大國峠ハ船井ニ鏡
 山ハ北粟田ニ接ス 山脈ノ分水嶺トナルモノハ

位田ニ渡ル處ニテ犀川八田川トナリ五津ニ渡ル
 所ニテ五泉ノ流派ト上林ノ流派トナル
 郡ニハ 年賀税 結婚税 棟上税 出産税ナド
 ト云フ妙ナ税ガアルモ稅ト名ハ付イテ居ラヌ
 ケレド何處郡各町村矯風申合規約ト云フシカツ
 メラシイ規約ノ第十七條ニ「年賀結婚棟上出産等
 ニ就テハ舉式ノ如何ニ拘ラズ毎年末ニ左記標準
 ニ依リ町(村)特別財産ハ寄附スルモノトス」ト定メ
 年賀棟上出産ハ二十圓以下結婚ハ三十圓以下ト
 シ違背シタ者ハ町村税負擔ノ等級ヲ繰上ケ若ク
 ハ夫役ヲ課シ違約金ヲ徴スル親戚近隣ヲ違及行
 爲ニ参加シタモノハ同罪ニ附スト云フ規定ラア

ル郡内物部村ノ如キハ村内各字ニ地方改良委員
 ト云フ美シイ名前ノ檢稅吏ヲ置イテ違及行爲ノ
 監視ヤラ違約金ノ徵收事務ヲ司ドラシテ居ル



京都府立総合資料館所蔵

以久田村 大字 位田 栗長沙福垣 三宅館 大畠 今田 小崎新田

上林川ハ老富村ノ谷々ヨリ發流シ東北ノ諸溪流
ヲ會シテ西南ニ流レ古屋尾田ノ二川ヲ併セ五津
合ノ北ニ至リ菅坂嶺ヨリ發スル畑口川ト合ヒ南
流シ山家ノ南ヨリ和知川ニ注入ス天田郡界ニ至
ルノ川系大計四里ソノ間ニ小雲音無瀬ノ名アリ
犀川系ハ志賀郷ノ諸細流ヲ合セ西南ニ流レ西ヨ
リ来レル別所西坂ノ川々ヲ容レテ猶南ニ馳セ小
貝ノ東ニ於テ和知川ニ會ス 八田川ハ東西八田
ト幾見ノ水ヲ合セ位田ニテ和知川ニ合ス其ノ源
ノ梅迫山間ニ出テ又上杉溪間ヨリ出ヅルヲ以テ

上杉川トモ呼ブ 和知川系ヲ以テ本流トス船井
郡和知ヨリ来ルノ水ニシテ郡ノ南部ヲ貫流シ全
郡ノ諸水ヲ吞ミ西ニ馳セラ天田郡ニ入ル福知山
地方ノ利ヲ爲シ害ヲ爲スモノ實ニ此ノ水ナリ
和知ヨリ由良ニ至ル流域三十里アリ富士河ニ亞
ギ全國長流水中第十五位ニ居ル 伊佐津川即チ
於興岐川ハ於興岐下村ノ山中ニ發源シ諸溪流ヲ
合セ丹後舞鶴港ニ注グ 由良港ニ注ケテ以テ由
良川ノ名アリ
本郡ニ於ケル舞鶴軍港境域ハ明治三十年七月七
日公布左ノ線ヲ以テ軍港境域ノ上陸界トス
若狭國大飯郡青御村字西三松ノ東ニ於テ海ニ

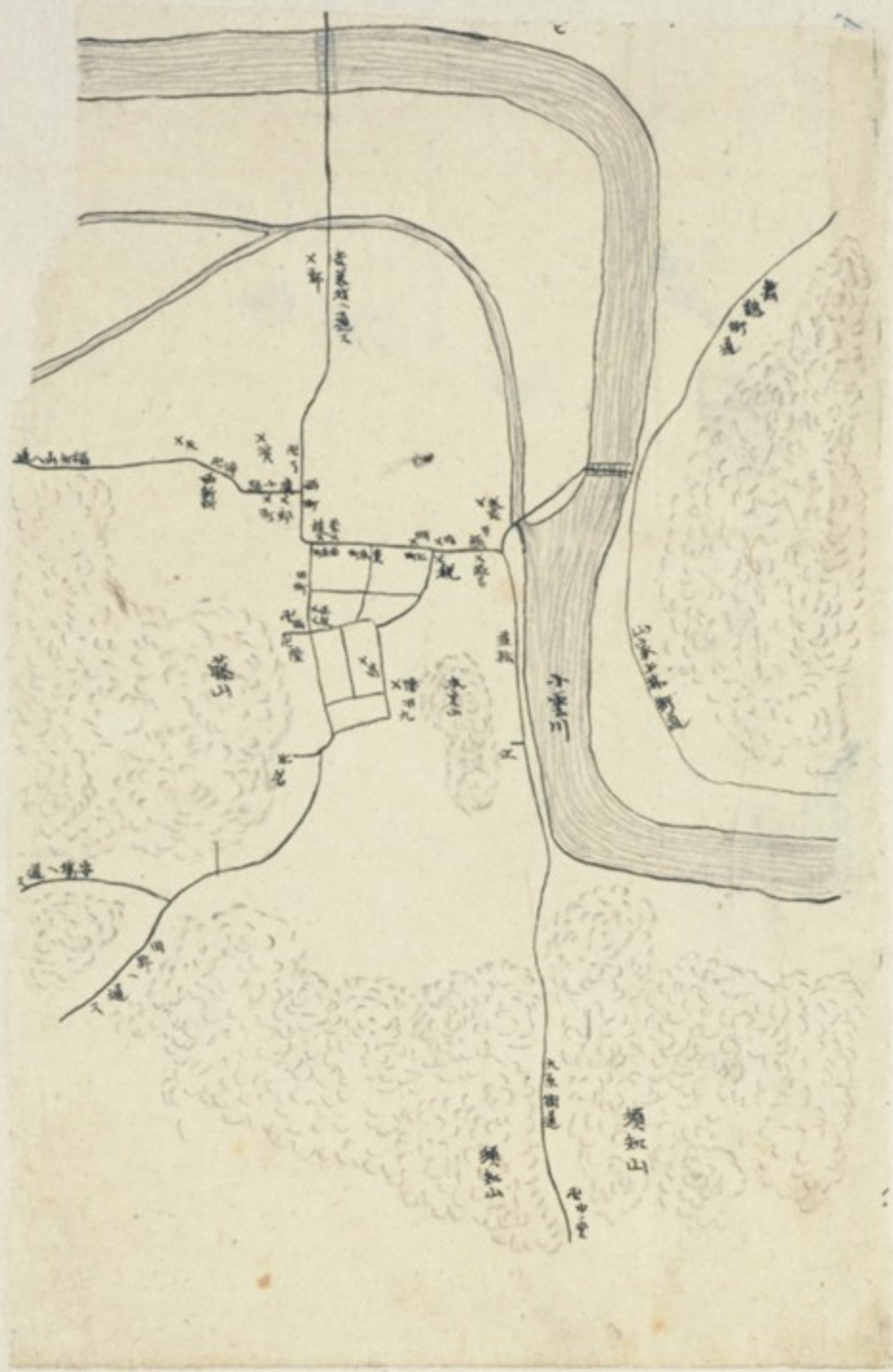
注ク所ノ河流ヲ溯リ関屋横谷ニ至リ同所ヨリ
 丹波国何鹿郡ノ内老富小唐内老富柘五泉市志
 五泉々々水梨五泉辻五津合清水ヲ經ル道路ニ
 沿ヒ仍津合清水ヨリ丹波国加佐郡池内村字岸
 谷ニ通スル道路ヲ西ニ進ミ丹波丹後二国ノ国
 境ニ會スル點ヨリ丹波丹後二国ノ国境ニ沿ヒ
 丹波国加佐郡岡田下村久美田ヨリ丹波国何鹿
 郡志賀郷村字西河内ニ通スル道路ト會スル點
 ニ至リ同所ヨリ久美田ニ通スル道路ヲ北方
 ニ進ミ由良川ニ出デ由良川ノ右岸ニ沿ヒ海ニ
 達スル線

軍港界



本郡旅行案内

綾部ヨリ殆ント中央ナル西本町ヲ起點トシ東シ
テ熊野神社ノ前ヨリ市街ヲ離レテ岐路ニ臨ム左
ハ舞鶴街道ニシテ右ハ大原街道ナリ 左行スル
モノハ綾部橋ヲ渡リ又岐路ニ逢フ北行スレバ本
道ナレドモ南折スレバ山家ニ上林ニ向フ 大原
街道即右行スルモノハ小雲川ヲ左ニシツ、南進
シテ並栢ニ出テ又進ミテ人家盡キ山間寂寥ノ地
ニ入ル左右ニ須知山ト呼ブモノ聳ツ天田郡界マ
テ一里弱 コレヨリ大原ニ出テ檜山ニ至ルベシ
西本町ヨリ南行シ田町ヲ上テ本宮村ト云フ士
族住家ノ所ヲ經テ進メバ道別ル左ハ宇田野ヲ經



一 丹波 記
 言
 天田郡ニ通ズ郡界マデ半里ニシテ遠シ 右ハ
 中筋村字安場ヲ經テ天田郡ニ通ズ郡界マデ一里
 半ニシテ遠シ 西本町ノ西端ニテ街路北ニ折レ
 テ西町トナリ數町ナラスシテ左右ニ岐ル右ハ吉
 見村ニ通シ左ハ福知山ニ連ス

綾部ヨリ山家及び上林ニ至ルノ途ハ綾部橋ヲ東
 へ渡リ右手ニ由良川ノ清流岩石ニ當リテ碎ケ々
 ヲテハ又流ルヲ瞰ミツ、平坦ノ道路ヲ辿ルナ
 リ右ニ一路アリ是レゾ船井郡和知谷ニ出ヅル園
 部街道ニゾアル

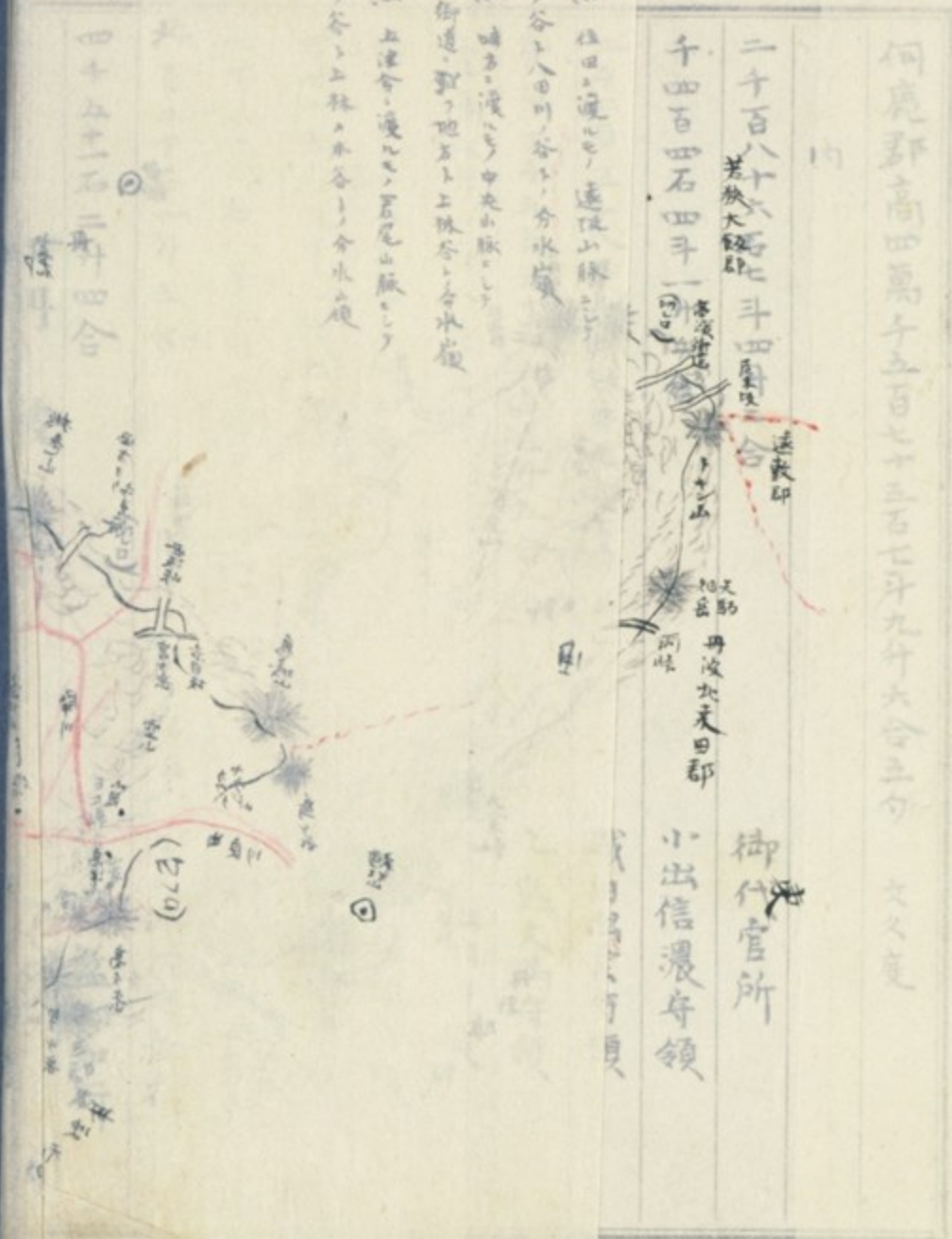
名所 吉美里 富緒川 長官山 藤浪社 篠社
 若槻村

文政元年十一月十一日主基方丹波国御屏風六帖
 和歌十八首ノ内

何鹿郡 富緒川松根有納涼之人 右辨正位下藤原朝臣隆光
 ゆく水をむすむぬきし源一さみみ川乃松ろくたうせ
 夏辰社夏衣多閑遊客死し同

京都府立総合資料館所蔵

第一ノ點 往日上流ニテ、遠征山脈
 第二ノ點 往川ノ谷ト八田川ノ谷ト、分水嶺
 第三ノ點 往川ノ谷ト八田川ノ谷ト、分水嶺
 第四ノ點 往川ノ谷ト八田川ノ谷ト、分水嶺
 第五ノ點 往川ノ谷ト八田川ノ谷ト、分水嶺



何鹿郡高田萬千五百七十三百七十九千六百五十分 丈又定

二千八百八十八斗四
 千四百四十四斗
 御代官所
 小出信濃守領

佐賀ノ谷	犀川ノ谷	
佐賀村	以久田村 志賀郷村 物部村 小畑村	
510	2050	
10	200	
20	200	
10	60	
550	2570	
一〇、六〇〇	四九、二〇〇	
小貝郵便局 佐賀神社	物部郵便局 第二高等小學校 第一高等小學校 御代官所 赤田神社 須波佐部神社 高倉神社(西坂)	
	山川ノ收人物 木枝 薪 炭 栗 松 船	

京都府立総合資料館所蔵

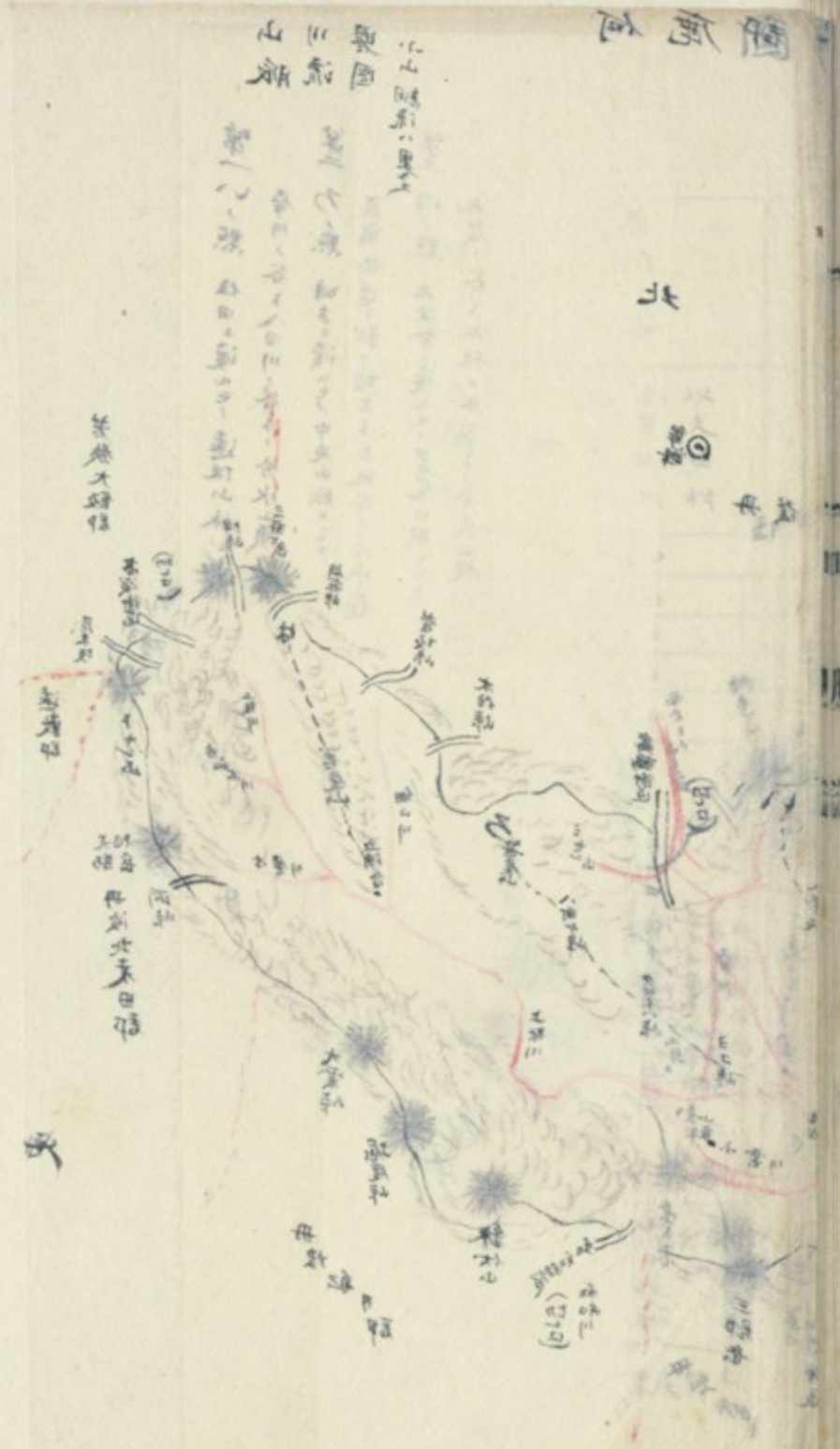
何鹿郡界圖

山脈
川流
奥國
小山細流の奥

第一ノ點 往日上流ルモ、遠阪山脈ニシテ、
層川ノ谷ト八田川ノ谷トノ分水嶺
第二ノ點 峠方ニ渡ルモ、中央山脈ニシテ、
高嶺街道ノ對リ、四方ト上林谷トノ分水嶺
第三ノ點 上津合ニ渡ルモ、石尾山脈ニシテ、
土谷ノ谷ト上林ノ谷トノ分水嶺



京都府立総合資料館所蔵



何鹿郡高四萬千五百七十五石七斗九升六合五勺 文久度

内

二千八百八十六石七斗四升二合	御代官所
千四百四十四石一升二合	小出信濃守領
二千二百三十八石七斗八升九合七勺	織田出雲守領
壹萬三千五百五十五石六斗三升五合八勺	九鬼大隅守領
壹萬八十二石八斗三升	谷 出羽守領
七百三十三石三斗五升二合五勺	安部攝津守領
百七十五石五斗二升七合	内藤播磨守領
七百二十九石八斗八升七合五勺	杉浦若狹守知行
八百二十石一升三合	柴田河内守知行
四千五十一石二升四合	藤懸監物知行

五百石

太田善太夫知行

二千三石五斗八升三合

谷 内藏丞知行

千五百石

谷 縫殿助知行

五百石

藤懸伴織知行

五百石

藤懸千之助知行

四百石

川窪佐太夫知行

彦米平年五萬石品質良好ナリ明治三十二年品質
 依持ヲ一定スルノ議ヲ決ス郡農會之ニ當リ市場
 ニ於テ優勢ヲ博シ従前失墜ニタル名聲ヲ取返ハ
 サントス
 上林川ノ谷 農 一千百八十戸 高 二百五十戸 工

百八十戸 雑九十戸

地價 貳拾七萬三千貳百円 産物 米麦大豆 栗

蕎麦 丑蒜 馬鈴薯

山家高地 農 五百三十戸 高 百二十戸 工 百戸

雑三十戸

地價 八萬六千円 産物 綿烟草 藍 雑草

畜

綾部中筋平野 農 一千一百戸 高 二百四十戸

工 百戸 雑三十戸

地價 貳拾叁萬二千八百円 産物 米麦 大豆

菜蔬 桑

八田川ノ谷 農 一千四百五十戸 高 二百十戸 工

京都府立総合資料館所蔵

郡農會ノ
甘藍輸出
状況ハ去ル
四十年海外
へ輸出スル也

状況視察トシテ府農會ヨリ派遣シタル村上回吉
ノ調査ニヨリ甘藍ノ浦港輸出ノ有望ナルヲ認メ
各農家ヲシテ試作セシメ郡農會ニ於テ之ヲ纏メ
共同輸出ノ計畫ヲ爲シ特ニ種苗ヲ同農會ニ於テ
生育シ無代ニテ各農家へ配付シ栽培ヲ獎勵シタ
ル結果四十一年七月七日浦港へ向テ第一回ノ輸
出ヲ爲スニ至リタリ其ノ試賣ノ結果ニ因レバ本
郡ヨリ輸出セシモノ品質第一等ヲ占メ成績十二
分ナリシヨリ引續キ第五回ノ輸出ヲ試ミタリ其
ノ栽培ノ方法タル一段歩珠藍千五百貫乃至二千
貫并ニ畜牛飼料ニ適當ナル葉柄五六貫此ノ代價
手取り百五十四乃至二百円收支純益段歩七八十

円ヨリ百四五十円ニ達シ農家ニ取リテハ非常ニ
有望ナル事業ナリ
明和八年年々春以來雨無ク夏ニ入り追々久旱ト
ナリ去年モ雨少クシテ不作ナリシニ本年モ亦具
ノ上ノ早損飢饉カト案シ夕立雨ヲ人々頓延バシ
相待ツ甲斐ナク農家ハ柿秧スルヲナク蕎麥ナド
蒔キ附テ大豆小豆ヲ田ニ植ウルト云フ不幸ナル
歳ニモ似ヌトコソ起リタレ升ハ本郡中誰レ云フ
ト無ク参ロカ参ロナドノ言ヲ唇ハセ潜ニ伊勢参
宮ヲスルナリ之ヲ抜ケ参リト唱ハ一連小供十二
人ニ老人三人ナドノ夥伴アリテ出発スルヤ村々
落々吾後レジト出立レ皆々如何アレント思ヒ煩

叫
岐
志

ヒタノガ無事ニ旅行ヲ續ケラゾ歸リケル當國ニ
テハ此ノ郡ヲ創始トスルヤ將又福知山近村ノモ
ノヲ嚆矢トスルヤ間モ無ク全射ニ擴ガリラメテ
ヤノニ參宮セリ此後六十一年ニ又坂參リノ丁流行
セリ

丹波國何鹿郡人刑部首夏經賜姓豐階名福夏經等
自言先出自彦坐王

貞觀五年以何鹿郡佛南寺爲真言宗即付國司檢校
今知シス

- 賀美郷 拜師郷 共ニ和名抄 渡部郷 同 餘戸郷 同
- 三方郷 同 八田郷 吉美郷 栗村郷 小嶮郷
- 物部郷 吾雀郷 私部郷 高津郷 志麻郷 所在不詳

文井郷 不詳 高殿郷 不詳 六部郷 土師郷 奄拔郷

宗部郷 和久郷 川口郷 夜久郷 雀部郷

神戸郷

郡内通信機關 四十二年

從前通信機關ノ不備ヲ感シ居リシ所今年漸緩郵
郵便局ニ電話所ヲ新設セラル、トトナリ公衆ハ
大ニ便利ヲ得ルトトナリシガ郡會ハ郡役所ト各
町村役場間ニ於ケル通信ノ便ヲ得ンガタメ資金
壹萬二千圓ヲ投シテ綾部梅迫八津合物部山家私
市ノ六個町村ニ在ル三等郵便局ヲ中心トシテ其
ノ附近村落ナル物部郵便局ニハ物部小相志賀郷
私市郵便局ニハ佐賀。綾部郵便局ニハ以久田中

京都府立総合資料館所蔵

窮喜美ト郡役所町役場。梅迫郵便局ニハ東八田
 西八田。山家郵便局ニハ山家。八津合郵便局ニ
 ハ口上林奥上林中上林等ノ諸村役場ニ通スル電
 話線ヲ架設シ以テ前記ノ目的ヲ貫徹セン筈ナル
 モ右工事竣工ノ晩ハ將來維持保管ノ困難ヲ慮リ
 全部ヲ通信省ニ寄附シ其ノ代償トシテ永久ニ郡
 内ノ電話ニ限リ制規ノ通り通話料ヲ半減ニスル
 ノ外郡外ノ電話線ニモ接續スルノ便ヲ得ル都合
 ノ由ナルガ右郡會ノ決議ハ去ル八月八日ニシテ
 同十六日附通信省ニ出願シ客月十九日附ヲ以テ
 同省ヨリ認可ノ指令ニ接シタリ
 明治四十三年八月廿五日汽車全通

開通式ニ臨ミ帰途汽車中ニ
 此道乃風流ト云テ 池川橋ノ西

秋ノ傍。老や後なる秋の如
 至人や為能と云る谷乃川
 幾層乃風山経年と秋名

立岩 上原ノ溪中ニアリ道中ヨリ見ル下ヲ得
 水面ヲ抜ク下十七間周回ハ下底ニテ夫レ以上モ
 アルベシ直立シテ天ヲ指ス松樹十四株ノ頂上
 ニ轟々蒼々タリ和知川ノ流水當リテ碎々逆リテ
 散ル街路ト相距ル数百歩惜ムベシ行人ノ知ラズ
 顔ミズシテ經過ニ去ル 土人何レゾ標榜シテ知
 ラシメザル

立 思 考 子

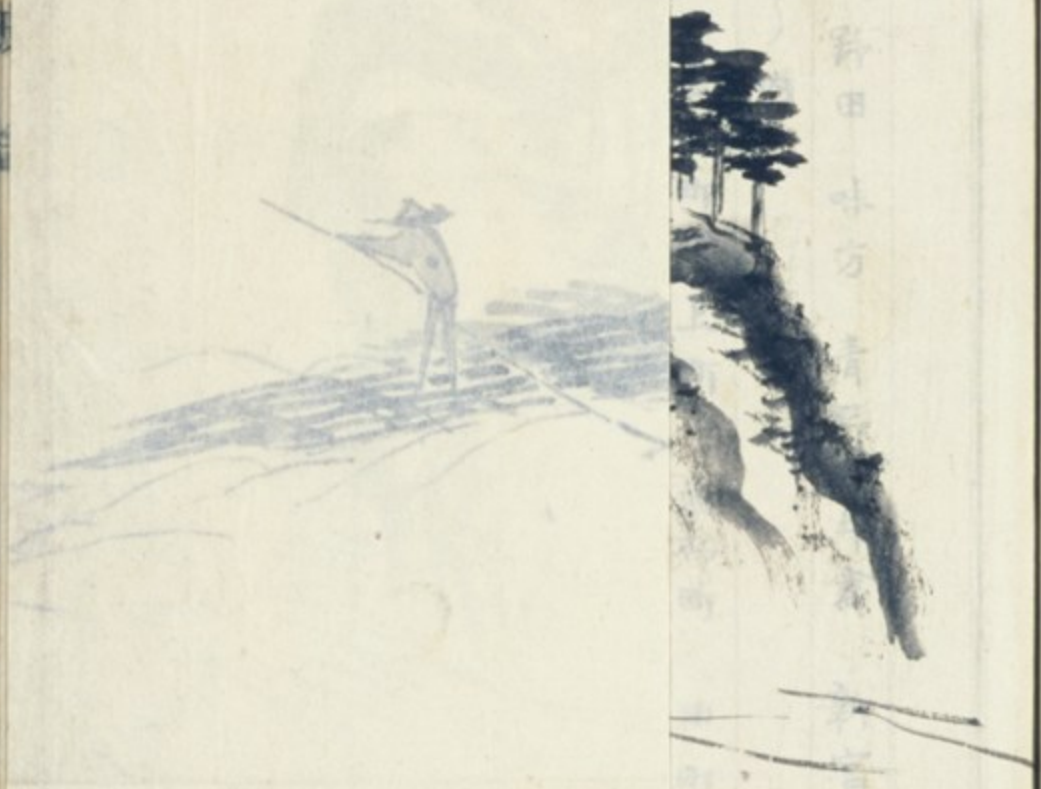
湖をこゝろに眺む中におろつらうとみたる雲をたゞし
ふ代りもつゝもぬ程の川中をいそいでゆく雲の影をたゞし

綾 立 名

大字 綾部 野田 小方

田 野 坪

小字 西本町



京都府立総合資料館所蔵

立岩



京都府立総合資料館所蔵

支分



綾部町記事

大字 綾部 野田 味方 青野 井倉 新宮

田野 坪ノ内

小字 西本町 東本町 上町 並栢町 田町

新町 横町 西町 廣小路 西新町

南西町

文久年度高帳 綾部九ヶ村三千三百二十四石二斗五升八合 綾部落領

町ハ郡ノ南端ニアル廣邑トス商店櫛比ニ貨物四集シ近村農戸ノ需要ヲ充タス可シ故ヲ以テ全郡ノ資力湊マリ華客聚マル中ニ就キ飯販ナルヲ西本町トス此ノ地ニ原ハ一小村ナリシガ今ハ東西

綾部町

町誌

九所南北八所ノ市街ヲ形造リ戸数九百四十七(二十九年)ナリシガ今ヤ増シテ一千四百餘戸(三十九年)トナリ益々繁盛ノ傾アリ封建制度ノ下ニアル商賈ハ供給ヲ藩士目當ニナセシモノ夥多ナルヲ以テ廢藩ノ舉ニ遭ヒ華客ハ農家ノミトナル可ク此ノ店舖比ノ貨物ヲ如何ニカセント苦慮シ市氣零點ニマデ降下セシモ氣運一轉シ三十年(明治)後ハ封建時代ニ勝ルノ狀況ヲ示セリ 开ハ一時租稅ノ輕減ト農物ノ騰價ト殖産興業ノ振作等コレガ原動力トナリシニ由ル

郡役所 警察署 稅務署 郵便電信局 高等尋常小學 高等養蠶傳習所 城丹蠶講習所 蠶絲

組合事務所 郡是製絲株式會社 福知山區裁判所出張所 百三十七銀行 高木銀行支店 金庫等アリテ社會公衆ニ對スルノ機關具備ス中ニモ養蠶製絲事業ノ機關ニ至リテハ完備スト云フベシ

城丹蠶業講習所ハ明治二十年創立ニテ蠶絲同業組合ノ經營ニ係ラル四十年マデニ八百名ノ卒業生ヲ出シ該業ノ一大勢力ヲ添ヘタリ

原蠶種製造所ハ明治四十四年ヲ以テ生マル

蠶業勃興ノ先覺者トシテ指ヲ屈スベキモノハ綾部町ノ梅原和助中上林村ノ岩崎嘉右衛門同村ノ福井久兵衛同勇雄等トス而シテ成效セシメタル

京都府立総合資料館所蔵

ハ原田鶴吉ノ人デアル左ニ其ノ經歷ヲ畧叙ス
 郡是製絲株式會社ハ大字青野ニアリ生絲ヲ製シ
 海外直輸出ヲ以テ目的トシ明治二十九年六月一
 日ニ設置セラレ資金九萬八千圓工女五百人ヲ以
 テ事業ヲ創始シ三十九年ニ至リテ女手百人ヲ増
 シ其ノ機關タル樂園ハ郡内到ル所ニアリ傳習所
 ハ京都府下蠶業組合ヨリ設置シ講習所ハ地方稅
 ヲ以テ三十一年ニ建テ會社ト相待テ斯業ヲ輔
 益スルトトナリ創設ノ志向ハ遂ニ大成シ内外博
 覽會共進會ノ出品アル毎ニ名譽賞牌ヲ得テ會社
 ノ商標ハ歐米市場ニ大手ヲ振ワテ通過スルノ信
 用ヲ博スルニ至レリ金額ノ割合ニハ株主ノ頭顧

多ク毎年ノ總會ニハ數百其席ニ連ナリ結算報告
 ニ耳ヲ傾クルヨリモ正宗ノ一瓶ト折詰ノ二産ニ
 舌鼓ヲカツテ半日ノ宴遊ヲ爲スヲ最娛樂トシテ
 集マル信者ヲ多シトス職工ハ寄宿生活シ浴室食
 堂宿床等具ハリ食費一日八錢三十四年トシ其ノ不足
 分ハ會社ノ補足給與トス晚餐ハ一同打揃フテ會
 食スル様イト快シ三十八年收入五十萬圓金ニテ
 一等品ハ横濱商館ノ手ヲ經テ米國ニ涉リ前後未
 嘗テ積戻カルノ否況ニ逢ハズ是レテ郡是ノ是
 ナル所ニシテ同業者ノ後ニ瞠若スル所以ナリ輕
 便鐵道ハ門前ヨリ直ニ汽車鐵道ニ通スルノ便ト
 ナリ明治三十八年九月二十三日創立二十年紀念

京都府立総合資料館所蔵

式ヲ舉行ス末會者ハ府知事以下千名ヲ超工組合
 中ノ功勞者ニ謝状ヲ呈シ組合長トシテ波多野鶴
 吉ニハ頌徳状ニ書一軸ヲ添ヘテ贈リ農務大臣
 清浦奎吾ノ告辭アリ知事ノ演説アリ全町戸毎ニ
 國旗ヲ掲ゲ町ノ出入口ニ緑門ヲ設ケ晝夜烟火
 ノ折揚ゲアリ鶴吉中上林ノ産ナレバ其ノ傳ハ上
 林村ノ部ニ出ダスベシ
 雄略天皇ノ十四年ニ漢織吳織縫衣兄弟ノ媛等來
 朝スルヲ以テ侯媛ヲ漢縫衣部トシ十六年ニ詔シ
 ラ漢部ヲ聚メ其ノ伴造ヲ定ムトアリ漢織部ヲ畧
 シテ漢部トシ漢ト綾ト同訓ナルヨリシテ綾部ト
 テシモノ乎何ハ兔モアレ絲綾織物ト往古ヨリ關

係アル地トコヲ覺ユレ
 氣候ハ此ノ國ノ北方ニ傾クヲ以テ寒威強カラザ
 ルニ非ルモ平和ノ時ヲ多シトス明治三十年六月
 十六日午後四時四十分大雷降雹シ三十二年五月
 十二日午後三時又降雹ス其ノ區域廣カリシモ被
 害無シ斯カル天變ハ此ノ地ニ於テハ希有トス
 町外和知川一帶佳景ニ富ミ又利源ニ富ム町ハ此
 ノ長流ニ沿フテ建テ字味方ニ長橋ヲ架ス町名モ
 テ橋名トス明治七年ノ創造トス舞鶴街道此所ヲ
 經テ北行ス山家街道此所ヨリ南行ス大原街道ハ
 此所ヨリ大原ニ出テ栗野ヲ過キ南栗田郡船井郡
 ノ西郡ニ至ルベシ此一帶ハ暫時小雲川ニ沿フテ

京都府立総合資料館所蔵

趨ル小雲川ハ和知川ノ一名ニシテ由良川源ナリ
 斯ク川ト縁アル文ソノ害又尠クナラズ明治四十
 年ノ水害ハ他邑ニ比スレバ較輕ク橋落キテ堤決
 セズ
 地位福知山舞鶴ノ中間ニアルヲ以テ鐵道貫通シ
 テ富カヲ増益シ經過頻繁ニシテ貨物ノ集散兵士
 ノ來往日一日ヨリ多シ京鶴線連絡セバ其ノ乘晉
 驛タルヲ以テ一層ノ繁盛ヲ見ン
 風俗ハ舊習株守ノ陋アリシガ敦厚ノ美ハ他方ニ
 勝レタリ近來ヤ、浮薄輕佻ニ傾ク
 若宮神社ハ八幡宮ニシテ町民大半此ノ生沙兒夕
 リ仁徳天皇ヲ齋キ奉リ舊曆八月十五日ヲ以テ祭

典ヲ行ヒ五臺ノ神輿ハ賑々敷ク昇キ廻ハサレ全
 町大ニ賑ヒ四方ノ村落ヨリ入り込ムモノ無數ナ
 リ
 熊野神社ハ柘並町ニアリ昔時ハ正曆寺内ニアリ
 シヲ今ノ所ニ移シ綾部權現ト唱エ來レルヲ今ノ
 名ニ改ム祭日ハ舊曆六月廿八日ニテ同月晦日水
 月祭アリ水月一ニ水無月トス川下ハ月影ノ寫ル
 ヲ拜ム古人ノ月ヲ以テ月護尊トシテ祭レル遺習
 ニヤ
 二宮岡狹立大明神社ハ青野ノ北ニアリ無格社ニ
 シテ一社ニ祠壇上ノ狛犬古リテ凄味アリ社境樹
 木ニ富ミテ神々シク齋者ヲシテ心魂冷然タラシ

ム氏子ハ青野五十戸ノ外西町裏町ノ人家コレニ
加ハル氏子ノ者ハ古来蛇蝎ノ害ヲ受ケズ之ヲ殺
スモノハ神罰アリト云フ
豊斟濟尊社同所ニアリ亦無格社ナリ境地幽深大
樺數株其ノ上ヲ葎ス末社八坂神祠ヲ葎スルモノ
五圍餘アリ土人曰フ前年此ノ一枝大風ノ爲ニ折
ラレタリ用ヒテ立舂數個ヲ造リ得タリト之ヲ指
シ示ス残枝遙ニ認ム可シ幹延ビ雲ヲ銜ク
本宮ハ宮ニアラズシテ町ノ後方ナル高地一帯ノ
地名ナリ封建當時ノ侯邸地ニシテ臣家斬ヲ並べ
タル所舊侯邸講武ノ地モ今ハ唔咩ノ聲ヲ聞ク舊
門ノ一部存シテ校門トナリ内ニ尋常高等小學幼

稚園郡立女子實業學校等アリ
明治二十三年ニハ士族ノ土着セルモノ僅ニ三戸
他ハ皆衣食ヲ逐フテ東散西離ス士族中是レゾト
指ヲ屈スルモノ寥々タルヲ内ニ一頭ヲ抽ンデ
タルヲ九鬼隆一トス攝ノ三田藩ニ生マレ當藩ノ
侯族九鬼半之丞ニ養ハレ嗣子トナル幼字ヲ好ト
呼ビ長シテ仕ヘ用人格ナリシガ廢藩後東京ニ出
デ諸官衙ニ經仕シ功勞ヲ以テ華族ニ列セラル古
器物古書畫ノ鑒識ニ長ジ歐米ニ使シテ亦外品ノ
見聞知識ヲ得遂ニ帝室ノ御用掛カリトナリ日本
ヲ隈無ク經廻リ社寺ノ古什ヲ驗定シ古美術品保
存ノ爲ニ大ニ勤メタリ従前尊外鼻内ノ風習ヲ改

京都府立総合資料館所蔵

善シ内園ニハ外方ニ勝ル工緻技倆アルヲ人々ニ知ラレタリ

本宮山ハ一ハ丘ニ過ギサレドモ眺望アリ風致アルヲ以テ公園トスルノ計畫アリ

綾部橋ハ二百二十三間隨分渡リ甲斐アル長サナレドモ旅人ノ目ヲ慰ムベキ風光ナキニ非ヌ四十

年ノ洪水ニ流失シ現今^{四十一年}夏期假橋ソノマナリ

京都府農事試験場分場ハ町ノ西北端郊ニアリ一町四段歩ノ廣袤ヲ有シ内外諸種ノ農産物ヲ栽培

セリ著者ノ看ヲ以テ感心シタルハ此ノ寒キ地ニアリテ克ク温熱帯地産物ヲ育ツルニアリ私設農園モ亦看ルニ足ル村上國吉ノ設置ニ係カル

洋牛十五六頭ヲ養ヘリ

京都府立総合資料館所蔵

綾部町



城丹蠶業講習所



郡是製絲株式會社
(長岡野多波長社同上)

京都府立総合資料館所蔵

並木眺望



國母陛下行啓始末畧載
 大正六年十一月十六日 午前八時京都二條離宮御
 祭九時五十七分綾部御着
 奉迎 何鹿郡ト記セル提灯ヲ山家驛ヲ中心トシ
 テ一町毎二十本ヲ鐵道沿線ノ左側ニ建ツ 綾部
 驛ヲ中心トシテ並松上手マデ十八本ノ奉迎提灯
 ヲ建ツ 驛前ニ高サ四間幅三間ノ大緑門ヲ建ツ
 菊花ノ御紋章ト奉迎ノ字ヲ菊花モテ作ル 御道
 筋ハ毎戸浅黄ト白ノ幔幕ヲ一定ニ張ル 全町國
 旗ヲ掲揚ス 烟花五分毎ニ驛傍及ヒ寺山ニテ打
 揚グ 郡是製絲會社前緑門ヲ建ツ高サ二十尺幅
 十八尺 菊花ニテ奉迎ノ額ニ面ヲ兩側ニ掲ケ頂

馬皮志

上二國旗社旗ヲ掲ゲ 内外幔幕ヲ以テ覆フ
 御鹵簿 第三部式 前驅警部 皇后旗 近衛將校 御
 馬車 近衛將校 女官 皇后宮太夫 皇后宮主
 事 侍醫 後驅警部 列外 木内京都府知事以下四
 十餘名 駟車
 廣小路、左右奉迎者 各町村長 府郡部會議員
 勸業三團體員 官公署員 神職 諸宗教師 醫
 師會 町名譽員 將校 時志看護愛國婦人等
 濟生會 同仁會 赤十字社員 左郷現役將校
 在郷軍人公會代表者三千三百餘名 郡内町村立
 小學校職員生徒一萬餘 八十歳以上ノ高齢者廢
 兵戰病死將卒遺族

奉迎者 農務局長 場長 支場長 御先導場長
 執レテ拜謁
 名覽 蠶室 場長説明 便殿入御拜謁 郡長
 支部長 支場技師 藍綬章拜受者 實業女子學
 校長 城丹講習所長 蠶種製造所技師
 郡是製絲會社 午前土時着御 郡是社員諸學校職員生
 徒 製絲工女 青年會員外數團體
 拜謁 波多野社長 御晝食 午後 社長御先導
 獻上品 荆桑盆栽 魯桑盆栽 輸出白繭生絲
 玉繭生絲各一拵
 郡獻上品 女教員製真綿 郡治現勢概要 町獻
 上品 御所柿 栗

町皮志



並松
雪中

登業試験場支場献上品 一代雜種ノ繭 原種ノ
 繭 四箱
 御座所御小憩 午後二時半御發車 四時三十分
 二條驛御着御還宮

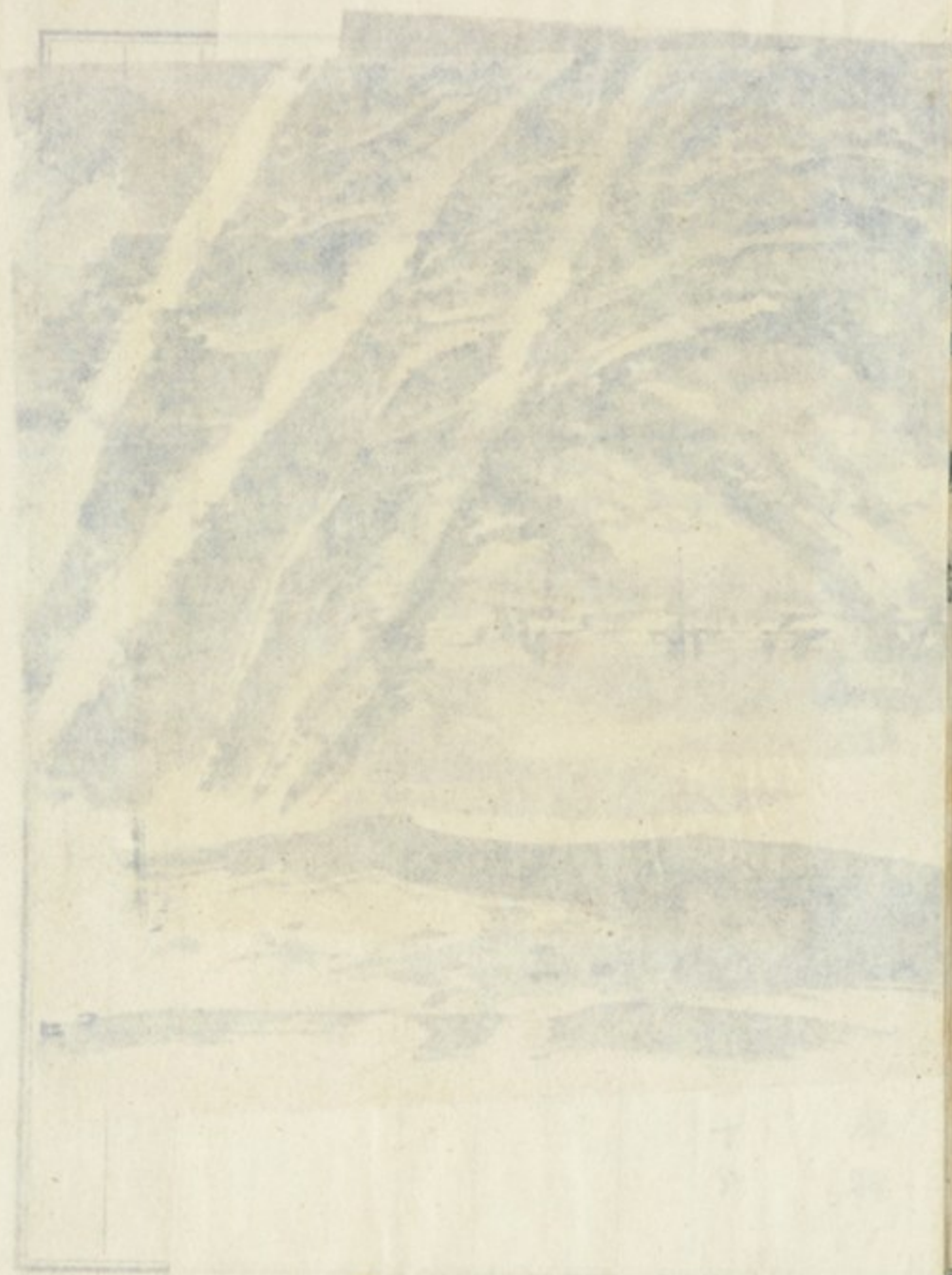
京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵



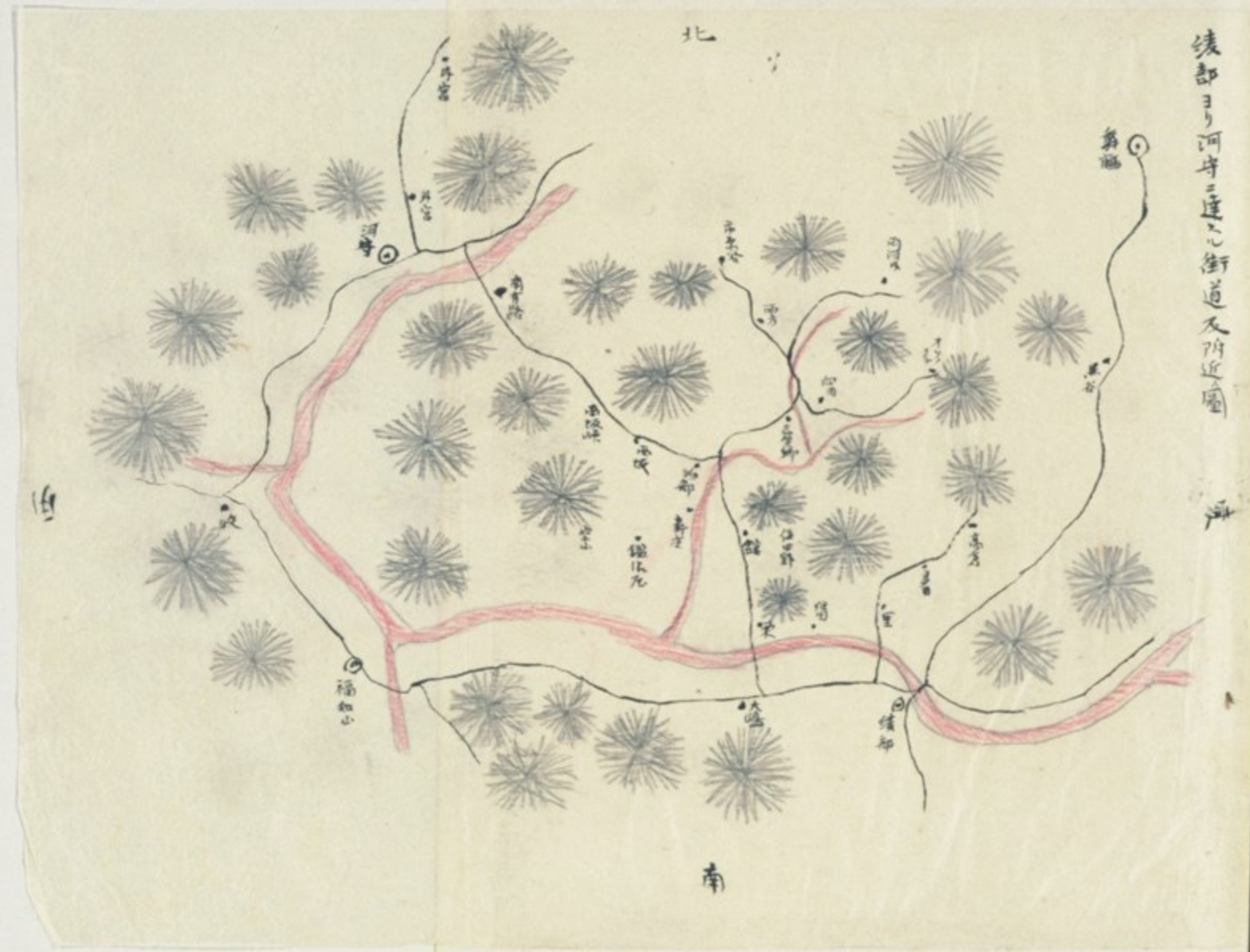
初冬の綾部 (其三) 「田のルベト」



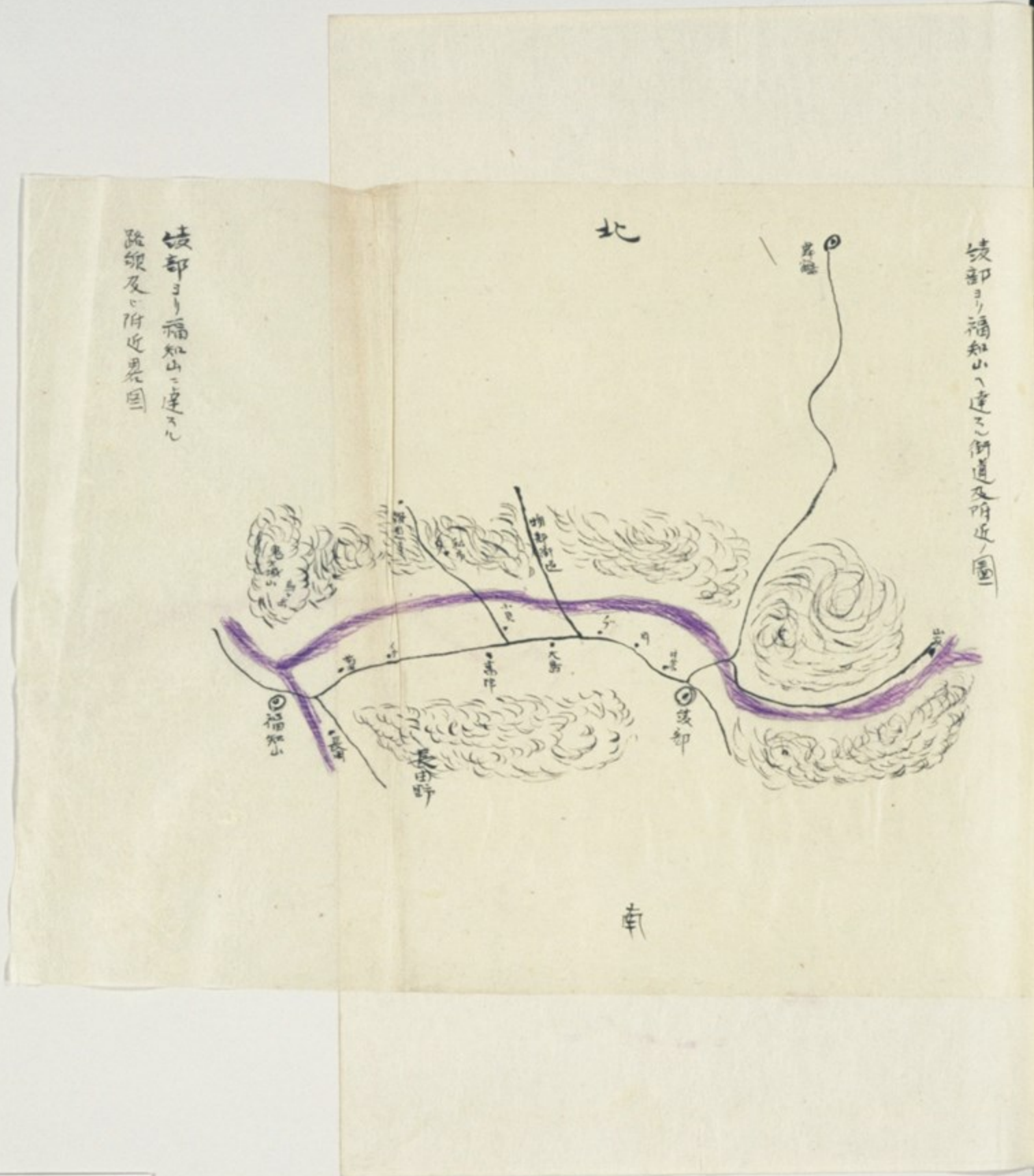


後部ヨリ河守三連ノ街道及附近圖

京都府立総合資料館所蔵

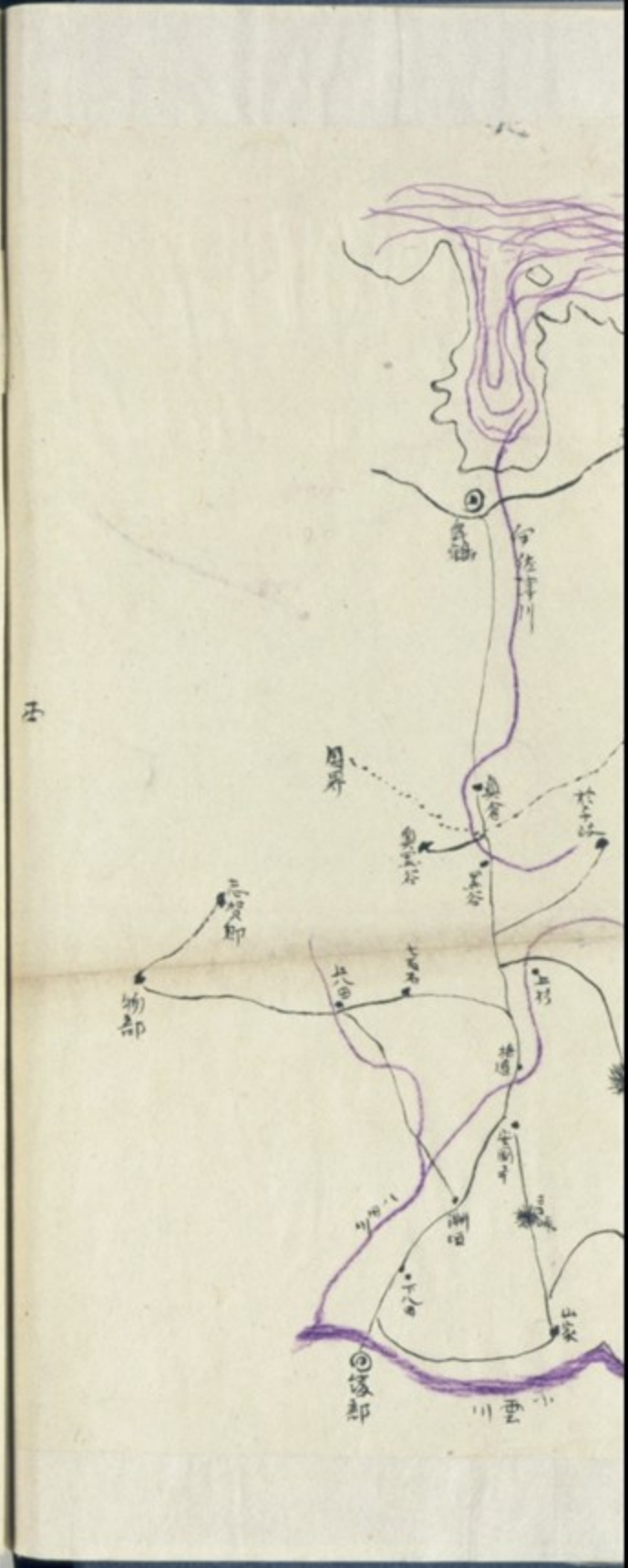


京都府立総合資料館所蔵



岐部より福知山へ連る
街道及附近の圖

岐部より福知山へ連る
街道及附近の圖



五

京都府立総合資料館所蔵

那智山正曆寺ハ真言宗ニシテ高野山ホトス並松
町須知山ノ口ニアリ空也上人ノ開基トス須知山
ノ靈山ニ觀音堂ヲ創立セシヲ聖樂上人中ノ堂ニ
移シタリ早魃ノ虐ヲ爲スニ際シ上人天ニ禱リテ
甘雨ヲ獲シカバ朝廷之ヲ賞シ年號モテ寺號トナ
スノ特許ヲ與ヘ延曆ノ比叡山ニ於ケルガ如クニ
ス正曆ハ今ヨリ遡リ九百餘年前一條天皇ノ御宇
ニ當ル今ノ地ニ移轉シタルハ後年ノトトカヤ
本宮新宮及ビ那智ノ瀑布等ハ紀伊國ノ名稱ヲモ
地勢ヲモ取り来レルモノ升ハ小松内府直盛ガ此
ノ地ヲ領セシ時ニ此處ニ熊野ノ地相アリトテ先
ツ熊野ノ祠ヲ立テタリ平氏ガ代々熊野權現ヲ信

仰シタルヲハ入口ニアリ歴史ニアル通リナリシ
ヲ以テ平氏ノ都ニアラシ限リハ立派ナリシモ西
海没落ノ後ハ之ヲ修理スルモノモ無ク年ト共ニ
老イ朽チヌルヲ再造ノ企ヲナスモノ出来テ朽ヲ
鳩メ礎ヲ定メシヲ天正ノ亂離ニ端無クモ福知山
築城ノ用ニ當ラレヌ九鬼氏ノ来リ封ニ就クヤ田
園山林ヲ寄附シエヲ興シ役ヲ督シテ莊嚴ソノ古
ニ髣髴スルヲ得タリ是ニ於テ守小雲川並松ノ風
光ハ社頭ノ觀ヲ壯シニス本社ハ元ト寺内ニアリ
シヲ外ニ出シテ神佛ノ混淆ヲ離レシメタリ陰曆
六月晦日ノ祭式ナルヲ以テ之水無月祭ト呼ブ賽
者四方ヨリ麈集シ晝夜往來絶エズ

正曆寺目下ノ形ハ本堂五間四面庫裡八間ニ五間
位牌堂四間ニ三間鐘樓アリ門アリ
本尊十一面觀音 不動尊等アリ不動尊ハ美術品
トシテ鑑査状ヲ附セラル 寶物數アル内ニ涅槃
像ハ筆者不詳ナルガ因寶編入トナリ奈良博物館
ニ保存セラレ
兩丹ニ新四國ナルモノアリテ四國參リヲ爲サン
トシテモ能ハサルモノガ廻拜スル所トス當山ヲ
以テ第一番トシ漸次相及ブ其ノ創始ハ明治十五
年ノ頃當寺ノ先住岩崎信惠丹後華藏院住僧村上
祐蓮及ビ綾部士族安保忠晃等發起シ宗旨ヲ論セ
ズ門地アル寺院ヲ選ビ八十八個所ヲ定メ弘法ノ

像ヲ安置スルニ起リ甬來春秋ニ參拜スルモノ少
カラズ
本寺ハ高地ニアリテ音無瀬稻並木ヲ俯瞰シ四山
來リテ笑媚ヲ呈ス一臨スルノ値アリ納涼ニ看雪
ニ春風秋月往ク所トシテ佳ナラザル莫シ惜ムベ
シ夏晚ハ淫注ノ俗韻ニ充タサル、
當町ノ寺院ハ正曆寺隆興寺ノ外臨濟ニラ西福院
寶積寺心田院寶住寺アリ日蓮宗ニハ了圓寺アリ
真言宗ノ千手院アリテ八寺トス
隆興寺ハ瑞應山ト拜ス大字神宮寺小字上藤山ニ
アリ臨濟宗妙心寺末一等地ナリ寛永十年三月九
鬼隆季公移封ニ際シ創立セラル寺拜ハ其ノ祖父

ナル大隅守嘉隆ノ法名ヨリ取ル法名ヲ隆興寺殿
恭叟常安大居士ト云フ開山ハ妙心寺塔中太心院
五世芳澤和尚法子秀巖守託トス本尊釋迦如來ハ
隆季公ノ室隆生院ノ念持佛ナリ觀音堂ニ白衣觀
音アリ殿立ノ地藏ハ弘法ノ作ト言ヒ傳フ善光寺
三尊彌陀西國三十三所觀音文珠花山院西園頓特
像等モ同作ト云フ徳川三代將軍家光ヨリ賜地セ
ラレタルヲ以テ寄進狀ニ左ノ文アリ大猷院ハ三
代將軍ノ法孫ニシテ嚴有院ハ其ノ次ナリ

丹波國何鹿郡漢部庄高拾石并寺中山林

竹木ノ事焉

大猷院殿御靈供末永奉寄進者勤行不可有怠

慢者也

承應三甲午七月廿日 九鬼式部少輔

隆興寺

大猷院殿 最有院殿御靈供領高拾石并
寺中山林等事所奉寄進也併事勤行無
怠慢可有申執行快如件

延寶九年五月八日 隆常 花押

綾部 隆興寺

代々ノ寄附状アリ 維新ノ際私領廢止ノ際土地
及ビ高ヲ返上セシガ藤山全部ト舊高トハ下渡サ
レタリ
和尚談 遠方カラ御參詣下サレタノデスカ ハア

舊領主ノ九鬼大隅守殿ト御交際ガアツタノデス
カ 拙僧ハ斯ノ老年マデ當地ニ居リ當寺ノ任職
トナリマシタ 勿論維新前カラ居タテ故當地ノ
ヲハ能ク知ツテ居マス 左様ハ藩デハアリマシ
タガ大名ノ菩提所ダケノヲハアリマシテ本堂客
殿庫裏門庭マデハサツパリト揃フテ居マシタガ
本堂ハ賣却スルマデ貧乏ニナリマシタ 二束三文
ニ 其ノ譯デスカ 九鬼公ハ維新後京都ニ居ラレ
マシタガ耶蘇敷ニナラレマシテ同志社ハ加入セ
ラレマシタ デハ君モ御同様デスカッレデハ拙
僧ヨリカ能ク御兼知テシヨリが其シカラハ御先
祖ヤ寺ノヲハ一切御構無し何分殿様ノ御寺ト申

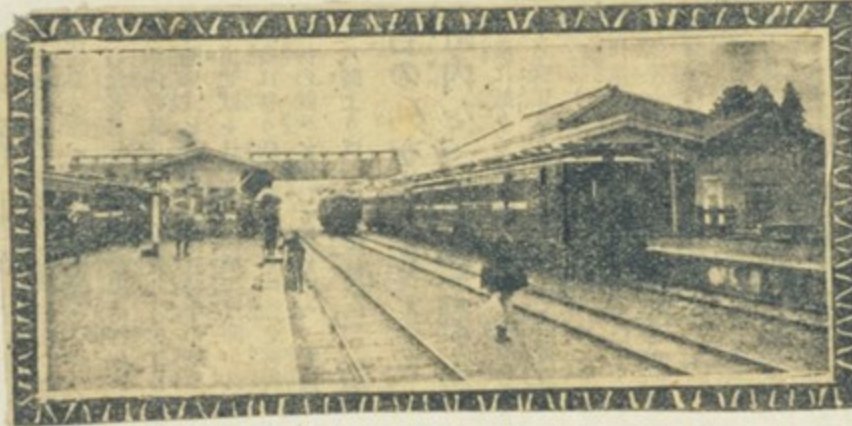
スノテ家中ノ外ニハ一箇半箇ノ檀越ハ無シ家中
ト申シテモ四方ハ散亂シ齋米持テクル者ハ十中
ノ一ニトナリ且又九鬼公ヨリノ寄附田地モ返ヘ
セ山林モ返ヘセトアリマシテ喰ヘ兼ヌル寺トナ
リマシタ 左様田地ハ高十石デ山林ハ随分廣フ
ゴザリマシタ 居残リ士族が見兼テ寄合ヲシタ
ガ金ノ出所ガ無シ和尚ガ内職デモシテ活計ノ道
ヲ立テヨト勸メマシタノデ寺賄ヒ婆々ニ相談シ
足袋造リヲ思ヒ附キ世話方カラ士族一同ハ觸レ
廻ハシ足袋ハ総テ寺ニテ買フベク取極メ白木綿
ニ反買入レ數足括ヘ廣告ガテラ數十家ハ持タセ
テ遣リマシタ迄ハ善カツタガ更ニ買ヒニ来ルモ

ノガ無イ 其ノ筈シヤ 所デ買フタ方ガ履キ善
イシ殿様ノ御寺ジヤモノ小言モ出サレズ直切り
モナラヌト申シテ居ルトノ丁 其ノ筈デス家老
衆デサヘ和尚ニハ次ノ間カラ挨拶ヲスルノ資格
デシタ故小言ヤ直切りノ爲ニハ得来ル丁ハ出来
ヌノモ忝デス 是レデ足袋ハ失敗ニ歸シタノデ
ス 今度ハ和尚ニ托鉢ニ出ヨトノ丁デ拙僧モ出
掛ケマシタ 士族ノ方ヘ往クモ入レルモノハ無
カコト思ヒ百姓家ヘ出掛ケヨリト言ヒ初メマ
シタガ入レマセヌ ソコデ一軒々々戸別訪問ト出
懸ケタ所 追ワテ私方カラ差シ上ゲマスルト言
フテ一攫ミノ米モ入レマセヌ 故ニ己ム無ク歸

リマシタラ 或ルモノガ拙僧ヲ途ニ要シ申スニ
ハ 御米ヲ入レマセヌノハ御菩提所ノ和尚様ガ
吾々ノ家ノ表ニ立ツテ下サワテハ御アシラヒニ
困リマヌシマサカ一握リノ米ヲ入レル譯ニモナ
リマセヌシ午ニナレバ御飯ヲ差シ上ゲズニハ置
カレマセヌレ甚迷惑ニ存ジ外ノデソレカラソレ
ハト申シ次キマシテ今日ハ何一ツ差シ上ケヌ
ト致シタ譯デゴザリマスト是レニテ托鉢モ失敗
ニ歸レマシタ下度殿様モ異教ノ主義モ御判カリ
ニ爲リ佛教ニ真味ガ多イトノ下ニテ京都相國寺
ノ獨園禪師ニ參禪セラレタノデ寺院ノ願意モ聞
カルベキ機會アリト士族惣代ト拙僧トガ舊寄附

ノ不動産再寄附ヲ願ヒ出デ聞キ濟トナリ南來少
々ツ、寺ノ融通加利ク様ニナリマシタガ大修覆
ハ出来マセンデシタ是レモ願ヒ出マシタガ御承
知ニナリマセンノデ前般申レタ通り本堂ノニ東
三文賣却トナツタノデス當時廢佛說全盛ノ極點
ナノテ寺ナド買アモノハ無シ古木焚モノトナル
ヨリ外ハアリマセナンダノデス 所ガ拙僧ガ風
ト思ヒ附キニ水上市高良カラ持テ歸リタル白衣
觀音ト京都ヨリ持歸リタル弘法大師ノ像トヲ祭
リマシタヲ參詣人が出来テ信者三十人が檀家ニ
ナリ喜捨金モ集マリ只今ノ體ニマデ溜キ附ケマ
シタノシヤ

京都府立総合資料館所蔵



改築せる綾部驛

丹波
河内
備前

汽車全通後ノ綾部

新建ノ町役場 費額七千圓

蠶業講習所 養蠶室新築ノ上更ニ製絲部ノ新設

アリ

遊船數隻ヲ由良川ニ浮ベ京阪ノ末遊客ヲ延ク

阪鶴沿道ニ於ケル一停車場ナリニモ今ハ京鶴線

ノ通鎖點トナレリ

京都ヨリ舞鶴港ニ赴クモノト兩丹地方ヨリ京都

ニ出デントスル者ノ象碁ノ要所トナレリ

新構内ノ土地面積ニ萬六千六百坪

プラットホーム三所 南ト中央ハ京阪鶴線ノ象

降場 北部ハ和田線象降場豫定驛ノ改築費一萬

三千圓 福知山驛ノ一部ヲ移シ来リ擴張ス

長橋百四十尺 京都ヨリ坂鶴線ニテ百二十二哩八分ノ近辺線ニ
今ハ五十三哩ヲ減シ百四十三哩トナレリ

當所ヨリ園部ニ達スルノ鐵道工事ハ三十九年ヨリ五個年ノ繼續事業トシテ五百十萬圓ノ費用ヲ支出スルヲニテ三十九年度中ハ起工ノ準備ニ時日ヲ費シ翌四十年ヨリ線路ヲ五區ニ分チ各工區毎ニ請負ハシメ建築材敷設材等ヲ運搬シ今ヤ工軍ニ着手セントスル折柄大雨連日水流湍々トシテ至リ用材ノ過半ヲ流失シ一大頓挫ス之ガ爲ニ再度ノ準備時期ニ入り諸材集積ノ爲ニ時日ヲ費シ全カヲ竭ヒテ築道ニ預算ノ時期ニ大ナル狂ヒヲ生セリ

右鐵道ニ關スル用地トシテ本郡ヨリ使用ニ供シタルモノハ田六町二段三畝步餘 畑二町七段六畝餘 山林二町九段六畝餘 原野三段九畝餘 宅地六段四畝餘 墓地一畝十九步ニシテ惣段別十三町一畝步餘 筆數五百九十九個 土地代金二萬七千六百十圓餘 家屋移轉料地上物件損害補償金壹萬四千四百四十五圓餘 合計四萬二千五十五圓餘 但石材山三筆ハ未算中ニアリ 鐵道附帶工事 橋梁長百八十間以下ノモノ七ヶ所 開梁ニヶ所 アーチ十六個所 下水二十六ヶ所 石蓋開梁九ヶ所 放水管八ヶ所 大管七十ヶ所 踏切八十二ヶ所 陸道二百八十間一ヶ所 二百

九十間一ヶ所

京鶴鐵道ニ就キ

發起者北垣國道男 明治十四年 高知縣知事ヨリ京都府知事トナリ 十九年着手其ノ勤機 露國ノ東洋政策ナル西伯利亞ヲ貫キ浦塩斯徳ニ達スル鐵道敷設ヲ決議シタルニ在リ 其ノ理ハ露國ガ農高工業ヨリ軍事上ノ發達ニヨリ清韓ヲ併合シタラシニハ吾人ノ家國ニ如何ナル影響ヲ生ズベキヤ之ニ對抗スルノ多々ナルベキモ先ハ運輸ノ便ヲ安全ノ地ニ求メザル可ラザルニ在リ 是ニ於テ鐵道問答ナル一小冊子ヲ著シテ四方ニ示シタリ 是ニ於テ其ノ工事ヲ出願スル鐵道會社

トモ言フベキモノ五所ニ顯レ競フテ己ガ手ニ落サントス 内務省ハ阪鶴線京鶴線ノ出願ニ許可ヲ與フ 技師田邊朝郎調査ノ結果鐵道多々アル中ノ難工事ノ所タルヲ報ス 然リト雖鐵道ノ必要ト軍事上最大利路タルノ認識ガ世人ノ腦裡ヲ刺撃シ一日モ成效ノ早カラシムヲ祈メタリ 三十九年ニ至リ園部ニ至リテ中止シタルハ一部野心家ノ乘スル所トナリテ非運ニ陥リタルナリキ之ヲ國家經營ニ移シ次第ニ工事ノ進行ヲ見 四十二年八月廿五日開通ヲ舉行スルニ至ル 軍事上ヨリノ觀察 海岸ヲ走ル鐵道濃車ハ敵彈ノ横打ヲ蒙ルヲ無シト言フ可ラズ山間輸送ニハ

京都府立総合資料館所蔵

此ノ憂ヲ省ク 舞鶴方面物資ノ需用ハ之ヲ大阪ヨリ供給ニケルモ今ヤ京都ヨリ安全ノ地ヲ經過シ来ルヲ得 南北兩海ニ敵艦ヲ集合シタル場合アリシニハ此ノ山間鐵道ノ必要ハ一抄時間ニ欽如ス可ラザルモノトス 敦賀舞鶴ハ地勢上同等ノ地位ヲ有スルモノナルニ因リ第十師團ハ舞鶴附近ノ篠山福知山ニ聯隊ヲ置キ第十六團ハ敦賀ニ歩兵第十九聯隊ヲ設ク而シテ京都ヨリ来往スル軍車上交通ニ利便ナルヲ言フヲ待タズ 輸送一時間ノ遅速ハ數時間乃至數日間ノ遅速ヲ来スラアレバナナリ 日本北方面ノ警備ニハ莫カル可ラザル所タリ

刀鍛冶

綾部一家ト呼バレル者 長末 元徳頃一説元暦頃 幸貞 長末子 来國俊 畠住来國一第

来國光 國俊子 國俊 國光子

正國 粟田國吉第子 正次 正國子 幸次 正次子 幸貞 幸次子 光助 幸次子
 國定 正國弟 天福文永ノ頃来住國延第子 元久二年生 建長七年没 年五十二

有正同名十二人アリ

光包 有正 重利

出来上ノ分 長末 佐伯長末ト呼ブ 来國俊 光助 光包 有正 重利
出来中ノ分 幸貞 國光 幸次

出来下ノ分 國俊 正國 正次

一説 幸成 幸次 粟田口正光第子 建武頃 幸貞 延久頃 但馬ニ行ク 幸貞 明徳頃 光包 應永頃

光助 永享頃

吉次 應永浪 吉貞弟子

正次 正應元正浪 國定弟子
文曆年中生 文永四年没年三十四

一説 正國ハ正次ノ弟子 正應延慶ノ浪來住メ弘長二年生 正應五年没

國真 正國弟子 文永十年生 文保二年没年六十四

國實 國真弟子 同時代年齒詳ナラズ

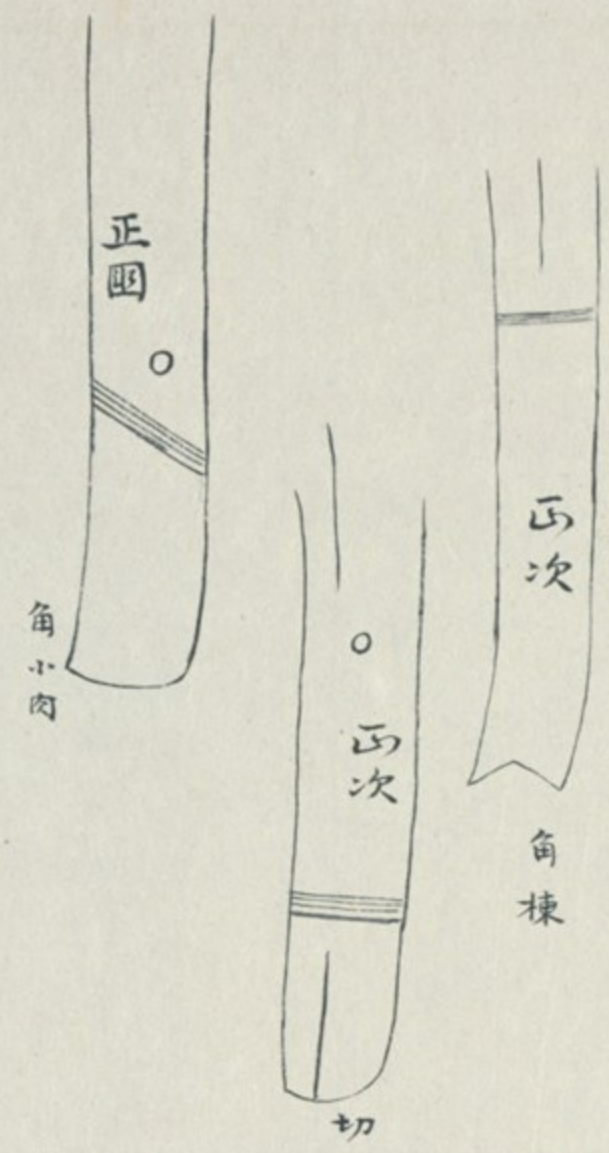
右二人同所住カ他所カ未詳 附記メ

同名鍛冶 幸國 綾部住古刀 幸貞五人 駿河ニ但馬ニ豊前ニ
一人ハ長門住 豊後ニ綾部ニ一 幸次三人 備中ニ
綾部ニ一

彫工系圖 金子吉三正——義貞——吉次——忠長——利興——義光——

——義則——義安

吉之丞ハ此地ノ産ニシテ後ニ京住メ 利興ハ紀伊藩ニ聘セラレ 義光ハ後ニ怒元ト銘メ
上手ナリ 義則ハ菱後藤近江守ノ嗣トナリ手作ノ御劔ヲ帝室ニ納ム 但劍ノ身ハ別ナ
リ 装飾ヲ爲セシナリ



俳諧師沾山 通稱詳ナラズ當所ノ産ト云ヒ又ハ
中年當所ニ假寓セシモノトモ傳フ其ノ最後ノ住
所ハ江戸ナリ薙髮シテ桂ニ房ト稱ス延寶八年没
ス麓之道濱松枝東千白ノ著アリ水間沾徳ヲ師ト
シ初名瓦丁ソノ孫行軒軒ヲ改メ沾山トス燕村ノ
伊勢太神宮造晉遷宮事曰食米所々注文漢部御厨
内宮上分十石
貞觀七年九月廿日漢部福刀自伉儷亡後二十二年
獨居虛室守節是真節婦特加優辭叙位ニ階免戸内
租以表門閭
仁和三年六月五日漢部妹刀自賣生年十四適秦貞
雄生二男一女貞雄死後歷三十二年常着素服獨居

母
殿
志

虚室無復再醮之情均養男女譬如尸鳩國司申請以爲節婦表其門閭敕叙位二階免户内田租

産物 米麥綿紬桑蠶絲蠶繭綿帛丈長紙

右丈長紙ハ從前紙高小間物高及ビ女髮結師等ニ

テ單ニ丈長ト云ヒタルモノ奉書紙ノ類ニシテ細

長ク切リ婦女子ノ髻結ノ用料トス越前府中ノ産

ヲ以テ最上トシ當所ノ産コレニ亞グ其ノ他ハ下

等トシ下婢ノ頭ニ上ルノミ今ヤ女ノ髮モ昔ト其

ノ結方ヲ異ニセシヨリ丈長ノ需要日ニ減シ年ニ

減ビ行クノ非運ニ向ヘリ

綿ハ徳川幕府ノ三白政策ノ一ツトテ農事獎勵保

護中ノ物タリ三白トハ米綿塩ニシテ之ヲ講ジテ

人民ヲ鼓舞誘掖シタルハ彼ノ佐藤信淵ガ天下遊

歴ノ途次天保十年九鬼侯ノ聘ニ應シ封内ヲ巡視

シ暫ク足ラ此ノ地ニ留メタルヨリ綿花ノ新産績

起シ一大富源トナリ近年ニ至ル迄数十年氏庶ソ

ノ徳澤ニ浴セリ又封内ニ社倉ヲ設ケシメタリ今

ヤ農況一變シ綿産地ハ桑樹圃トナリ一年四回ノ

收穫ニ鼓腹スルノ時勢トナリ了シマ 養蠶製絲

ノ盛況ニ伴フテ年々需要スル所ノ金額從フテ増

加シ五六月ニ至レバ日々數百千圓ノ運動ヲ起シ

シ銀行ノ内外人迹ヲ断タズ質屋ノ多キモ名物ノ

一二居ル开ハ此ノ時期ニ於ケル工夫工女ノ小資

本運轉融通ノ爲メトカヤ

領主ノ沿革 王政當時ノ情况ハ麴乎トシテ知ル
ニ由無シ傳フル所ヲ綜合スルニ所々點々村落散
在シタルニ過キ不應仁ノ亂ニハ何處モ同ニ兵燹
ニ罹カリシ史談アリ室町氏ニ至リテ別所豊後守
ナルモノヲシテ此ノ地ヲ鎮撫セシメタリト云フ
此ノ別所ナルモノハ土豪ニシテ土兵ノ頭分ナリ
シモノニテ例ノ室町氏姑息ノ招撫方モテ臣籍ニ
加ハ以テ一時ノ偷安ヲ圖リシモノ歟波多野氏ノ
本國ヲ領取スルヤ此ノ地方モ亦其ノ有ニ歸シタ
ルガ天正六年羽柴秀吉播磨ニ入り木下秀長ヲシ
テ北面ヲ鎮定セシム秀長乃チ江師ヲ以テ但馬ヨ
リ丹波ニ入り數戰シテ此所ニ來リ波多野方ノ諸

砦ヲ拔キ更ニ八上ニ向テ翌年江田行範偃起シテ
城郭ヲ造築シテ抗拒ヲ試ミタルモ明智勢ニ攻メ
立テテレ織田家ノ有ニ歸ス 別所主水正室宗ノ
先ハ播磨三木ノ城主ナリ此ノ地ト別所ト従前ノ
因由アルヲ以テ封ヲ移サレ室宗同十六年卒シテ
吉沼嗣ク父子領額一萬五千石 天下徳川氏ニ歸
シテ更ニ之ニ臣隨シタリシガ東照公薨後江戶參
觀ニ急リ遊政ニ耽溺セシカバ罰命下リテ父子此
ノ地ヲ退去シ寛永年間マテ數十星霜ヲ経テ領主
無ク幕府ノ代官政事ナリシガ九鬼氏新ニ此ノ地
方領主トナル事下文ニ出ダス
藩臣近藤勝田ハ文政十年正月ヲ以テ生まル少年

丹波
志

ヨリ勤仕シ諸役ニ服シ壯年代官トナリ土木ノ事ヲ以テ已ガ仕トシ民瘼ヲ救フヲ以テ心トス嘉永元年決然意ヲ建テ毎年水旱ノ爲ニ村瓦害ニ遭ヒ民病ニ君困ムノ弊ヲ救ハントシ日夜經畫スルノ際其ノ季年ヨリ安政年間又復洪水アリテ租米ノ減スルヲ過甚ナル而已ナラズ倉庫ヲ啓キ餓民ノ窮厄ヲ救フ等藩ノ財政方ニ支ヘザラントス是ニ於テカ水利ノ事起コル

天與ノ勢ニ由リ漾濬斷エザルノ長流アリテ天田郡ノ興部落ニ及ブ養ハルノ所ノ田畦千有餘町歩ソノ導水方タルヤ堰セズシテ車ス水勢ノ緩ナルヲ以テ車勢モ亦緩ニ均勢輸灌ス農人勞セズ旱時旱ヲ訴ヘズ夏天雩祭ノ丁ヲ言ハズ具レ誰シカ之ヲ計レル代官近藤勝由ソノ仁ナリ代官ノ職タル民治ヲ主トス以爲ヘラク地肥ヘテ農瘠セ租納ラズシテ官敵ス何ノ法ヲ用ヒテ此ノ弊ヲ醫セシ守ト一々此ノ事ヲ思フヤ寢食ヲ忘ル公務ノ次テ渡ヲ過ギ橋上ヨリ水車ノ轉運シ人カヲ勞セズシテ淀川ノ水淀候ノ苑ニ灌グヲ看テ曰ハク斯ノ法移シテ吾ガ公田ヲ利スベシト歸來苦心慘澹間ヲ

偷ミテ獨行シ水勢ト地理ヲ并セ考ヘ晝行夜思遂ニ決然之ヲ司政者ニ謀リ圖ヲ示シ算ヲ運テ復々遺漏無シ司政者之ヲ君前ニ議シ數閱月ニシテ許命下リ慶應三年二月廿八日起工シ三月八日終工ス其ノ神速竣工シタルハ以テ心算ノ深キト役事ノ巧ナルヲ見ルベシ碑アリ川上ニアリ高廿五尺ニ礎コレヲ支テ彫文左ノ如シ

延袤新溝之記

此溝者係慶應三年我綾部藩代官近藤勝由君之所經畫抑和知川沿流至綾部稍緩濶沿岸屈曲至大嶋村凡里餘此間有三堰其首者曰綾部堰次栗村次天田；；堰在大嶋村畔岸而有此稱者其共

設觀音寺興之二村以屬天田郡也此川夏秋之交洪水暴漲屢壞堰埭埭如天田堰被害類數修工多費埭下村民之常所勞苦也嘉安之間為殊甚君嘗有心算此年始獻通溝廢堰策藩主嘉納之乃令君與埭下二村之地頭安倍氏小堀氏之吏等相商往相其地偶有訛此地確恐不成工不如止之為愈衆論百出君毅焉溝而所設閘樋啓閉以便工成既水々溶々焉流而數條小溝亦悉湊于是涓滴不洩水星倍蓰于前日南岸又拓新田數頃思此舉一小工車耳然不以小為易察利害考得失遂能遺此民福千萬世噫非君巧土木而勇決處之焉能如斯乎今茲壬申春有志者相謀欲刻石以傳此事囑文余因

略記其所見明治十年七八月大水壞首埭毀極門
衆議請君托修工事君經畫施新工三旬而竣焉其
構造如現存于今日謂其工事之難不前日之比而
省其冗費者若干噫君之爲民竭力者其亦如是也
因叙其概畧併記于此

明治廿五年癸卯集辰八月上浣

從八位官崎清風撰并書

灌漑段別百三十町歩ト百七十町歩トニ涉ル綾部
堰コレナリ水路延長ニ里餘明治十年ノ洪水ニ損
壞ヲ生ズ勝由又之ヲ修繕シテ再造ノ功全ク成リ
人民更ニ其ノ慶ニ浴ス三十四年九月歿ス齡七十
五此ノ人ヲシテ幕府又ハ大藩ニ臣隸タラシメナ
バ其ノ效績ヤ又一層大ナリシナラン歟

傳云原惣右衛門丹波後部黒江村人移下平太左衛門子知名ヲ平太郎ト云フ

ト然ルニ綾部及ビ其ノ近傍ニ黒江村ノ地アルヲ
聞カズ類似ノ者モ聞カズ遺憾ノトトス幼弱ノ頃
ヨリ文武兩道ニ志シ長子ニ生シナガラ家督ヲ妹
ニ譲リ修行ニ廻國ラゾ初メケル諸方巡行ノ際大
及ニ入り順慶町ノ梅屋友七方ニ逗留中水練スル
ニハ適當ノ時ト所トナレバ折々大川ニ於テ浮沉
ヲ試ムル處ハ播州赤穂ノ城主淺野采女正長友參
觀シテ江戸ヨリノ返ルサ本家安藝ノ國主淺野家
ノ藏屋鋪ニ立寄ラントテ大川ノ橋上ヲ馬上ニテ
過ギル時一陣ノ颼風吹キ来リ采女正が被レル騎
者笠ヲ浚ヘテ波上ニ墜トサントス平太郎之ヲ看
ルヤ立泳シツ、片手ニ其ノ笠ヲ受ケ其ノ儘岸邊

二近ヅキ之ヲ供ノ衆ニ與ヘントス供頭某進ニデ
其筮ヲ受ケ謝辭ヲ述ベ懇ニ其ノ住所氏名ヲ問ヒ
明日藏屋敷へ迎ヘントノ約束シテ別レ又翌朝迎
人ノ案内ニテ目見ノ式モ濟ミ平太郎ノ履歷ヲモ
問ハレ左アラバ家ト一勝負セヨトノ命アリ供士
ノ内ヨリ選ミ出サレテ立チ合フ當時ノ劍術ハ今
ノトハ多少相異スル點アリ开ハ面小手胴ナドヲ
身ニ着セズ單ニ鉢巻袴股立ニテ木刀ノ打合ナリ
因テ旅中ニハアトド何時ニテモ出来ル家臣若士
内ナル某ニ本ヲ讓リニ本ヲ占メタレバ長友ハ其
ノ義アリ情アルモノト見テ取り是非共家来ニ召
シ抱ヘント望マレ新知五十石ニテ原惣右衛門元

辰ト名乗ラテ因元へ召シ連レ家屋敷諸道具マデ
モ賜ハリタリ其ノ原姓ハ蓋シ士分ノ家ニテ絶エ
タルモノ、跡目ヲ立テタル故トカヤ此ノ惣右衛
門ノ性格ハ落着クノ一點ニアリ程能ク致ソウノ
一語ハ大切ナル場合イッモ其ノ口ヨリ出デ眼中
ニ人無キ堀部安兵衛スラ心底此ノ人ニハ敬服セ
リト云フ 頃ハ徳川幕府全盛ノ時上下安逸華奢
風流士氣ハ振ハズ押シナベテ遊惰ニ月日ヲ送ル
最中藤耳ニ水ノ千代田城中又偏ノ沙汰开ハ元祿
十四年ノ春松ノ廊下ニ於テ平生重ナル鬱憤ヲ一
刀ノ下ニ晴ラサントシテ遂ケ得ズ捕ハレタルハ
浅野工匠頭長矩ニテ惣右衛門ヨリハニ代目ノ主

母被誌

君相手ハ檢人高家ノ第一座ナル吉良上野々殿
中ニ於テ私ノ意趣モテ又偏ニ及ブノ廉ヲ以テ即
日切腹具ノ相手ハ差構無シトノ申渡シ主家ハ城
亡城家老職ノ大野九郎兵衛ハ城内ニアル軍用貯
蓄金拾參萬六千兩ノ分配ニ早クモ目ヲ附ケ高割
ニセシトノ説ニ反對シ大石良雄ト共ニ頭割説ヲ
主張シ公平ナル論ヲ立テタルハ元辰デアル扱モ
元祿十五年十月十三日山科ナル大石良雄ノ假住
居ヲ辞シ久シ振リニテ故郷ノ母ノ安慰ヲ爲シ且
ハ生別死別ヲ具レト無ク爲サバヤト赤穂ニ下リ
母ニ面會シ且言フ様ハ或ハ大名ヨリノ召シ抱ヘ
アルニ由リ近日癸足シテ江戸ニ赴クノ意ヲ語ゲ

來春ハ迎ヒノモノ參ラスベケレバ夫レ迄ハ無沙
汰スル旨ヲ演ベ懷中ヨリ黄金貳拾兩取出シ其ノ
大名ヨリノ支度金受ケタレバ其ノ内ヲ參ラスル
ナリ逆暇乞ノ辞モソコニテ出デ行カントス母
ハ俄ニ之ヲ留メ老體ナレバ又モ逢ハレルヤ否計
ラレズ今夜ハ是非ニ一宿セヨ今一ツ聞キ度ハ汝
ノ身ニハ大望ノアルナラシ大石殿ト心ヲ合ハセ
御亡靈ノ御弔致ス所存アルベシ母ノ見タレ所ハ
違ヒハアルマジ他言ハセジ只此ノ母ニタゲ打チ
明ケテタゞ惣右衛門日ハク是レハ又思ヒモ寄
テヌ丁承ハルモノカナ初コソ鬼ヤ角相談モアリ
マシタガ今日トナワテハ大石殿ヲ始メ誰一人具

ノ様ナルト申ス者無シト表面ヲ刷ヒ設ケノ酒汲
ミカハシ其ノ夜ハ別レテ臥テニ入ル體ハ寐テモ
心ハ寐ラレヌ惣右衛門熟ク前途ヲ考アレバ此ノ
老ヒ玉ヘル一人身ノ母上誰レガ養ヒ誰レガ見送
リ参ラスルト豪傑ナレド氣後レシ夜深クル迄目
ハ合ハズ度々惣右衛門ト聲掛ケラルモ詐リノ
眠リ聲サハ立テタレバ母ハ竊ニ起キ出デ何カ
ヒフク用意アリゲノ舉動ナルモ神ナラヌ惣右衛
門ノ如何デ知り得バキ曉天暫時マドロミテ起キ
出デ母ニ面セントスルニ母在サズアキラノ戸ヲ
明ケコチテノ障子ヲ開キ仰天シタルハ母ノ死體
佛壇ノ前ニグ伏シタマヘル傍ニアル書置一通母

ガ有ツテハ大望ノ妨今ハ亡君ノ讎ノミカ此ノ母
ニ取ツテモ讎ナル吉良ナレバ潔ク亡キ君込キ母
ノ爲ニ復讐セヨトノ旨惣右衛門ハ亡キ骸ヲ抱キ
テ慟哭シ頓テ具遺書ヲ辨ヒテ燒キ棄テ村役人ニ
届書ヲ差出シ檢視ノ役人出張シ改メテ死體ヲ受
取リ菩提所ニ葬リ香花料數多寄附シテ家ノ跡片
附ケ又モ山科ノ大石宅ニ赴キ此ノ一伍一什ヲ物
語リ良雄ノ袖ヲモ濕ラセタル武林唯七ノ母ニ劣
ラス烈丈夫ト感セヌモノハ無カリケル義士ノ面
々ハ思ヒニ姿ヲ替ヘ東ノ都路サシラ出デ、行
ク惣右衛門ハ最後マデ京阪間ニアリテ良雄ノ秘
計ヲ参畫シ十月十七日江戸ニ着レ或ハ和田元真

京都府立総合資料館所蔵

ヲゴサルノ語コレヲ記シテ鑿ムベシト云フ
綾部道弘 資格ナキ家ニ生マレタルヲ以テ姓氏
無キニテ所産ノ地ヲ以テ氏トス祖可春父道一皆
隱居シ道ヲ以テ樂トス道弘幼名詳ナラズ生レテ
八歳父ヨリ授ケラレタル古文數言コレヲ誦シテ
誤ラス偶々伯父ノ家ニ之ク其ノ家人其ノ幼稚ナ
ルヲ以テ待遇疎懈ナリ道弘憤懣シテ里餘ノ曠野
ヲ夜闇ニ歸宅ス父母其ノ爲スアルベキヲ知り長
スルヲ待チ隣邦ニ出仕セシム勤務ノ餘暇ニ讀書
シ且ツ醫方ニ志ス之ヲ暫シテ艱辛困苦東西ニ師
ヲ求メ奔走ニ衣食ス偶々郷ニ在ル兄病ニ産ヲ失
フヲ聞キ豊後ノ杵築藩ニ學士ヲ聘スルト聞クヤ

直ニ赴キ舉用セラレシ分ニ伍スルヲ得ソノ歳俸
ヲ分カテ兄家ノ負債ヲ辨償ス兄死シテ幼兒ニ名
遺ル道弘又コレヲモ鞠育シ人ト成ス平生親戚ニ
敦ク朋友ニ信アリ其ノ徒ニ教フルヤ恩嚴并行ニ
道義ニ是レ因リ詩文ヲ課セズ或ハ云フ其ノ祖先
某天正年間大友氏ニ奉ヘタリト道弘ハ元祿年間
ノ人ナリ同十三年口疾アリ治スル能ハズ其ノ死
因トナル子安正江テ祿役中ニアリ暇豫無シ道弘
同藩士ノ江戸ニ行役スルモノニ寄語シテ曰ハク
我レ汝ト永訣セン私情ニ牽カレテ公義ヲ欠ク
勿レ歸省ヲ要セスト没スル年六十六子細齋孫富
政剛立皆學名アリ剛立天文ニ精通シ算法ニ良シ

京都府立総合資料館所蔵

藩仕スルヲ屑トセス藩ヲ脱シテ大阪ニ逃レ姓ヲ
改メ麻田トス高足ノ弟子ニ高橋作左衛門五郎
兵衛アリ徳川氏ニ擢用セラル

道弘ノ親戚ニ厚キ一ハ妻ノカ與ルト云フ故ニ其

ノ傳ヲ載ス 道弘ノ妻名ハしち豊後杵築ノ小林

政治ノ女資性温順ニシテ靜清十八歳ノ頃父ヲ喪

シ深ク哀慕シカヲ喪祭ニ竭ス兄三友ニ鞠養セラ

ル三友學ニ勉ムしち亦讀書ヲ樂ミ詩文ヲ修ム三

友道弘ト同僚タリしちヲ以テ之ニ妻ハス母コレ

ヲ念ヒ已マズ遂ニ道弘ノ家ニ寄ルしち能ク之ニ

事ヲ道弘ガ宗族ノ爲ニ賑恤スルヤしち常ニ爲ニ

補益ス其ノ遺孤アルヤ之ヲ家ニ引キ給養スニ客

アリテ滞寓スルト二年ニ及ブ遂ニ倦邑無シ客深

ク其ノ恩遇感ズ連リニ喪福ニ遭ヒニ女亦孺ス哀

毀シテ病ム年四十八少女ヲ携ヘ遠ク大廟ニ參拜

ス歸リテ中風ニ罹リ常ニ臥ス子安正經史ヲ枕上

ニ讀ミニ女子國史小説ヲ讀ミ以テ慰ム正徳三年

六十ニシテ歿ス終ニ臨ムヤ佛名ヲ唱ヘ平生

後生ノトヲ問ハズ語ラズ平常花ヲ愛シ樹ヲ栽ウ

樹間ノ鳴禽ヲ視テ樂ミ曰ハク是レ吾ガ籬中ノ物

ナリト一日婢過テ熱湯ヲ薦メ殆シド指頭ヲ爛ス

しち尚ホ其ノ器ヲ持ス少女傍ニアリテ梳ル之ヲ

見テ其ノ器ヲ取り婢ヲ叱スしち笑テ曰ハク

此レ何ノ心ブヤト復ク問ハズ其ノ寛裕蓋天性ナ

京都府立総合資料館所蔵

九鬼氏系圖

九鬼氏ヨリ前コノ地ニ在ルモノヲ別所氏トス播州三木ヨリ来ル天正十六年重宗死シ子主水正吉治嗣ギ一萬五千石ヲ領ス徳川家康公薨後參觀ヲ怠リ領地ニ於テ遊宴ニ耽ルヲ以テ子守治ト共ニ罰責改易セラル寛永五年二月廿八日ナリ

九鬼 嘉隆 右馬允大隅守 烏羽城主

守隆 長門守

隆良 早世 志摩守 早世 初名長助

隆常 大隅守

隆直 豊前守 寶松守 隆直 信次二男 朽木修理長細室

隆季 大和守 式部少輔

隆直 大隅守 隆直 信次二男 朽木修理長細室

隆寛 河内守大隅守 備後守休翁 寶運部丹後守政周二男

隆良 隆次 大和守

泰隆 定隆 隆隆 嘉隆

隆英 主水 并三助

隆恭 左京伴勢守 同姓隆飛名跡

隆由 長門守 同姓伴勢守隆由名跡

隆邑 同姓伴勢守隆由名跡 式部大輔

隆貞 式部大輔

孝次郎 早世

隆晃 安三郎 早世 寶保科彈正忠正早室

隆子 養子隆祺室

隆子 齊藤半七室

隆祺 大隅守 寶田沼主殿頭意次四男

隆卿 式部少輔 隆貞末男 隆度 河内守

女子 本庄也江守道美室

仙之助 早世

隆備 大西守

女子 坂倉滿三進

女子 石川伊豫守總邦室

富清 飛騨守 本庄原出雲守廣清養子

一説

守隆

良隆 志摩守

長助

隆季 大隅守

直隆 七和守

隆都 武部山輔 養子

九鬼氏畧史

九鬼氏ハ姓ヲ藤原トス紀伊國熊野八莊司ノ一二
 居リ八鬼山ノ麓ニ住ス其ノ九鬼村ハ尾鷲山下ニ
 アリテ南方ニ里入海ニ臨ム古書九木
三書ケリ九鬼隆良此處
 ニ居レリ八莊司トハ湯川玉置新宮安田芋カ瀬中
 津川野長湯浅ナルガ九鬼ハ其ノ何莊司ナリシヤ
 詳ナラス隆良出デ、志摩國英虞郡波切村ハ押渡
 リ七嶋ノ徒ト戦ヒ終ニ波切田畔立神等ノ地ヲ畧
 取ス七嶋ニハ公卿七人ノ流竄地ニシテ公子卿孫
 其ノ主トナリ今ハ武人ニ伍シテ千戈ヲ事トス之
 ヲ文明年間ノ事トス永祿年間ニ至リ七嶋ノ大浦
 ハ大學ナルモノ大差ハ藤四郎玄蕃ナルモノ濱嶋

丹波志

ハ源吾ナルモノ小嶋ハ民部左衛門ナルモノ安樂
嶋ハ越中ナルモノ的矢ハ美作ナルモノ割振シ而
シテ波切ハ隆良ノ一類コ、ニ蟠居ス猶此ノ外ニ
和具越後ナルモノアリ國府甲賀ノモノ等ノ干戈
ノ音絶エズ隆良ノニ子孺五々隆次ト右馬允嘉隆
アリ隆次出デ、田城ノ士加茂家ノ躰養子トナリ
嘉隆嗣子トナリ波切ニ居ル一説ニ宮内少輔淳隆
子孺五々澄隆トス淳隆ハ七嶋ノ輩ト北畠氏トニ
攻メラレテ歿死シ澄隆ハ叔父嘉隆ト田城ニ籠城
セシガ退キ朝熊山ニ入り再出デ、田城ヲ奪還シ
テ死シ嘉隆代ハリ家嗣トナリ伊勢ノ國司ニ臣事
ス嶋主嘉隆ノ義ニ服シ推シテ盟主ノ如クニシ國

司ト相関スルトハ一ニ嘉隆ニ依托スルヲ以テ年
頭其ノ他ノ式禮ニハ嘉隆ノニ伊勢ニ赴キ祝儀ヲ
叙ベ權威年ヲ逐フテ加ハリ伊勢南方九頭ノ一ニ
擢シデラレ鳥羽城主トナリ志摩ヲ支配ス而シテ
自分ハ武骨一偏ノ士ナルヲ以テ出仕ノ時ニハ兄
孺五々ヲ添トセンヲ乞ヒ許サル孺五々ノ文
事アルヲ以テ國司ノ任スル多氣御所ト聲息年ヲ
逐フテ通シ國司ノ信任次第ニ厚ク嶋主ニシテ參
勤ノ欠ケタル者ハ嘉隆ニ命シ處分セシムルニ至
ル嘉隆コレニ由リ嶋主々々ニ送ルニ左ノ文ヲ以
テス文ニ云フ

一筆申納ハ好度

波志

御所より御前まで志おな破として下さる急ぎ
右馬允に五通ふとのちらば何し子細も有る
友とし又違れし事これあらば押寄せ苦慮し
任せ罪とれよべく仍み件

嶋主各自之ヲ看テ右馬允コソ鳴乎ナリト署リ相
盟ヲテ彼レニハ隨心スマジキト神水ヲ飲ミ神前
ニ於テ堅固ニ同心ヲゾ爲シタリケル嘉隆ソレヲ
偵知シ急ニ手勢ヲ引具シ進ミラ浦村ニ出デ大浦
大學ヲ攻メ之ヲ破ル大學自殺シ餘衆降散相續ゲ
更ニ荒嶋ニ赴キ七日七夜戦フテ和議トナリ少濱
ハ渡リ二日ニシテ城ヲ陥レ急ニ和具ニ及ブ越賀
隼人正防戰善ク謀リ三年ニ互レドモ下ス能ハズ

國司之ヲ聞キ自身出馬ニテ指揮シ漸コレヲ下ス
ヲ得タリ此ニ於テ領地トシテ志摩ヲ賞賜セラル
播五ハ賞賜ノ已ニ及バザルヲ念リ怨言アリ國司
其ノ情ヲ諒トシ嘉隆ノ子ヲ以テ其ノ養嗣タラシ
ム播五ハ子ナキヲ以テナリ是レニ由リ播五ハ
隱居シ田城ヲ兄氏ニ致シ事無キヲ得タリ時ニ隣
國ニ織田信長ノ崛起スルアリ嘉隆具ノ消息ヲ伺
ヒ私ニ親隨シ其ノ意ヲ迎へ却テ國司ニ反キ田城
ノ山中ニ在リ不便ナルモノカラ鳥羽ニ移居シ鳥
羽監物ノ息女ヲ迎へ息男長門守ノ妻トシ聶養子
タラシム鳥羽氏コレニ讓リ隱居セシカバ父嘉隆
ヲモ迎へ入レヌ熊野ノ三鬼城ノ一揆來リ攻メ之

ヲ圍ム信長命ジテ七嶋ノ將士ヲ率ヒ征討セシム
敵兵交終ス信長大阪本願寺ヲ攻メ降ス能ハズ嘉
隆一策ヲ獻ジテ曰ハク西國大名ノ送運ヲ防キ其
ノ糧道ヲ絶タズンバ僧兵ノ屈スル期ナカラシ請
フ吾ガ水軍ヲ以テ敵船ヲ一掃セント信長大ニ悦
ビ之ヲ可ス嘉隆乃チ大船六隻小船十隻ヲ鳥羽ヨ
リ呼ビ寄セ之ヲ熊野浦ニ入ル雜賀ノ兵船近海ニ
游ヤスト間キ紀淡海峡ヨリ進ミ遙ニ之ヲ挑ム敵
船コレニ應シ浦々ヨリ顯ハレ出ヅルモノ大凡五
百餘艘漕ギツケ〜弓矢銃丸チ發ケ射放テ来
リ迫ル嘉隆顧ミズ悠々トシテ進ム其ノ泉州沖ニ
及ブ頃ニハ矢丸周圍ニ集マリ降ル嘉隆機ヲ昏テ

弭旗一揮スレバ大砲轟發シ山震ヒ海躍リ砲丸ノ
余中忽地敵艦ヲ撃沈シ殘餘ノモノニハ炮烙火矢
ヲ投ケ入レ之ヲ燒ク敵屍海上ニ累々タリ甬采大
阪ノ勢力大ニ殺グ信長コレヲ賞シ野田福嶋ノ地
ヲ與フ織田氏是レニ由リ心ヲ海軍ニ注キ九鬼ニ
憑ル事深シ嘉隆其ノ軍容ヲ志摩海ニ盛シニ前
日ノ實戰ヲ摸擬シ之ヲ信長ニ示スニ隻ノ御座船
ハ美々敷鎗ヲ信長ト公族コレニ分衆シ大小艦
船首尾相聯ナリ嘉隆ノ麾影ニ從テ進退シ周旋
ス信長コレヲ看テ其ノ技能ニ服シ酒肴數十荷黃
金三百兩小袖十疋ヲ出タシ其ノ將士ニ賚テ九鬼
氏ノ聲望大ニ擧カリ鳥羽城ノ堵築トナリ兵士ノ

丹波
史
志

募集トナリ遂ニ海軍ノ渠鎮トハナレリ織田氏ノ
西征ニ當リ九鬼氏ハ陸軍先鋒トシテ攝津ニ入り
信雄ノ節度ヲ受ケテ花隈城ヲ攻メ功アリ其感状
左ノ如シ

花隈落城シ○志珍重ニハ其節從川口罷越首十
ニ方取生捕ナ有シ○神妙ニ至不始今ニ依汝助
知頼ニ每度粉骨命ヲ能ク此名可申サレ室而
大阪退散不可も程ハ海軍掛所蒙レハ也

七月廿日

信雄

九鬼右馬允

柴田真織田ニ叛キ亡ホサル九鬼之ニ應ジ海上ニ
戦ニ歸リ壘ニ據リ守ル蓋シ尾張ニ於テ不平ノ丁

アリシナリ偶シ信長ノ先憂アリ明智ノ勸誘ニ應
ジテ其ノ亡滅ヲ傍觀シ羽柴氏ニ從屬シテ五位ノ
諸大夫大隅守トナリ苗ノ吹貫ニ金團子ノ出シ馬
印ヲ賜ハル下ニ圖アリ天正十二年ノ春北畠信雄ト羽
柴秀吉トノ間ニ行違ヒアリ羽柴ノ催促ニ應ジ伴
勢ノ木造城ヲ守ル澁川一益嘉隆ト相謀リ兵二千
ヲ合ハセ大船ニ打乗リテ尾張ニ渡リ蟹江ニ赴ク
徳川勢ニ打タレ卒フジテ蟹江城ニ入ル寄セ手續
キ攻ム九鬼勢恠ハ兼テ兵船ニテ遠ク逃ケ延ビ又
戸田三郎右衛門尉忠次カ徳川ノ命ヲ奉テ伴勢一
圓ヲ取り鎮メシガ爲ニ來ルニ會フ嘉隆コレト小
濱ニ戦ニ敗軍ス前後東軍ノ爲ニ生擒セラレタル

者巨多嘉隆ノ明長兵衛尉モ亦其ノ中ニ在リ東西
 和成リテ後羽蝶氏ノ四國九州攻ニ從ヒ毎ニ海軍
 ヲ主管シ海上常ニ苗ノ吹抜ヲ見ル朝鮮ノ役起コ
 ルヤ秀吉令スラク海軍ハ惣ジテ大隅守ノ所存タ
 ルバシト即時船手組ノ指揮者トシテ釜山古都ノ
 間ヲ周旋警備ス嘉隆カ坐乗船ヲ伊竟丸ト名附ケ
 伊竟ハ豊川稻荷社僧ノ名ナリ談社神ハ嘉隆カ經
 身信仰スル所トテ其坐乗船ニハ平常戰時ノ別無
 ク屹枳厄天ヲ齋キ祀ルニ由ルナリ此ノ船ハ明治初年マテ
 物トシタルガ夏後ハ
 知レズ嘉隆ノ製造セシメタル船船我百隻加
 藤福島藤堂長曾我部ヲ始メトシ諸手ニ分附セラ
 レ唐嶋ノ一戰ニ大捷ヲ博シタルハ一ニ九鬼氏ニ

負フ所ヲ多シトス已ニシテ嶋中ノ軍談ニ版坂安
 治日ハク大船巨砲ヲ以テ戰ヲ挑ミ機ヲ昏テ進撃
 セシ彼レノ船舶ヲ奪ヒ取り以テ味方ノ用ニ供ス
 ハ大和ナリ加藤嘉明日ハク其ノ計畧ハ敵ヲ劫シ
 テ之ヲ去ラシムルナリ如カジ小船數隻ヲ出カシ
 テ敵ヲ迎ヘ吾ガ小勢ナルヲ示シ敵ノ侮リ乘ズル
 ヲ待ツテ之ヲ迎ヘ吾ガ大艦巨船コレヲ挾ミ以テ
 彼ノ軍船ヲ鏖殺セシ然ラズンバ大閣ニ於テ吾曹
 船手ノ者ニ戰意無シト思シ召サレン安治日ハク
 是レゾ大事ノ前ノ小事ナリ早マリテ仕損ジナハ
 悔エトモ及バジ何ンゾ輕々敷ク言フ可ケン嘉明
 コレヲ聞キ大ニ怒リ將ニ起ツテ闘ハントス藤堂

高虎居間調停し事無キヲ得タリ毛利壹岐守勝信
會主タリ言フ様ハ諸君皆忠義ノ士ナレバ社太閤
ノ御爲メヲ思ヒ幸論モスルナレ戦捷疑ニ無シト
テ酒宴ヲ設ケ盃ヲ侑メ和談時ヲ移ス中座ニシテ
嘉隆諸將ヲ顧ミテ言フ今夜子ノ刻ニ纜ヲ解キ夜
明ケテ戦フ宜シカルマシ船ノ大小多寡ハ諸公ノ
望ニ從フテ給スマシト翌朝水戦敵味方互ニ勝負
アリ此ノ報ニ接シ太閤ヨリ左ノ一書ヲ送り来タ
ス

二月廿七日書状委細抄披見ハ同廿二日敵船
方命所々方船セ乗出別敵船ニ渡乗捕よしむ
り端ニ秘妙ニ働被感且るハ彌々々々々々々々々々
御、子卯

流々細々採入精儀奪一ハ他是氣甚々似此奈思
るハ猶去在古テ中核也

之月口

九鬼右衛門

書中ノ乗取ニ艘ハ越賀隼人正家来西岡右衛門之
助一番ニ乗リ入り旗ヲ揚ゲタリ此ノ乗入り旗揚
ゲハ青山豊前守家来伴藤太右衛門ナリトテ相筆
フヲ脇坂中務ハ之ヲ以テ九鬼方ノ功トシ曰ハク
他人ノ取りタル船ニ手ヲ懸ケ味方ヲ差シテ引返
ヘルハ鼻怯ナリトノ口論ヨリ双方三方切合ハン
トセルヲ大隅守曰ハク大事ノ前ノ小事ナラズヤ
トテ制止ニ遂ニ相引キトナル大閤後日コノ下ヲ

祖父 貞直 伊豫入道
 父 實直 兵衛頭
 河野道通 國岩手
 城主 伊勢田丸
 城主 トナル

間キ大隅ノ功一廉ナリトテ加増下サルベキ様子
 ナリシヲ田丸ノ因幡藏人舊怨ヲ報フル此ノ時ニ
 在リト造言巧説シテ之ヲ沮止ス慶長二年從五位
 長門守守隆ニ讓リテ隱居シ守隆ハ鳥羽城主トシ
 テ三萬石ヲ領シ嘉隆ハ隱居料五千石ヲ拜領ス翌
 年大閤薨スルヤ徒歩送葬ス素袍烏帽藩士二百上
 下ヲ着シテ隨フ同四年ノ夏稻葉藏人道通ト事論
 ノ事アリ之ヲ徳川家ニ訟フ此ノ時豊臣秀頼ノ幼
 弱ナルヲ以テ太閤ノ遺言ニ據リ家康ノ判決ヲ要
 シタルナリ道通ハ伊勢岩出ノ城主ニシテ領内ノ
 木材ヲ運出スルニ九鬼ノ管内ヲ通過スルヲ以テ
 從前漕運稅ヲ九鬼氏ニ納レシガ大閤薨後コレヲ

納レズ故ニ九鬼氏ヨリ之ヲ訟ヘシテ家康判シ
 テ曰ハク故太閤ノ時ニ農商ノ便利ヲ謀リ淀宇治
 ノ漕統ハ免ゼラレタリ伊勢ノ如キ遠方ノ地ハ未
 タ其ノ沙汰ニ及バズシテ薨去ナリタルナレバ九
 鬼ノ申シ分具ノ理無キ由言ヒ渡サル嘉隆コレヲ
 怒リテ出仕セズ爾後徳川氏ニ反抗スルノ心アリ
 翌五年長門守ハ東軍ニ從ヒ奥州征討ノ軍ニ參シ
 嘉隆ハ之ニ叛キ石川方トナル三成コレヲ信セズ
 其ノ實ヲ徵ス嘉隆之ニ應ジ質子ヲ出シ西方ト
 ナリ急ニ起テ己レガ子ノ持城ナル鳥羽城ヲ攻圍
 シテ之ヲ奪ヒ海賊ヲ味方ニ引キ東軍方ノ津々浦
 ヲ々々侵畧奪取シテ捕獲セル糧米ヲ美濃尾張ニ送

支 志

リ西軍ニ資ス紀伊國新宮ノ住人堀内安房守氏喜
ヲ迎ヘ鳥羽城ヲ守ラセ自分ハ岩出ヘ押渡リ縮葉
藏人ヲ攻メントシテ曰ハク藏人ハ當家ノ宿仇ナ
リ之ヲ討取ラスンバ當藩ノ無念遣ル方無シ幸ニ
今ハ敵方ニ在リ之ヲ討ツニハ善キ折ニコソト其
ノ手殿ヲ取ル時ニシモアレ長門守々隆ハ徳川氏
ニ先ダチ夜ヲ日ニ繼キ本國ノ所置ナスベク馳セ
歸レバ案ニ相違ノ情勢ナリ留守豊岡五郎右衛門
ハ主君嘉隆ノ命黙止シ難ク既ニ鳥羽城ヲ開キ夕
ル後ナレバ東軍方ノ先手ナル池田輝政ヨリ附ケ
タル軍監石丸雲哲ト共ニ謀リ使者ヲ以テ開城ヲ
促セドモ其ノ詮ナキノミカ父子雙方テ相見え

ルノ外無キニ由リ守隆已ムヲ得ズ軍ヲ畔名ニ還
シ古城ヲ修理シ要害ヲ構ヘ鳥羽ノ軍ト日夜相戦
乱世ノ習トハ云ヘ父子ノ軍縁者モアレバ朋友モ
アリ敵トナリ味方トナリテ相闘グ浅間敷キ限リ
ニソソ此ノ如キハ九鬼ヲノミ責ムベキニ非ズ蜂
須賀生駒真田小出前田京極ノ如キ父子兄弟君臣
親戚相攻ムルアリ氏家内膳正正純ハ守隆ヲ助ケ
ントテ衆名ヲ出デ畔名ヲ攻メテ勝ツ能ハズ守隆
ハ數度ノ戦ニ獲得セル首虜數十百持タセ中泉十
ル徳川幕下ニ致ス家康コレヲ實檢ニ是レゾ今度
ノ手合ハセノ功勳ナリトテ厚ク賞セラレ直ニ南
伊勢五郡ノ朱印領邑證ヲ與ヘタリ領テ關原ノ戦

トナリ西軍大敗シタレハ嘉隆ハ面目ナシトテ紀
伊ノ舊里ハ落キ延ビテ匿レ居タルガ長門守ハ鳥
羽ニ歸城スルヲ得又大阪ニ會同シテ徳川將軍ニ
謁シ前因ニ由リ池田輝政ニ就キ如シ今度ノ戰功
ヲ賞セラレ、ノ事モアラシ敷自分微カノ寸効ヲ
以テ父ガ首續ガシコトアラマホシト訴願ス數日
ヲ経テ沙汰無キヲ苦慮レ更ニ福島左衛門太夫ニ
謀リ正則守隆一所ニ嘆訴シケレバ罪赦サレシ上
守隆ノ賞トシテ所領ノ地許多加ヘラレ五萬六千
石トセララル守隆面目ノ身ニ餘レドモ父ノ所在
分明ナラズ且又徳川家ノ命ヲ承ケ父ノ所在ヲ搜
索セシムルニ手懸カリ無シ嘉隆ニ於テハ関ヶ原

ノ合戰味方大敗ト聞キ鳥羽ニモ居タマラズ矢
甲賀數馬主膳ナドノ數士ヲ從ヒ三國丸ノ船頭オ
コノ右衛門ノ家ニ潛匿スオコノ右衛門ハ俠人ナ
リ以前朝鮮渡海ノ際ニ抜擢重用セラレタル恩遇
ニ對フルハ此ノ時ナリトヤ思ヒ込ニケン厚ク介
抱シテ世ヲ忍バセ潛ニ鳥羽ニ伴ヒ行キ嘉隆ノ女
婿青山ノ家ニ納ル青山豊前ノ妻喜ビ迎ヘ父ヲ勞
ニ家ニ養フ内豊田五郎右衛門ニ逢ヒタシトテ此
ノ事ヲオコノ右衛門ニ語ル五郎右衛門來リ見ユ
暫時ニシテ去リ熟ク思フ所アリテ徳川家ノ
御尋人ナレバ是非ニ及ハズ予之助ト云フ腹心ノ
モノニ嘉隆ヲ委託シ置キ急ギ伏見ニ赴キ此ノ始

支志

未ヲ上聞ス嘉隆コレヲ察シ悔ユレドモ及バズ自
殺セントセシガ余下リテ後ニ如何様ニモセント
遷延スル内池田三右衛門ヨリ自殺セヨトノ余ヲ
承ケ又之ヲ聞キタル長門守ハ大ニ悲ニ前願ノ容
レラレザルヲ慨キ余乞ヒノ嘆願書ヲ出シ父子共
ニ高野山ニ隱遁セント言ヘトモ許サレズシテ片
山豊前ヲ舛錯人ニ撰出セラレ、迄トナリシガ長
門守ハ尚モ父ノ命乞ノ爲ニ伏見ハ登リ高野山ノ
僧モ御詫言ノ上申シタル旁々助命ノ沙汰トナリ
急使東向シ関ノ驛ナル地藏堂前ニテ嘉隆ノ首ト
行キ過リ此ノ自殺ハ蓋シ豊田カ強勸ニ由ル嘉
隆豊田ニ向ヒ我自殺シテ可ナラバ何シゾ一命ヲ

惜マン罪ヲ贖ヒ我が家ヲ全フセントテ其ノ勸ニ
従ヘルナリ此ノ豊田ハ奸曲詐術ニ長ケ其力ニテ
家老職ニ昇リ鳥羽ノ留守居トマテニ爲リ大隅守
ガ石田方トナリ此ノ城ヲ取ラントスルヤ一議ニ
モ及バズ昂々ト開城シタルコト其ノ仕方輕々敷
トテ徳川方ノ非難ウカラザルヲ憂ヒ其ノ汚名ヲ
雪ガンガ爲ニ一計ヲ案出シ大隅守殿ハ罪赦サレ
タリト言ヒ振ラセテ嘉隆ニ油断セシメテ已シガ
忠義振ヲ示セルヨリ嘉隆モ之レニ惑ハサレ面會
ヲ申し込マセタルヲ機トシテ其ノ自殺ヲ面諭シ
殿ノ御自害ハ御家長久ノ御爲ナリト言ヘルヨリ
賤サルトハ知ラズ自盡シタルナリ年経テ誰レ

嘉隆ノ手書
華押ノ寫

子正自口

九鬼大隅守

嘉隆

五

言フト無ク此ノ事ノ世上ニ喧傳セラレシカバ守
隆大ニ怒リ糾明シテ遂ニ刑殺シタリ矢ハ大隅
守自殺スト聞クヤ殉死シ甲賀ハ七命シ數馬主膳
ハ朝熊山ニ隠レ具ノ他ノ臣下ハ右往左往ニ散落
シタリ

長門守守隆ハ無二ノ關東方ニテ桑名攻ヲ始トシ
テ許多ノ戦功アリ感狀ニ曰ハク

西國勢勇表、廻々交々艘衆取敢多波討首
到事一為感悦し、至々々々行々越度内々並行要
こゆ也

年月日

家康

九鬼甚つるもの

右ハ前示中泉首實檢ノ時ニ得々九モノト云フ
慶長十九年秋大阪軍起コルトノ風聞切至ス守隆
即刻兵船ニ乗リ十月十九日攝津ニ押渡リ大五隻
小五十隻ノ船隊ヲ率ヒ威風堂々川口ヲ横塞シ以
テ諸國往來ノ船舶ヲ抑留シ大阪方ノ偵邏船ヲ奪

長門守
家康
志

と取り敵方海路、消息ヲ不通ナラシム十一月十
九日新家ノ警固ニ任シ葭島ハ押寄ニ陣場ヲ張ル
二十日福島ニ逼マリ井橋ヲ奪取リ捕虜三人首七
級ヲ得タリ敵將佐々淡路守ノ船印福島以下大
小數艘ヲ奪ヒ兩將軍ノ感賞ヲ博ス十二月進シテ
難波橋ヲ攻メ高麗橋ニ及ビ二日進シテ五ヶ嶋
ニ達ス五日命アリ盲船ヲ以テ木津口ヲ攻メヨト
卽刻盲船三隻ニ砲銃ヲ截ヒ頻發突撃シ殺傷過當
ナリ前後數十合未嘗テ一度ノ敗ナシ
翌年ノ夏陣ニハ去年ノ通り相心得ベシトノ命ニ
從ヒ本陣ヲ厄ヶ嶋ニ置キ河口ハ出陣ス五月五日
落城スルヲ以テ大阪ニ入レバ命アリ葭嶋止名ノ

モノヲ生擒スベシト數百千人ヲ生擒シ敵對スル
モノ數百ヲ斬殺ス

元和元年徳川幕府ニ談伴衆ナルモノヲ置キ室町
家ノ故ヲ襲ガコト、ス此ノ職ハ常ニ將軍ニ侍シ
諸軍ヲ談話シテ將軍ノ政治軍務ノ資トスルモノ
ニテ豊臣氏ハ之ヲ嗤衆ト呼ビタル故徳川府中ニ
於テ御新衆トモ呼ビタリ文武ニ特長アルモノ又
ハ場數多ク踏ミタル者和漢ノ故實ニ通達セルモ
ノ又ハ現世ノ人情風俗ニ明ナルモノナラザレバ
其ノ實ニ加ルヲ得不如シ其ノ實ニ中ルニ於テ
ハ一身ノ榮譽ニ止マラズ其ノ一番ノ名利トナル
ヲ以テ大名旗本ノ士ハ何モノヲ賄ヒテモ此ノ職

ヲ獲ント熱中シタルモ在ノトニコロソ毎夜出仕臨
時出種々ナルガ老人ニ至リテハ隨意出仕タリ之
ヲ勝手勤ト呼ビ最優待ノモノトス守隆之ニ與リ
幕政ノ補助ニカヲ竭クセリトゾ 同二年前將軍
薨ス葬送ノ事終リニ代將軍駿河久能山墓所參拜
ノ時命ヲ受ケ兵士引具シ將軍ノ旅館ヲ守衛ス
寛永元年三月朔日大和川ノ流域ヲ轉シ大阪城北
ニ流ル、所ノ舊河道ヲ廢シ更ニ河内ノ柏原ヨリ
新河ヲ疏鑿シ攝津和泉ノ國界ニ導キ海ニ入ラシ
ム新河延長四里二十八町トス守隆其ノ役ニ與リ
賞詞アリ且時服二十領ヲ賜フ 同十年三月五日
卒ス年六十 松嶽院殿前長州大守心月善光大居士

ノ辨謚シ三田ノ月禪院ニ葬ル
守隆ニ男子四人アリ一説ニハ五人長男良隆ハ早
世ス次男志摩守幼名長助貞隆亦父ニ先ガキ死ス
三男式部少輔隆季四男大和守久隆五男十郎左衛
門隆重 良隆死ニ相續人ナキヲ以テ直隆ヲ順養
子トス一説ニ云ヘリ嘉隆ガ石田方トナリタル時
上方勝利ナランニハ嫡孫隆季ヲ世嗣ニセント言
ヒタルヲ以テ徳川氏ノ嫌疑ヲ避ケ四男ヲ以テ順
位ヲ換ヘ起エテ家系ヲ續ガシメタルナリト一
説隆季ハ父ノ意ニ叶ハズ五百石ノ地ヲ與ヘ家人
トセラレ次ハ久隆少名壽良方ニ僧籍ニ入ラント
シテ貞隆ノ死スルニ會ニ果サズ守隆卒スルニ及

丹波
守隆
志

比隆季久隆家督ヲ争フ由リテ一萬石ヲ隆季ニ割
興シテ綾部ニ居ラシメ久隆ニハ三萬六千石ヲ興
攝津三田ニ居ラシム隆季ノ領邑高一萬石ニ幕
府ヨリ恩賜トシテ一萬石ヲ給シタルヲ以テ二萬
石高トナレリト云フ故ニ此ノ兩家ノ本分判然セ
ズトゾ

右家督争ニ付事狀ヲ畧載スル所左ノ如シ
慶長五年關原大戦ノ前ニ於テ嘉隆ハ三成方トナ
リ長門守々隆ハ東軍方トナリ父子ノ間ニ敵對行
爲アリテ嘉隆ノ手勢ハ早クモ伊勢ヨリ鳥羽ニ向
フテ進ミ攻戦ス守隆ノ子式部ハ母ト共ニ城内ニ
アリシヲ越賀隼人自家ノ士卒七十餘人ニ介抱セ

シメテ出城スルヲ得タリ山田檜垣當朝長官方ハ
立退キ更ニ野原村中谷源七ガ許ハ同行ス隼人等
ノ十三人衆ハ鳥羽出城後江戸ニ赴キ戸田因幡守
方ニ至リ恨謙シテ公儀訴訟ス戸田與右衛門訴人
トシテ公儀幕府ハ出頭ス大智ト云ニ辯舌ト云ヒ
適當ノモノナリトテ九鬼豊後ノ手引トナリ罷出
ル豊後ハ八十ノ老年ニテ行步不自由ナレバナリ
十三人衆 祿高千三百石 九鬼數馬 千石 九鬼
豊後 八百石 越賀隼人 七百石 九鬼内藏助 三
百石 安藤作之右衛門 三百石 知積寺助右衛門
二百五十石 川北左右衛門 三百石 西山七郎右衛門
百五十石 戸田與右衛門 同 川合又右衛門 百二十

川合又右衛門
志

石 山室仁右衛門 百石 平和源太夫 同 堀源右衛門

七人衆 三百石 内藤主水 二百五十石 井田吉右

衛門 同 吉川六右衛門 二百石 松山八郎右衛門

百五十石 津田任右衛門 同 佐藤五郎右衛門 同

細又兵衛

外ニ任藤十左衛門ニ列中ニ入ル

乍恐九鬼長門守跡目之儀ニ付謹而言上

一 九鬼長門守せられ長助去年雲月廿六日西果

中外ニ白九鬼式部之跡目之儀ニ付致仕併皆

其長何存ハテ起清文を以有稱ニ差圖ニ仕与

長門中ノ了付秘書存ハテ高筋目ト申上式部

ハ年次ニ依リ坐ハ召取公儀秘書ハ行各所存
公長急お勤下中存ハ長門家の方書ニ存ハ
秘書文ノ了付入ニ以式部跡目之儀ニ付就
与中よりせハ

一 長門末子ニ南年十五ニ長年ハ高良ノ中ノ

伊勢ニ由寺領下ハ於熊谷全別院寺家子ニ

起出ハ四年以前師直珍名ニ付而ハ別高良在

ニ寺領及居之ハと苗在長より呼下し方相ト

名を以ハハ地ハ長年中ハ

一 長門迹目程あり百ハ分式部ニ就乃伊台以下

外ニ程有テ有ハ

右ノ如ク返宜按家承テ有ハ仍此件

九鬼之内寺也
我賀年人

白灰
安永修御中

家老
九鬼由藏助

家老
九鬼數馬

家老
九鬼孝之

御奉行所

右哉許霜月廿七日酒井推樂頭屋敷ニ於テ井俣掃部頭土井大炊頭酒井讚岐守永井信濃守板倉周防守青山大和守牧野内匠頭 永喜御祐筆ノ列座 願之通式部ヲ迹目ニ据エ申スベキ長門守存心ノ度老衰シテ後ハ壽良ヲ以テ迹目ニセントシ式部

ニハ伊勢ノ内壹萬石ヲ給セントシタリ之ヲ判決シテ長門守相續ハ式部少輔隆季トナレリ

書上ゲ船數之覺

- 一 壹艘三國丸 一 壹艘阿波丸 一 壹艘豊後丸
- 一 廿丁少船七十二丁有 天地丸 屋形十二帖 二間 金之間
- 一 五十二丁立屋形有 鬼丸 一 四十六丁立屋形有 住吉丸
- 一 四十六丁立屋形有 壹丸 一 四十二丁立屋形有 高沙丸
- 一 四十二丁立屋形有 七人丸 一 四十二丁立屋形有 太郎坊丸
- 一 四十丁立屋形有 次郎坊丸 一 四十二丁立屋形有 龍神丸
- 一 三十八丁立屋形有 清水丸 一 三十六丁立屋形有 虎丸
- 一 三十六丁立屋形有 〇〇丸 一 二十六丁立屋形有 前鬼丸
- 一 十八丁立屋形有 小雀丸 一 千五百石入 福德丸

御書寫

急度申々仍今度爲先勢并伊兵部少輔差遣ハ
條行等ノ儀ハ我々出馬以前ハ何様ニモ役指
圖次第沙作テハ者可爲本望ハ猶兵部少輔可
申々恐々謹言

八月四日

御諱御判

九鬼長門守殿外二名署

一権現様上意ニテ長門守儀勢州、致渡海伊勢路
ノ故ヲ防可申旨被仰下ハ就夫三州吉田迄罷越
池田之左衛門輝政申達伊勢路相衝ハ爲後證輝
政家人石丸雲哲ト申者致同道從吉田勢州、致
渡海志州畔衆乃古陣を取立お國府村足掛を以

多シ晝夜西國通路ノ私を改賊私を防キ居立ハ
安勢州衆名ノ陣主氏家内膳正ガ一族西國船入
伊勢路、廻リハ長門守承リ兵私を催シ於志
州國府表逐一戰敵船を衆取り敵數多討取申々
此節乃使者家老ノ者佐、木半、亞片山又太夫
ト申者相副頭分ノ頭十ニ差上ハ交

権現様聞察、所進衆ノ中途於遠州中泉右ノ執
守上ハ安南所降一軍首ノ由上迄所檢據能半、
亞又太夫此召出所亞沙下長上所差沙返ハ所刀
束國俊所直ニ半、並、沙下置又太夫所取織白
綸子所紋前舊衆、下、葵所紋附之取載仕ハ長門
守、御感快并別紙所書沙成下ハ寫常文感快畧

長門守
御感快并別紙所書沙成下ハ寫常文感快畧

公申上ハ、竹中伊勢五郎ノ地、以下、近江、丹波、御
 判次、裁仕、ハ、至、ハ、少、地、差、上、ハ、父、大、河、守、一、命、
 氏、助、以下、ハ、若、生、ノ、世、ノ、種、存、奉、存、ハ、方、申、上、ハ、此、
 後、達、上、河、守、州、守、氏、前、ハ、此、出、今、度、ノ、忠、節、
 佛、威、思、召、ハ、召、致、シ、通、父、大、河、守、一、命、氏、助、其、上、於、
 勢、少、河、加、増、取、少、石、并、大、河、守、氏、居、領、分、地、言、五、千、石、
 以、上、河、守、一、命、以下、置、御、倉、五、萬、六、千、石、在、領、知、仕、ハ、
 一、右、ノ、通、大、河、守、一、命、氏、助、免、シ、付、其、氏、志、少、一、申、上、
 以、處、其、内、大、河、守、儀、於、志、少、河、守、自、家、仕、遣、言、致、也、
 插、入、京、都、一、持、上、リ、以、ハ、御、赦、免、シ、御、書、勢、少、明、
 皇、才、業、卷、二、前文ニ關地無
前トテ冬看 下、行、達、申、上、
 一、慶、長、十、二、年、丁、未、十、二、月、十、二、日、駿、府、御、城、奏、上、シ、儀、

長門古於志少河守承之、大風ニテ、日暮、忍クハ、加
 早船之被シ、テ、多、出、船、跡、一、駿、府、一、幕、我、ハ、之、被、
 且、回、燕、々、中、船、多、取、進、河、大、力、流、シ、テ、致、破、損、ハ、長、
 門、守、乘、船、ハ、惡、風、ニ、吹、放、リ、北、遠、州、ノ、馬、崎、サ、カ、ラ、ニ、
 眼、崎、ノ、上、リ、更、ヨリ、夜、通、一、駿、府、一、幕、上、
 権、現、様、一、仕、候、少、處、早、進、馳、馬、ハ、候、御、威、ニ、引、且、
 召、氏、順、下、ハ、刻、御、奮、勇、全、シ、下、置、ハ、
 一、慶、長、十、九、甲、寅、方、夜、御、陣、ノ、刻、方、及、シ、可、馳、向、旨、
 権、現、様、上、意、ニ、付、三、國、丸、七、申、方、船、其、外、安、宅、五、艘、
 早、船、五、十、艘、お、催、一、十、月、廿、五、日、志、少、出、船、仕、回、十、
 一、月、十、六、日、大、阪、停、帆、口、ニ、着、別、河、口、ニ、番、船、を、置、
 大、阪、ノ、出、入、を、取、次、申、上、十、月、十、九、日、大、阪、折、尾、ノ、

河
 坡
 志

押寄終口鉄砲軍仕薩清と取圍佐師仕々
 一 同十一月廿八日款より大阪福清、柵橋と巻付盲
 船を出し、處處聖日長門守子孫福清、取付柵
 橋を攻破り鉄砲七ノ生捕三人大阪に船奉行佐：
 木澄踏守音弘、馬印毛棒九鬼敷馬と申々家老
 若取、此時鉄砲、高り被疾、敵船福清九傳
 帆九乗取、刻勝山岡山、言上々家御感、与意
 此成下、即日為上使阿部四郎五郎と以家来敷
 馬方、御藥并御膏藥、下置々
 一 同十一月朔日難波橋迄攻入先手、言難波迄遣鉄
 砲軍仕翌日五分一と申嶋を陣場、仕石火矢を
 仕付、折可申處同五日盲船仕、木津口、廻し

鉄砲を折せ可申方
 推現様上意、命錢指、延拜領仕、別盲船之艘
 仕立木津口、廻し、めくろ橋、法、後砲軍仕
 敵、橋を折破り、申、此時家士矢川金七、申
 若討死仕、
 一 翌年乙卯方阪御陣、刻如去年大阪、船を出し
 河口式番船を掛、安薩清表、伏兵有、此哉可
 捜求方
 台徳院様上意、別薩島、人数を入、生捕百
 餘人、差上申、
 一 慶長十年六月廿七日長門守総領左郎五郎良隆
 推現様、於駿府御目見仕、此時末園次、御賜

母
 坂
 志

指拜欽仕々同奉於江府

台德院様、所目見仕々此時御馬時服御欽仕々

右所感怙并所書共同名和永古所持仕々

一大園秀吉織田信長より先祖より怙所仕々以上

貞享元年三月日

九鬼大隅守

阿部豊後守殿

堀田下總守殿

徳川幕府、申達書第二拜

一慶長二年大隅守為家督志州鳥羽城并領地三萬

石秀吉公より所仰付々大隅守、為隱居分於勢

州領地五千石拜領仕々

一慶長五年會津御陣、砌

権現様幕下ニ屬一小山迄罷越々慶石田沓部少

輔謀叛池田三左衛門與ニ付三州岡崎迄罷上リ

々慶志州、可罷歸旨所仰下就而歸國仕々大隅

守、沿部少輔與力致一鳥羽城留守居置々家光

々者共進出、紀州新官城主堀田安房守と令合

心兩人多羽ニ籠城仕々故此旨

権現様、注進申上々得未可然相計忠節之可抽

々旨所仰出々就其大隅守安房守兩人方、鳥羽

々城相渡々様ニ々度々扱々以々申越々々共承

引不仕々ニ就而不及是非同國畔衆、古城を取

左數度合戦を致し家人村田七太夫二藤祐助森

田右近其外數人討死仕々堀田家老諸政所々申

母
披
志

左其外敵數多討捨申々

一 同時勢州柔名より氏家内膳舟を出し々二付於
國府表遂一戰首數多討捕遠州中泉ニ而

権現様、奉入實檢々得、當陣一番首、由御説
ニ而則御書御感状下々

一 同時濃州関ヶ原御敵敗北仕々ニ付右鳥羽籠城
致々大隅守安房様城を明ヶ逐電仕々畔柔より

鳥羽、城ニ移り夫より大坂、罷越々 以下第一
辭同文、付畧ス

一 右系圖

家光様御代御改付而 公儀、差上日光、納申
々由其後寛文九酉年紀州九鬼浦、由緒改々爲

二 西野道室老々處九鬼嶋、助方、々系圖あり
云々以下畧

家系畧載

大職冠録足 淡海公不比等 太政大臣房前 頭中納言真種

左大臣内麻呂 左大臣冬嗣 太政大臣長良 攝政良房

関白基経 関白忠平 左大臣師尹 侍從定時

右中將實方 實光 藏人朝實 行久

實行 行繁 左近大夫敬行 熊野別當教真

新宮別當法印行忠 法橋行運 法橋行圓 行實

法印別當退惠 法印別當道實 道有 藏人隆真

右馬允隆良 山城守隆基 大和守隆次 山城守泰隆

宮内少輔定隆 宮内少輔淳隆 澄隆 大隅守嘉隆

長門守守隆 志摩守良隆 式部少輔隆季 大隅守隆常

豊前守隆直 大隅守隆寛 式部少輔隆貞 大隅守隆祺

式部少輔隆郷 河内守隆度 式部少輔隆都 長門守隆備

教真 後白河天皇ヨリ熊野別當職ノ救宣ヲ蒙リ

紀伊國牟呂郡ヲ領シ新宮ニ住ス六條爲義ノ女

塔トシテ源家ノ重寶ナル吼丸ノ名ヲ得以テ

家寶トス法橋熊野ノ混増ハ其ノ長子ニシテ混

快ハニ子ニ本宮ニ居ル

行忠 源氏ノ軍ノ上浴スルヤ義経ニ従ヒ元暦元

年ノ春兵船百餘艘兵士二千人ヲ護岐ニ送ル此

ノ時吼丸ヲ義経ニ獻ス

隆真 足利尊氏ニ臣事シ軍功アリ

隆良 文和年間志摩國英虞郡波切村ニ攻入り數

所ヲ占有ス 此ノ時三ツ巴ヲ殺トス其ノ地ニ病

死シ常禪寺ニ葬ル法名椿山

隆基 波切名田畔堅神等ノ地ニ據住ス 法名宗心

隆次 塔志郡加茂五郷及ビ堅神村一帯ヲ歸伏セ

シム 法名陰壽

泰隆 加茂村田城村ニ一城ヲ築造ス伊勢ノ國司

ト山田祠官ト碓執ノ事アリ國司ヲ助ケテ功ア

リ其ノ賞トシテ二見七郷ヲ賜ハル 法名泰雲

康公 常安寺ニ葬ル

定隆 法名明甫玄愨 同寺ニ葬ル

淨隆 勇カアリ且射ニエナリ 志摩ノ七嶋黨多

氣國司ヲ頭トシ來リ攻ム攻防度々ナルガ田城
ニ據リ屈セズ籠城中ニ病死ス 法名月窓淨明
常安寺ニ葬ル

澄隆 通稱殖五助 天正十年壬午十一月廿三日
逝去 隱殿岡ニ葬ル 岩倉ニ祠アリ 法名慈

光院梅翁淨心大居士 神葬 正一位惣領權現
淨隆逝去ニ降シ姪男某ト勢州朝熊山へ退去

レタルガ再戰雪辱シテ田丸城ヲ恢復シタル勲
功アルヲ以テ延享二年綾部本宮山麓ニ一祠ヲ
建ツ

嘉隆 澄隆ノ早世スルヤ家ヲ嗣グ 織田信長ノ
伊勢ニ入ル時滝川一益ニ倚リ謁見ス鳥羽ニ築

九川陣朝鮮役常
海軍ノ將トナリ切リ

城ス 信長ヨリ野田福嶋七千石ヲ賜ヒ秀吉ヨ
リ鳥羽五萬六千石ノ地ヲ以テ改封セラル。慶長

五庚子十月十二日卒ス生年五十九法名隆興院
殿前隅州大守泰常安。大居士 志州和具村洞

仙菴ニ葬ル
成隆 寛永ニ癸未正月廿四日卒ス 振津三田心

月院ニ葬ル 法名梅溪院殿心岩道鐵大居士
守隆 慶長二年丁酉相續寛永十年三月五日卒ス

六十歳 松嶽院殿前長州大守心月善光大居士
ト謚シ三田ノ月禪院ニ葬ル 月禪ニ春光ニ作ル

良隆 慶長十七年江戸ニ入ル寛永九年壬申相續
同十一年甲戌三月五日卒ス三十一歳 月禪院

二葬ル 法名批禪院殿直翁涼傳大居士

隆季 慶長十三年戊申十月七日鳥羽ニ生マル幼

名式部 寛永十年癸酉三月五日綾部領主ト爲

ル延寶六年戊午五月晦日卒ス七十一歳 法名

大極院殿前吏部侍郎空山了本大居士 鳥羽ノ

常安寺ニ葬ル

隆常 幼名杉千代 延寶二年家督相續 市正又

内匠頭大隅守ト稱ス 元祿十一年寅四月卒ス

法名乾徳院殿前隅州太守仁藏了賢大居士 隆

興寺ニ葬ル

隆幸 天和元年將軍細吉ニ謁見 元祿四年五月

二日卒ス二十一歳 部屋住ナリ世數ニ入ラス

法名知勝院殿俊藏賢英大居士 心月院ニ葬ル

隆直 松平伊勢守信次ノ二男 隆幸死去ニ付迎

ハ入レ養嗣相續 元祿九年子十一月將軍細吉

ニ謁見 同十一年五月晦日隆常ニ嗣キ立ッ實

曆二申年八月四日本所下屋敷ニ卒ス六十六歳

誠諦院殿前長州大守瑞翁了簡大居士

隆寛 建部丹後守政周ノ次男正徳三年正月晦日

家督相續 天明六年午五月廿三日卒去年齒八

十七 泰嶽院殿前備州大守休翁隆山大居士

江戸ニテ葬式

隆貞 明治三年戊三月八日家督相續 安永九年

十二月十二日卒去齡五十三 法名高峰院殿前吏

部侍郎雲外隆招大居士

隆禊 田沼主殿頭権臣田沼山城守意知ノ四男

安永八年養子トナリ天明元五年三月十二日家

督相續同七年正月晦日綾部ニ卒ス年齒二十三

青雲院殿前陽州大守花嶽了芳大居士ト諡ス

隆興寺ニ葬ル

隆郷 隆貞ノ末男 天明七年二月十一日養嗣ト

ナリ同四月七日家督相續ス年八歳

隆備 享和元年四月廿二日 綾部ニ生マル

九鬼氏九世参者車歴

初代隆季 寛永十年丹波入國 十一年戌七月徳

川家光上洛ニ付綾部ヨリ入京謁見勤仕 十二

年夏江戸吳服橋城門石垣普請ノ手傳 十五年

増上寺ニ於ケル將軍法事ニ付山門警衛 十六

年三月敕使御馳走役 十七年辰四月ヨリ同十

二月六日迄大和國高取城番人数七百出張千

人扶持給興セラル 十九年午七月四日ヨリ翌

年五月迄幕府侍士目付高谷藤右衛門預ケラレ

禁錮ス 同十二月廿九日叙爵任受從五位下式

部少輔 幼名式部ナリ 慶安三年寅三月七日

綾部大火公卿士家民屋焼失 四年綾部上野ニ

新館ヲ造ル 明暦元年未七月ヨリ大阪へ出張

朝鮮來聘使ノ接待ヲ勤ノ九月歸國ス 三年丁

酉正月十八日江戸大火大風大火參觀ヲ免セラレ類

ノ爲ニ銀百五十貫目ヲ下賜セラル 寛文三年
卯四月三代將軍家光ノ十三回辰法要日光山ニ
於テ梶井宮法親王馳走ノ事ヲ勤ム 四年辰八
月勸修寺門迹馳走勤役 五年巳四月十七日東
照官五十年忌紅葉山將軍參拜供奉衣冠着用臣
下大紋素袍上下着用 十一年亥四月廿日大猷
院家光將軍二十一回忌東叡山供奉衣冠着用儀
大兩ニテ免セラル 延寶二年寅十一月十六日
出願隱居家督相續謝恩登城 同日芝二本榎別
邸ニ移居五年ノ後江戸ニ卒ス年七十一在勤中
常盤橋鍛冶橋日比谷等ノ城門守衛度々ニ及ブ
領内ニテ白鶴ヲ銃獵シ江戸ニ獻シ賞賜アリ

三男六女 二男妾出隆重ニ天田郡一ノ宮村ニ
テ五百石ヲ興ハ分家トス 三男久隆亦妾出ナ
リ 公館焼失
二代隆常 妾出綾部ニ生マル五歳江戸ニ往ク
承應三年午九月將軍家細ニ初見參ス時ニ九歳
寛文二年熱海温泉入浴 四年入國自後父子隔
年交代出府 登城ノ際太刀馬代紫華十枚獻上
歸國ノ際羽織一枚袴三枚拜領 延寶二寅十一
月六日家督相續父隱居許可ノ謝恩登城 十二
月七日叙爵大隅守從五位トナル 三年卯四月
大猷院故家光將軍二十五回法事下向ノ公御烏
在中納言ノ馳走ヲ勤ム 八年將軍嚴有院送葬

香資銀三枚ヲ東叡山ニ納ム 八年鎮地洪水四千六百七十石餘貢米減耗届書進達 天和二年戊八月朝鮮人來聘駿河國吉原驛通過ノ際饗應ノ命アリ同六日江戸出発九月廿日歸府人數三百二十 三年夏八月家中東町出火 延寶八年後水尾天皇崩御香資ヲ奉ル 同年將軍最右院薨去香資白銀三枚ヲ供フ 貞享元年十一月柁平修理亮幕府ノ譴責ヲ受テ保科肥後守預ケトナル後兄弟タルヲ以テ將軍謁見遠慮ノ伺書ヲ進達ス十二月四日免ゼラル、旨令書下ル 二年丑二月十五日稻葉對馬守亦同様ノコト有リ同月廿二日遠慮其ノ義ニ及バズトノ令アリ

リ亦同様縁者ナリ 同年四月幕府勘定方坂部三左衛門外一人ノ預カリ申渡サレ保管中切腹ノ刑書下リ六月廿二日本邸ニ於テ自刃女借人藩士西山七郎右衛門佃傳兵衛之ヲ行フ臨見役人參咥ス 三年鐵砲改アリ證狀ヲ出ス 三年寅四月西町四十六民家火災 五月八前將軍最右院七回忌法要衣冠供奉 七月田町出火二十戸焼失 六年酉六月京都火消役申付ケラレ九月朔日ヨリ翌年三月ニ至ル馬上十二名士卒合六百人出張役料三百人扶持給與セラレ 九年子十一月廿二日柁平伊豆守四男萬之助ヲ養嗣子トス 十年三月江戸下向ノ公卿外山三位

ノ馳走役トナル 十一年三月廿二日参観出祭
病ヲ興シテ参河池經鮎驛ニ到リ旅館ニ卒ス四
月朔年齒五十三江戸ニ於テ埋葬スベク出願シ
テ許可ヲ得ス四月十三日同驛出棺同十八日綾
部着ニ十日隆興寺ニ葬ル 在世中勤ムル所常
盤橋鍛冶橋数寄屋橋吳服橋日比屋馬場門等守
衛ノヲアリ五女子一ハ早世一ハ秋田沓路守ニ
嫁ス一ハ家臣三枝右近ニ嫁ス一ハ早世長子隆
幸アレドモ二十一歳ニテ卒ニ世數ニ入ラズ
三代隆直時代 松平伊勢守信次四男元祿九年子
十月廿二日養子願許可齡十歳十一月二日初登
城謁見十一年五月晦家督相續 九月兩國橋消

防騎士七人士卒百七十人コレニ當タル 十二
月十日上屋敷類焼本所下屋敷移住 類焼ニ付
消防免除家宣將軍松平右京大夫郎ニ臨ムニ付
勝手詰トナリ周旋饗應シテ鍛冶ノ仕舞ヲ台覽
ニ供ス時齡十四歳人々之ヲ榮トス 十四年己
二月十八日幕吏高木太郎ノ二子新次郎幾之助
ノ保管ヲ命ゼラル甲十五歳乙三歳江戸郷ニ置
キ之ヲ綾部ニ移スノ出願ヲ許可セラレ暫コレ
ヲ中屋敷ニ入ル寛永六年丑五月ニ至リ新將軍
家宣立テ赦令下ルニ人ヲ丹波ヨリ江戸ニ送ル
旗下士横山半十郎受取トシテ表ル人其ノ罪狀
事故ヲ知ラズ 四月鐵砲洲消防ヲ命ゼラレ自

町
皮
志

後六年ニシテ免役セラル十五年元服式部ト名
乗ル 十六年八月丹波洪水高八千石ノ地ヲ没
シ永荒地トナル分少カラズ 將軍松平右京太
夫邸ニ臨公毎ニ仕舞ヲ台覽ニ供ス竹生嶋弓八
疇ノ切等ナリ 寛永二年酉四月賜暇入國 四
年亥八月大風大雨高六千八百石ノ損耗ヲ見ル
九月上所本町民家三十餘戸焼失 六年六月七
日大風雨高四千八百二十石減耗 每災江戸留
守居役ヨリ幕府へ上申ス 叙爵授任從五位下
豊前守七月京都防火隊二百六十人騎士十二名
出役ス 早魃高五千九百九十三石不收申告
寶永七年三月京都防火隊歸邑 將軍佛參供奉

正徳元年卯十月朝鮮人來聘山城淀ヨリ江戸迄
ノ乗馬二頭附屬物件共提供ス 十一月十二日
江戸本邸類焼松平駿河邸借住越年 二年建部
家ヨリ養嗣子辨之助ヲ迎フ 三月秋元隼人ノ
邸ニ移ル六月新邸成リ歸住ス 三月多病ニ付
隱居願濟晦日本所ノ別邸ニ入ル 享保十七年
改稱長門守トナル老中黒田豊前守ト同稱ナレ
バナリ老中ノ同稱ナル時丁レヲ避クルハ舊例
ナリ元文五申年二月除髪シテ瑞翁ト稱ス兼興
ニテ諸所ニ遊行ス寶曆ニ申年八月四日中風症
ニテ逝ス年六十六在職中江戸番所勤務前代ノ
如シ一男一女アリ男ハ隱居後ノ妾出名ハ隆英

支 志

女子十九歳ニシテ死ス

四代隆寛 幼名辨之助建部家ノ子 黒田豊前守
ノ女ヲ娶ル正徳二辰年三月相續三年將軍家宣
ニ見参ス時ニ年十三 三年正月晦家督相續許
可謝恩登城五年未正月本所火防拜命六月十三
日免ゼラル 四年午十二月從五位下大隅守叙
任 享保六申年正月十一日上郎類焼猿江所ノ
下郎ニ假居ス四月本郎成リ移居ス 二月綾部
大手門及ビ家臣九戸焼失 三年戊四月晦將軍
有章院家繼三回忌辰法要ヲ増上寺ニ行ハルヤ
衣冠ニテ將軍吉宗ノ供奉ス 四年綾部士家ニ
十戸焼失 四月休息出願ノ許可ヲ得テ初

入國 六月京都火消役下命 前隊百二十三人
後隊四十七人 前隊五騎後隊四騎 銃十挺弓
十張槍十本 列ヲ成シ京ニ入ル 朝鮮人朱聘
ノ歸途新居ヨリ淀マデ鞍馬三頭厩卒附属品差
出 十月十日將軍常憲院法要ニ付衣冠供奉
六年丑閏七月丹波大風雨六千四十餘石ノ收稅
減耗 十二月十日本郎類焼難火數度ニ及ブラ
以テ屋敷替ノ所望無キ宇明キ地ニスベキ宇將
又惣尾葺ニスベキ宇ノ尋モアリ由リテ惣尾屋
根ニスバク答申ス此ノ時在邑中幕命アリ參觀
容赦在邑一年半ニ及ブ同月二十二日新館成リ
夫人以下歸住 八年丙三月十二日參觀献上太

丹波
新館
志

刀馬代金綾紗二卷 従前ハ時服ニ襲ナリシヲ
改メタルナリ 七月養母光徳院相州塔ノ澤温
泉入浴 九月賜暇紗綾五卷并領 従前時服羽
織等五枚ナリシヲ改メラル 十年巳三月小金
ケ原鹿狩ヲ命ゼラル 七月藩中ハ貸米ス知行
取ノモノハハ五分ノ割中小姓以下ノモノハハ
十分一ノ割 領地高九千八十石餘ノ減收幕府
ハ申告ス早損ナリ 將軍小金ケ原狩獵供奉周
旋 十二年高八千八百九十石早損申告 十四
年酉五月將軍嚴有院五十回法要衣冠ニテ上野
ハ供奉 九月大風雨高四千四百五十石減耗申
告 十五年戌早損九千九百九十石餘申告 十八

年駿府加番左勤 同年綾部新所出火五十七戸
焼失 九月加番終リ歸邑 二十年大風雨洪水
山崩田畑荒廢高九千八百石連年ノ凶災ナルヲ
以テ申告ノ上所日代ハモ通告ス寛保元年酉八
月將軍吉宗右大臣昇任家室右大將昇任ニ付東
帶登城奉賀 延寶元年八月十三日大風雨領地
高三千二百二十石減耗〇五年六月朝鮮人未聘歸
途鞍馬三頭遠州荒井ヨリ城州淀マデ例ノ如ク
差シ出ス 九月二日ヨリ大雨連日損害四千百
六十五石 隱居瑞翁病氣江戸ニテ療養願濟閑
所夜中タリトモ通行免許アリ 大病歸篤ノ報
アルヲ以テ綾部急祭君臣東行須知驛ニ於テ赴

二年
二年御朱印改下リテ
將軍判物ヲ賜フ

山崎
山崎
山崎

吾ヲ齋々急騎ニ過ヒ一行歸邑ス 六年子四月
 綾部田家二百十九戸焼失申告 十年辰十二月
 四日井上河内守亮中トナル名前差合ニ付備後
 守ニ改ム 十二年午二月十二日綾部田野口門
 番所焼失 朝鮮人來聘舞坂驛ヨリ江戸迄鞍馬
 四頭差出ス 明和三年三月隱居願湊休翁ト
 改稱ス 天明六年五月廿三日上屋敷隱居所ニ
 逝ス年八十在職中江戸城門對番前例ノ如シ
 四男隆恭 隆由 隆邑 隆貞 長子夕病ニ付
 廢嫡 次男同姓隆祇ノ名迹相續三男同姓伴勢
 守隆由名迹相續四男相續
 五代隆貞 幼名猶之助改名帶刀主殿等 綾部ニ

同三年判物米印
 賜

生マレ延享二年父ニ隨ヒ江戸ニ往キ三年在府
 寛延二年己十一月再出府兄ニ継ガ嫡子トナリ
 將軍家童ニ謁見明和三戌三月八日家督相續式
 部少輔ト稱ス 六年丑五月駿府城加番在勤七
 年寅七月廿九日綾部大手門失火臣家四戸焼失
 九月加番役濟歸邑 連年領地早損一萬六千石
 餘減耗コレニ由リ本所米藏防火役ヲ免セラル
 六年氏家二十六戸焼失 九年賜暇歸邑スルヤ
 病起コレ療養ノ爲出府願書ヲ亮中ニ差出シ十
 一月廿七日江戸着十二月十二日逝去年五十三
 勤務例ノ如シ三女一男皆早世保科家ヨリノ養
 子隆晃亦死ス

叫
 岐
 志

六代隆稷 幼名鐵吉田沼云蕃頭意次四男隆貞嫡
 女ノ輝養子安永八年願齋入家 天明元年丑三
 月家督相續十五日登城謁見二年寅十二月叙任
 大隅守ト稱ス 天田郡ニテ十二箇村ヲ上地シ
 桑田郡ニテ七箇村下ク渡サル之ニ由リ多年ノ
 水患ヲ免ル 田沼云蕃頭退役加増領地取上ケ
 ラレタルヲ以テ差扣ヒノ所ソノ儀ニ及バズト
 ノ沙汰アリ先中トシテ不正ノ行爲多カリシガ
 爲ナリ 七年未正月在邑中発病京醫和田泰純
 外近邑ノ名醫數名ヲ聘シ診察セシム 同月晦
 卒ス年齒二十三在職短日月記載スベキハ霖雨
 減稅ノ事ノ三一萬三百餘石損害ノ下サヘアリキ

七代隆郷 隆貞ノ末男 天明七年二月十一日隆
 稷ノ養子トナリ許可ヲ得テ四月七日家督相續
 時二年ハツ名ハ定五郎 寛政元年酉六月大水
 高四千八百七十五石損耗申告ス 二年戌十二
 月江戸下屋敷類焼 四年幕府學校聖堂孔子像
 遷座事務ヲ掌ル 十二月聖堂火防在役ヲ兼ス
 五年免役 三年亥八月大潮本邸ニ入り廣間板
 椽ヲ浸ス江戸市中大羊禍セラル八月大雨洪水
 高四千八百五十石餘損耗 孝行及ビ奇特者人
 名届出ヅヘリ沙汰アリ 五年丑十二月五箇年
 圍米皆濟コレハ寛永元年幕令高一萬ニ付五十
 石ノ貯蓄添アリ十月家齊將軍ニ謁見十二月十

叫 坡 志

七日式部少輔任受 八年辰四月十八日賜殿初
 入部 九年己四月吳服橋門番所詔 五月五日
 將軍家慶一謁見十年江戸参向公卿梅小路中納
 言馳走役 十一年幸橋門勤番 八月九日伊達
 若狭守ノ妹ヲ娶ル 領内早懸高六千七百七石
 損毛 領分換ノ命アリ天田郡ニテ三村受領
 十二年夏蟲害高七千二百四十石餘 享和元酉
 年二月廿四日綾部家中藪所田野口門内外三十
 餘戸焼失四月廿二日仙之助生誕 安政年門岳
 川灣砲臺建築ノ勲定奉行トナル外國ト隙アル
 際ナルヲ以テ軍裝出陣國邸大半空虚 嘉永六
 年丑六月米國軍艦浦賀ニ入ヨリ防禦御用ノ命

アリシヨリ江戸邸内警務虚日無シ 安政二年
 江戸ニ講武所ヲ置キ旗二下士三又二教授三ス掛カリ役
 大名旗下士九名隆御具ノ一人タリ 六年水戸
 家老安嶋帶刀ヲ保管ス 元治元年山城國檜原
 非常警衛勤役藩主ハ上京シ本願寺西ヲ本陣ト
 シ時々朝参シ自後江戸参觀ヲ廢ス江戸ノ本邸
 別邸ヲ鎖シ男女老少皆綾部ニ移ル 警衛一
 年ニシテ免ゼラレ君臣歸邑ス 文久二年亥夏
 老ノ坂警衛ヲ命ゼラル 元治元年從五位下叙
 爵 慶應元年攝海ニ外國軍艦游ヤスルヲ以テ
 京阪ノ人民騷擾スルノ報知探索方ヨリ急報アリ
 俄ニ上京シ禁闕ヲ衛ル君臣大軍裝束ヲ用ヒ

江戸
 警衛志

軍服ヲ用意ス

八代隆備 父子在京禁闕ヲ守ル慶應四年(明治元年)

正月二日伏見烏羽ノ戦起コル軍装ニテ禁門ヲ

衛ル 明治二年封土奉還 東京行幸御留守警

衛ヲ勤ム以後ノ事ハ別紙所々ニ散出ス併見ス

バシ

軍役行列

小頭一人 絆金唐團扇吹貫一人 せなかー綴付 二人一々扣

旗一本 せなか指綴付二人一々扣 旗 同同同同 甲 甲立ニテ持

口取 騎馬 若黨一人 鐵砲一人 道具一人 草履取一人 小頭一人 鐵砲 同同同同 鐵砲 同同同同

同同同同 弓 同同同同 甲騎馬 甲立ニテ 若黨一人 道具一人 同同同同 若黨一人 道具一人

草履取一人 小頭一人 鐵砲 同同同同 同同同同 甲騎馬一人 士同

同同同同 小頭一人 長柄 同同同同 同同同同 同同同同 甲騎

馬 同同同同 騎馬 同 步士 同同同同 騎馬 同同同同

步士 同同同同 同同同同 同同同同

本陣 騎馬 同 步兵 絆 鐵砲 同 弓 同 貝 甲騎馬 家老

步兵 同 同 同 同 同 同 同 同 騎馬 同 步兵 同 同 牽馬 同 皆 皆

小頭 鐵砲 同 同 同 同 同 同 同 同 弓 同 同 甲騎馬 步兵 同 同

同 同 同 同 小頭 長柄 同 同 同 同 同 同 同 同 騎馬 步兵 同 同 小頭

絆 金圍子 馬印 手替 小頭 大 小頭 小頭 烏毛槍 烏毛槍

徒士 同

長太刀 槍 同 口取 大將 槍 立竿 同勢 長持 宰領

騎馬 步兵 同 同 騎馬 步兵 同 同 騎馬 步兵 同 同 同 同 同 同 同 同

衆掛醫師 長刀 步兵 同 同 衆掛士人 步兵 卒 卒 衆掛士人

卒 同 同 駈落宰領 駈落宰領 駈落宰領 騎馬 卒 同

同 同 同 鐵砲 同 同 同 同 同 同 同 同 弓 同 同 同 同 小頭

安政年間 旗 同 四人 鐵砲 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 具足 同

同 同 同

傘 小者 玉藥小人 小頭 騎士同 馬屋四人 步士同同 挑灯

同士 草履取 弓同同同同 矢箱小人 幕串小人 坊主同

小頭 持筒 小頭 辨當 板板門 玉箱小人 馬印二人

小頭 小姓馬同同同 馬屋同同同一人 指物 甲五一人

尻籠小人 扇子辨當小人 人足同同 醫師 火工 賞使 挾箱

同 茶辨當一人 草履取 料理人同 借入同同同同 使者

同同 刀差同同 夜迎同同 中中姓同同同同同 徒徒士同同同同同

賄人下男同同

合百九十二人 侍分五十四人 下々九十八人 又者四十人

在國臣名 給人 九鬼權兵衛 中中姓 越賀興兵衛 西尾藤九郎

伴田五右衛門 小川傳五衛門 細野又右衛門 淺田庄右衛門

橋本作左衛門 足立利八 大河原勘兵衛 田田金右衛門

田口利兵衛 川村小十郎 平和五太夫 西村彌右衛門

柘田藤左衛門 伊藤彦兵衛 川合安左衛門

徳士 熱田茂一	高井仁太夫	田村源助	山添彌九郎
川村太左衛門	川北善左衛門	白井喜六	小井庄太夫
近藤新右衛門	池田又左衛門	中川源五兵衛	暖部平七
太田八郎兵衛			
江戸常府	沼井小右衛門	中根三左衛門	今中道休
坂崎儀左衛門	池田友右衛門	神田權右衛門	高橋源兵衛
水升四郎太郎	神田卯之助	大復賀源兵衛	賀積寺平三郎
齊藤大助	三鬼嶋丹歌	原 彌四郎	戸川六右衛門
川原六兵衛	山添彦九郎	上田小兵衛	十倉太左衛門
小嶋庄左衛門	大原五郎右衛門	川口林吉	川北茶来
上田嘉右衛門	足輕二人	小人六人	板ノ間二人
奥下男二人	買使一人		下男二人

惣ノ二百人 女中八名ス 寛文十戌十月日

海士乃たきさし 慶長年間越賀嶋へ一本塊漂流
 之来ル海人コレヲ取り塩屋ニ入レ雜木ト共ニ焚
 ク俄ニ香氣四方ニ散セシカバ海人等訝リ只物ナ
 ラジト云ヒ之ヲ越賀隼人ニ献ズ隼人ソレヲ殺ギ
 其ノ一片ヲ火ニ投ズ忽地奇香ノ鼻ヲ撲ツヲ覺エ
 之ヲ奇トシ長門守ニ奉ル長門守又コレヲ驗シニ
 代將軍ニ献ズ將軍コレヲ禁内ニ奏上ス是ニ於テ
 外國ノ名木ナルヲ知ロシ召サレ銘シテ海士乃
 たきさしト云フ。拾芥抄ニ見エタル名笛ニ海人ノ煙残アリ。
 節分ノ豆撒キ 福ハ内鬼ハ外ト云フベキヲ西九
 鬼家ト分家ニテハ福ハ内鬼モ内ト唱フ之ヲ撒ク

モノ與ヨリ表ニ及ブ戶外ニ待テ構ハ居ルモノ黒
裝束鬼面ニテ一齋ニ云関ノ戸ヲ排シテ入り采ル
禮装シタル年男コレヲ迎ハ應對スルノ例言アリ
テ式ヲ了ル式後宴ヲ賜フ黒鬼ニハ青差三貫文ヲ
賜フ當家ノ苗氏ニ對シ鬼ヲ外ニセガルノ意ヲ示
スモノトゾ
文化四年丁卯ノ冬丹後方面ノ人氣何ト無ク騒ガ
敷ク聞コユルニゾ探索方ヲ派出セシメタルニオ
ロシヤ國ヨリ日本ヲ取りニ來ルトノ流言アリ又
曰ハクカラフトハ最早取テタリ日ナラズ南ノ
方ハ軍艦ヲ廻ハスバシト又曰ハク將軍家ヨリ差
シ止メテレタルニモ聞セズ近海ヲ衆廻ハリ都合

能キ場所ヨリ上陸ナルナリト翌年戊辰三月廿一
日田邊^鶴海邊ハ何物トモ知レヌ毛物荒皮又ハ
大桶ナド漂着ス澳人等コレヲ檢シ樽ノ如キ物ヲ
コガアケ具ノ内ヲ見レバ油ノ類カ瀝^テ膏ノ類カト
思ハル、モノ盈テリ浦人ヨリ之レヲ代官ニ報告
スルニゾ役人臨視スルニ其ノ何物ナルヤヲ知ラ
ズ且從前ノ漂流品トハ類ヲ異ニスルヨリ領主ニ
急報ス藩史亦來リ驗視シテ大ニ驚キ時節柄象テ
置キ難シトシ早打ニテ江戸ハ注進シ田邊藩ハ士
ノ足留メヲ命ジ上下ノ氣分浮キ足ノ體ニテ如何
ニ成リ行クカト恐テ其ノ日ニ送リ又當
藩モ此ノ事情ニ由リ隣藩ニチチ合ハセ用意ヲサ

ヲサ解ラザリシガ次第ニ人氣ノ回復シタルヲ以テ
解嚴シタリキ其ノ樽ト云フモノハ石炭油カタ
ルヲ入レタルモノナルベシトゾ

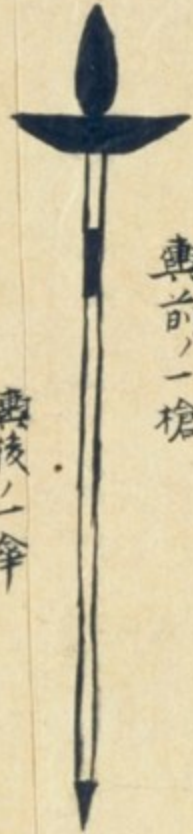
表高壹萬九千五百石 寛文四年六月二日高ノ朱
印ヲ賜ヒ實ハ二萬石ノ地ナリ并ハ特興ナリ城郭
ヲ有スルニ及ハズ當時在府シテ參觀交代ノ勞費
ヲ免レニ萬石高ノ兵賦ヨリ減小セラレバナリ
高ノ内壹萬二千七百四十三石三斗四升三合何鹿
郡ニアリ六千七百五十六石五斗七升天田郡ニアリ
其ノ内三百餘石ハ小成物トテ高一石ニ付銀十匁
納 平免四ツヨリ六ツマデ村柄ニ由リ高下アリ外ニ
口米道米等例ノ如シ口米石ニ三升道米石ニ一斗

遠近ニ由リテ差アリ一斗ニ付最遠ノ所夫米ニ升
ヅ、

行列式

徒士同同 駕脇同同
徒士同同 槍 駕脇同同
徒士同同 駕脇同同 草履取傘 別當
引馬 笠籠 足輕頭
合羽籠 押足輕

輿前ノ一槍



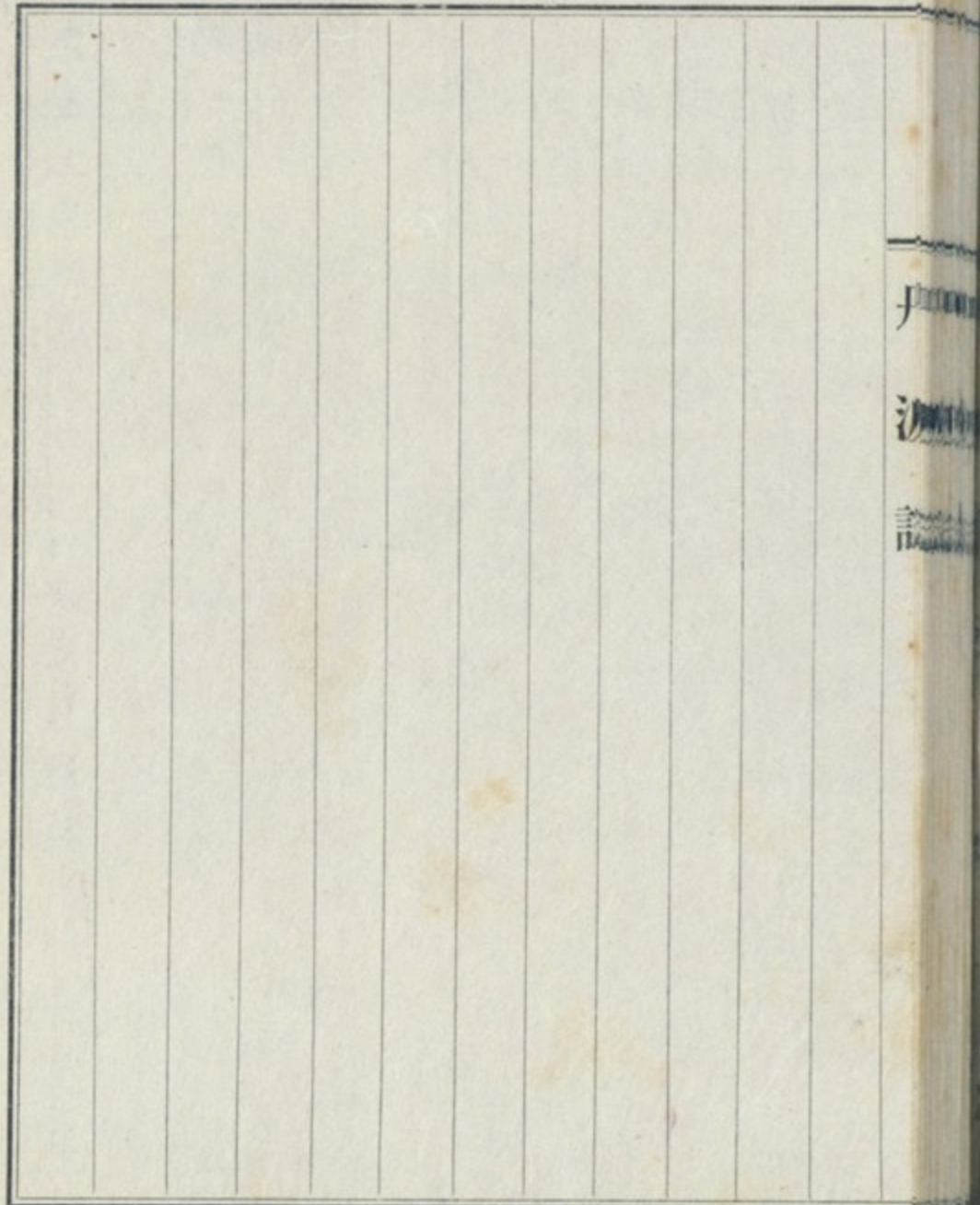
輿後ノ一傘



押ノ印



下部
六尺号ノ印



大関香合ヨリ賜レ馬印
出火ノ際 消防用ノ繩ニモ之ヲ用エ



エノニ凡ヲ金ヲ團ト去テ黄金箔ニテ塗ル
馬蘭ニ銀色ナリ

臣大夫服



秀吉ヨリ賜テ所
高ノ吹貫

定紋

丸

替紋



中古迄巴ヲ本紋
トス丸ヲ定紋トシ
テ以末三頭を巴
ヲ本紋トセリ

大坂陣後七皇ヲモ用テ是ハ鳥羽ノ原家
ノモノナリ傳紀参看セヨ



丹波九鬼氏傳テ序デントスレバ志摩九鬼氏ヨリ
始メサル可ラス然ラザレバ前後ノ情態明了ナラ
ザレバナリ故ニ煩テ避ケスレテ之ヲ掲出ス者
諒マヨ 前文参看

丹波九鬼ハ無城大名百家ノ一ニ居リ陣屋ヲ緩部
ニ構フ丹波四陣屋ノ一ナリ世俗ニハ一萬石以上
ヲ推シナベテ大名ト言ヘド十萬石未滿ヲ小名ト
言フノ例モアリ陣屋ハ城ノ如クニシテ堅固ナラ
ズ塞又ハ寨或ハ砦ト言フモノナリ君侯歸邑ノ年
ハ之ヲ以テ住處トシ家老ヨリ足輕ニ至ルノ邸宅
コレヲ遠ル 江戸本邸ハ上北八町堀ニアリ半町
四方計リ下屋敷ハ別ニ之アリ幕府ニ登ル時ハ柳

丹波志摩

ノ間ニ祇候スルヲ以テ柳間大名ノ目アリ外様大名トモ言フ徳川氏以前ヨリノ侯伯ニシテ之ヲ譜代大名ニ分ツ毎年四月出立ニテ江戸ニ登ル着都スルヤ將軍ニ謁スルノ贄ハ卷絹三個ト馬代銀若干トス賜暇出癸ニハ卷絹五個ヲ賜ハルヲ例トス正月ニハ千鯛ヲ献シ江戸着祝ノ献上モ同品ナリ白木ノ箱ニ入レタルモノニテ儀品ナリ食品ナラズ四月ニ歳粉八月ニ山椒十月ニ栗等孰レモ國産ニ係カル之ヲ御山椒御栗ナド唱ハ一粒撰ニシ固ク封シ士分ノモノ足輕ヲ隨ハ護送ス江戸行程百三十六里 再出

大坂陣ニハ七百八人ヲ出ダシガニ萬石トナリテヨリハ前示ノ如ク二百人位トナル江戸軍役ノ所ニ示セル如シ高二萬石實收七千石位 此ノ内ヨリ江戸邸建築修繕内外交際費參勤交代道中費目河川普請道路補助軍器購入修繕社寺寄進軍役防火役徒雇料婚嫁儀式ヨリ家臣秩祿等ヲ支出セザル可ラズ餘廩ナキモ理ナリ

一家老五百石ノ呼高ナレドモ引高ト唱ハ百石ヲ減ジテ四百石トシ實收百二十石猶コノ内ヨリ十一石ニ斗ヲ引ク

二番家老二百五十石實收七十五石 三番家老二百石實收六十石 四番家老百五十石實收四十石

呼
岐
志

内三名ヲ表家老又ハ年寄ト呼ビ公務ヲ掌ル澤
 野西尾稻田ナドノ家コレニ當ル
 騎士二十九家コレヲ上士格トシ此ノ内ヨリ公用
 人九名ヲ出カシ家老ヲ輔ケ政務ヲ執ル此ノ中
 一勝手掛カリアリ一人ノ家老ニ属シ公務ニハ
 與カラズ専主家ノ私事ヲ執行ス
 給人 數人 中小姓 數名 徒士 數人 足輕 數十人
 小者 數十人
 大名旗下ノ臣ヲ家中ト呼ブ維新後大字家中アリ
 昔ノ家中町ナリ 東町 大手町 土手町 枕町 南町 田
 野口町 藪ノ町 刺刀町 中ノ町 袋町 新宮等ハ維
 新後モ士族卒ノ住宅地ナリキ長屋鹿長町アリ是

等ハ小者多ク住居セリ 維新ノ大打撃ヲ受ケテ
 方向ニ迷ヒタル者夥ナル中ニ士族ノ重ナルモノ
 百二十名ト右長屋住居ノモノ大抵神戸ハ出稼
 シ過半成效ニタルハ他藩ニ向テ誇レルモノト
 云フ
 藩主ノ寶藏ニハ希代ノ珍品多カリシハ朝鮮役ノ
 獲得ニ係ル所ニシテ志摩九鬼ヨリ分チタルモノ
 金梨子地ノ布袋鞍ヤ緋威ノ鎧ニシテ銃丸ノ跡ア
 ルモノ三圍子ノ馬標ナドハ先代ヨリノ遺品ニ係
 カル(前示ニ圍馬標ニ異ナリ)阿彌陀堂ノ茶釜徳川家治將
 軍ノ書幅初代將軍ヨリ直筆ノ賜書(並々感状ニアラズ)
 二代將軍三代將軍ノ徒書ニテ興味アルモノ美福

町
 賦
 志

門院手書ノ法華經ナドナリ中ニ執キ著者が見テ
悅惚タルモノハ清ノ康熙帝ノ書ニテ雪消山骨露
ノ五文字ニゾアル之ニ大印ニ個ヲ捺セリ是レゾ
朝鮮分捕届中ノ逸物ト云フ
舊臣問答 著者曰ハク私ハ十年來丹波ノ事情ヲ
取調ベラハ筆記シテ井ルノデ今般御面倒ヲ致シ
タ譯デゴザリマス 士族大石某曰ハク其ノ事ハ
舊主人ヨリ承ツラ居リマスガ先生ハ多分舊主人
ヨリ御聞取りニナツテゴザリマシヨウニ 隆備
君ヨリ多少承リ御所藏ノ品モ詳見シタリモアリ
マスガ何分御大名ノ丁デ委敷イリハ御存ジナイ
様デシタ私ノ伺ヒ度イリハ維新前後ノ史談デゴ

ザリマス 大石曰ハク其レデハ記憶シテ居ルニ
ニテ申シ止ゲマシヨウ 御承知ノ通り大藩ト違
ヒマシテ臣家ノ少イ丈ハ勤向キヲ融通致シマシ
テ籠脇ヲ勤メマスル給人ガ使者ニモ出ル御城使
ノ者ガ供方ハ廻ルトナドハ珍ラシイ丁デハ無イ
ノデ大藩中藩カラ見マシタナラバ能クモ立チ廻
ハレルト忪レルデスガ具所ハ小藩ダケデ事モ少
イ故遣リ切レル譯ナノデス大藩中藩デハ御使者
藩ナド申シマシラ使者ニ出ル役人ガ幾人ト極ツ
テ井マスシ防火隊云関藩下屋敷詰中屋敷詰山方
川方何カラ何マデ専門的ニ備ヘテアリマスガ小
藩デハ左様参リマセヌ 斯ヤウニ申シマスト小

丹波志

藩ハ直打が無イ様デスガ大藩ノ人ニ交際シテ後
ハハ高リマセヌナゼト申シマスト一方ノ勤向キ
ハ巧者デスカ多方面ハ向ウテハ働キガ鈍イデス
留守居役デサハ左様ソウデゴザリマス御承知ノ
通り留守居ト申ス後ハ主人ガ在國中江戸部ヲ預
ル後デスカ何時ノ頃ヨリカ外交官トナリマレテ
種々ノ公務ヲ取扱フトナリマシタ大中藩デハ
其ノ留守居ガ公儀(幕府)ノ施政上ニ探リヲ入レ聞
キ得タトヲ主人ニ聞カセ家老ニ知ラセ一藩ノ興
論ヲ定メルノ機関デスノデ諸藩ノ同役同士ノ交
際ニ忙殺セラレ自然其ノ方面ノ智識技倆ハ巧者
トナリマスカ其ノ替リ其ノ藩ノ會計ガドウカ民

治ガドウカ人物ガドウカ領地ノ人氣ガドウカナ
ドノ智識ハナイデス小藩ハ其ノ般ニ於テ普通萬
能デス御一嘆下サリマセ 是レデ二百餘年鍛ヒ
搦ゲマシタ習慣ガ安政文久以來崩サトマシテ
幕府カラノ命令ニ東西奔走スル運命ニ立至リ藩
カノ疲弊如何ニ成リ行タトカト心配致シマシタ
以前ハ御手傳トカ御用役トカ申シマシテモ江戸
見附(坂門ノ)番トカ城普請ノ手傳ニ出ル位デ先例ニ
因ツテ行ケバ勤マリマシテ帳面ニ從フテ運動シ
先規ニ外レサハセネバ幕府ノ大目付ノ叱リモ受
ケマセシデシタガ安政年間江戸灣防備スナハチ
品川沖砲臺建設ノ勘定奉行ヲ言ヒ付ケラレマシ

タガ第一ニ嘗ノマシタ當藩ノ苦味デナザリマシ
タ先生ハ幕臣デ御出テ、ス故疾クヨリ御承知デ
申上ケルモ管デスガ御勘定奉行ト申ス役ハ三千
石高ノ旗本衆ガ本役トナリ公事方ト申スノガ今
ノ大藏卿(後ノ大藏大臣)デ道中御奉行御勝手御掛リナ
ド幕府ノ内外出納ノ全權ヲ握リ大目付ト共ニ大
政治ニ關係致シマス莫ノ下ニハ御勘定吟味役ガ
アリマシテ會計検査官デス猶下役ガ許多アリマ
スガ私藩ニ於キマシテハ例ノ無イテ當惑致シ
マシタ一朱銀ノ下々テ御臺場ト緋号シマ
シタハ此ノ時ニ鑄造シテ一時ノ急ヲ凌イダノデ
ス大阪ノ御金藏カラ軍用金ヲ夥數ク出シテ諸

藩分配ノ下ヲモ取扱ヒマシタ江戸師ノ臣下デ
ハ不足デシタノデ國元即チ此所カラ大抵出掛ヒ
マシタ何分軍前普請ト申スノ軍器ヲ用意致シ
何時外夷襲来ノ下アリトモ且戦ヒ且禁テ下ノ出
来ル様用意ヲ致シテ居リマシタ此ノ入費ハ藩ニ
取り疲弊ノ一原因トナリマシカ都合三臺場ガ
出来揚ガリ諸藩ノ人数ガ之レニ入り込ミ引渡シ
濟トナリ褒美トシテ時服袴領位デ一級落デコサ
リマシタ此ノ疲弊ノ埋メ方ハ百姓ハ用金申シ
渡シ藩札ノ増發テ地方モ亦疲弊致シマシタ其
ノ後ハ大ニタ弊害モ蒙リマセンデシタガ浪士ガ
徘徊シ勤王攘夷論ヲ唱ヘマシテ但馬生野ニテ旗

丹波志

揚ゲマシタ時ハ近國ノトテ防備ノ申シ渡シカ
アリマシタ此ノ時私ハ江戸勤番中テ國元ノトハ
一向知り得マテナシダ御話カ前後シマスカ存シ
マセマカ天下ノ形勢カ變化致シ大權カ京都ハ遷
ルトトナリマシタ當藩モ江戸ヲ引掛ヒ國本ト京
都トニ在任スルトトナリ元治元年山城國樞原ニ
番所ヲ楳ノ丹波口ノ非常警衛ヲ勤メマシタ西
ニハ龜山園部等ノ藩カアリマシタ東ノ方ナル丹
波口七條口等諸藩ノ出張カアリマスノデ中ニ丹
ヲ樂ナモシマスカ何分天下ノ動搖ト申スノデ諸
藩カラ臣下ノ脱走届カ頻々出マス故何時何事カ
起コルカ知レズ且長州藩カ幕敵トナリ近ク天龍

寺ニ陣スルアリ伏見ノ藏屋敷ニ陣スルモノト連
絡スル要衝ニ當ル所ニ在ルヲ以テ藩主ハ上京シ
テ本願寺ニ陣シ應援ニ備ヘ俄ニ番所ハ士分ノモ
ノ數名ヲ増シ足輕數十名ヲ増スナド周章シタル
ト數度ゴサリマシタ二月ニ休息ヲ命ゼラレテ歸
邑シマシタガ同五月十九日幕長ノ衝突ハ案ノ如
クニ起コリマシテ長藩不平ノ徒カ暴舉シテ禁關
ニ發砲狼藉致シマシタ在京ノ士カ早馬ニテ綾部
ハ報告シマスヤ否藩主以下軍裝（甲冑旗幕鼓樂等）三百
餘人ヲ引率シテ上京シマシタガ長州敗軍ノ後ニ
テ八月マテ警衛致シ休息ノ命ヲ得テ其ノ五日ニ
歸邑致シマシタ國元デハ數度ノ出陣ニ實際ノ

町
成
志

經驗ヲ積ミ小人數ナカラモ訓練(練兵ノ)ヲ重ネ小藩ノ刻合ニハ整頓致シマレタ慶應元年十月五日俄ニ上京シテ禁闕ヲ守ル升ハ攝海ニ外國船ノ出沒スルヲ以テナリ時ニ俄羅斯ノ北疆ヲ窺フアリ英亞ノ幕府ニ迫ツテ通商ヲ要求スルアリ朝廷ハ之ヲお拵ハトノ命ヲ出ダス幕府ハ開港説ニ傾キ政令ニ途ニ出テ諸藩適從スル所ヲ知ラズ藩々ヨリ周旋方ナルモノヲ出カシ輿論ヲ聞キ之ヲ固元ニ報シ以テ嚮背ヲ決スルノ一助トスルニヨリ弊藩ヨリモ人選シ之ヲ京師ニ出ダシ周旋致サセ利スル所少カラザリシモ交際費ノ夥多ナルニハ閉口シマレタ江戸時代ニハ留守居ノ交際費アリ

タルモ小藩同士ノ丁逆身分相應ナリシガ京都ニテハ大中藩トモ交際セザルヲ得又時宜ト相成リ一層ノ困難ヲ作り出シマシタ爾後在京シ歸邑寧歳ナキヲテシタガ慶應トナリ國家益々多事デ皆掛ニモ守備兵ヲ置キマシタガ朝廷ノ爲ニ守ルノカ幕府ノ爲ニ守ルノカ判ラヌトトナリマシタ然ル所以ハ前年幕長ノ間ニ兵燹ヲ開キタルヤ長藩ヨリ諸藩ハ廻ハシタル陳情書ヲ見レバ同情ヲ寄セネバナラヌ又次第テ諸藩ノ周旋方モ稍く心ヲ西ニ傾ケ長州ノ勤王説ニ傾キ之ヲ以テ藩ノ有方者ニ説キ込ミタ故デス茲レニヨリ當藩モ一致致シ終ニハ幕府ヲ見限ルトトナリマシタ同國ニ

丹波志

アリテモ龜山藩ハ流石徳川ノ末流ナル文ソノ決
定ハ着キカネタラシク見エマシタ 同四年正月
二日伏見鳥羽ノ戦起コルヤ又上京シ禁闕ノ守衛
ヲ糾余致シ同二年封土ヲ奉還スルノ三月東京行
幸ノ御留守警衛トシテ精兵二十人ヲ徴サル即時
僣強ノ者ヲ精選シ留守官ノ下ニ奉ル御發軔ニ際
シ逢坂山警衛ヲ命セラレ御通過後京都ニ入り諸
藩士ト共ニ宮城ヲ衛ル任ニ當リマシタ云々
文久年間迄ハ二百六十三大名小名ハ妻子ヲ江戸
ニ置キ事實人質ニテ徳川ニ背クノ出来又弱點
ヲ握ラレ徳川家ノ秘密ハ譜代大名溜リノ間詰ノ
大名ナドノ外ハ知り得サルモノデシタガ越前侯

ガ諸侯ノ妻子ヲ囚々ハ引取り諸侯ハ自國ニアリ
テ武備ヲ練リ不急ノ費ヲ省キ以テ他日國家ノ急
ニ赴カントノ建白ヲ爲セシヨリ文久年中諸大名
ノ奥方ガ御國入りト云フ丁ガ始マリマシタ是レ
ガ江戸ノ見納メシヤトカ兄弟姉妹ノ逢ヒ納メシ
ヤトカ實父母トノ永別トカ申シテ毎日相互ノ
往來引キモ切ラズ離別永訣ノ様ハ得モ申サレ又
慘メナリデシタ 夫レモ具ノ筈ダス御國ト申シ
マシテモ名古屋トカ大垣トカ姫路トカ仮令ヤ小
藩タリトモ水口トカ尼ヶ崎トカナラバ海モアリ
道中モ便利又ハ都會デモアリマシガ丹波ト申シ
マシテハ鬼ノ住家ノ如ク申シタ位デス故ニ女中

丹波志

ナドガ泣イタモ理リデゴザリマシタ果シテ来テカ
ラハ只御江戸懐カシイガ毎日毎夜ノ漸ノ種デゴ
ザリマシタ主人隆備モ歸邑致シ在國在京前ニ
申上ゲタ通り奔命ニ疾レテ居マシタガ維新トナ
リ薩長土肥ノ上表ニテ藩籍返上トナリ本藩モ其
ノ附合ニ向テ見ズノ封土返上ノ舉ヲ揚ケ永年住
ニ慣レタル土地ヲ棄テ、主人ハ華族トナリ東京
ニ移住シマシタ喜シダモノハ女中ノミデシタ
東上後舊邸ヲ献納シマシタガ新田氏所有ノ邸地
ヲ賜ハリマシタ固ヨリ舊邸ニケ所ニ比スレバ
狹少ナモノデゴザリマシタ二十一年迄東京ニ
居リマシタガ同年京都住居ヲ願ヒ引越シマシタ

其ノ後ノ「ハ先生ノ御存ジ通りデス
廢藩ノ際ニ存スル所ノ錢札金貳萬〇〇三十圓三
十二錢八厘是レ新頒行ノ太政官札ニ引換ハタル
額ナリ

母皮志

大本教 本名皇道大本教 皇道ノ二字ヲ取り除
ク下ニ出タス

教祖出口直ハ福知山町人桐山五郎ノ長女天保七
年十一月十六日出生具ノ夫ハ綾部字本官小字坪
ノ内大工業出口政五郎此ノ政五郎ハ生來放蕩無
頼ノ者ニシテ酒癖アリ酒毒ニ中テラレ久シク病
ミ死ス時ニ明治十八年二月年六十直年五十八齡
ハ子アリ家太ク貧シ餅ヲ賣リ僅ニ朝夕ノ煙ヲ立
ツ長女ハ無頼漢ニ誘拐セラレテ消息無ク長男亦
失踪シ次男ハ近衛兵トナリ臺灣ニ渡リ生死詳ナ
ラズ第三女ハ人ニ嫁シテ狂ス時ニ族中ノ出口直
藏ノ妻長ナルモノガ天理教信者ニ嫁シ離縁トナ

リ竹藏ト云へル者ニ再塚シテ神像ト一卷ノ書ト
ヲ得テ母ノ直ニ示シタルニ直コレヲ見テ俄ニ信
仰ノ念ヲ浮べ夫ト云ヒ子ト云ヒ揃ヒモ揃フトル
汚行穢爲ノ中ニ沉淪シツ、モ泰然自若タルハ近
隣舉リテ賞賜シタル所ナリ而ルニ明治二十五年
一月初旬ヨリ直ノ言行大ニ變ハリ危言ヲ吐キ怪
語ヲ發シ近隣ヲ驚カシメタリ一日大音聲ニ叫ビ
テ曰ハク此ノ新宮坪ノ内ハ大地ノ高天原ノ神屋
敷此ノ屋敷カラ良ハ落チテキタ神ガ元ノ處ハ立
チ返リ世界中ノ人ノ身魂改メラシテ人民ヲ助ケ
タイノガ望ミビヤ世思宮建テルカラ村中ノモノ
人家モチテ退キテ下サレヨ退キテ下サレネバ燒

イラハ舞フゾヨト又曰ハク親シク國常立尊ト御
話シ今ヨリ三年目ニハ世界破滅ノ時節到來スル
トヲ知ル米國ガ歐羅巴誘ヒ日本ハ攻メ來リ空中
數百千ノ飛航機ト海上數百千ノ巨艦ガ戦ヲ始メ
ル日本人三分ノニマデハ死ヌルガ終ニハ日本ノ
神々ガ威靈ヲ顯ハシ外國軍ヲ全滅シ日本天皇ガ
統一シ玉フゾヤ云々ト之ヲ聞見スル者ハ教育無
ク文字ヲ知ラヌ老漢ニシテ斯カル言ヲ發シ得ル
ヲ訝リ不思議ノ思ヒヲ爲シ口耳相傳ヘテ忽チ諸方
ニ廣コレリ 偶々緩部ニ火災頻リニ起コリ嫌疑ハ
嫌疑ヲ生ミ或ハ直ノ爲ス所ニ非カヤトノ疑問ヲ
生シ遂ニハ警察署ニ密告スル者サヘ有リ此ニ於

丹波
志

テ警吏ハ直ヲ召喚シ尋鞠スルニ其ノ言フ所常人
ノ言ニ非ルヲ以テ之ヲ拘留スルヲ數日ニ及ベド
モ要領ヲ得ザルヲ以テ之ヲ家ニ送り家人ヲシテ
保管セシメ生數牢ニ入ラシムルヲ命ズ本人ハ
牢中ニ起臥シテ從容平日ノ如ク時トシテハ神人
情態トナリ國常立算ヲ呼ビ對話スル者ノ如シ保
管者中ニ直ノ弟ニ女ノ夫ハ木村ノ福嶋寅之助ガ
其ノ需ムルガ儘筆硯紙墨ヲ牢中ニ入ルニ致々
トシテ書シ書スル所日ニ數十百葉ニ十五年ヨリ
二十七年ニ至リ壹萬冊ニ上ル着ルモノヲシテ嘆
驚セシム

王仁三郎本姓名ハ上田喜三郎南桑田郡曾我部村

大字穴太ノ産ソノ家貧キヲ以テ賤業ニ從事シ
テ條ヨ或ハ傭夫トナリ搾乳夫トナリ搬運夫トナ
ル明治二十九年某月日父ナル上田吉松ト荷車ヲ
引クヤ途中遺囊ヲ見ル父之レヲ拾ハントス王仁
三郎ハ之ヲ拾フヲ欲セズ父子相争フ偶一丈夫ノ
來ルアリ見テ以テ己ガ賤布ナリト曰フ父子疑フ
テ之ヲ質スニ其ノ言フ所囊金ト全ク相合フヲ以
テ吉松コレヲ返與ヌ彼ソノ囊中ヨリ五十圓ヲ出
カシテ謝禮トレ與フ王仁三郎堅ク辭シテ受ケズ
減シテ數圓ニ至ルモ受ケズ彼己ムヲ得ズ之ヲ收
メ其ノ所懐ヲ語ル 彼姓名ヲ本田親徳トス出生
ハ鹿兒嶋ニシテ少ヨリ劍道ニ志シテ武者修行

四
鼓
志

ヲ爲シ諸國ヲ經歷シテ足ヲ水戸ニ留メ相澤ノ塾
ニ入りテ漢學ヲ修メ儒術ヨリ一種合氣ノ術ヲエ
夫レ古事記ノ文句ヲ附會シ之ヲ鎮魂歸神ノ法ト
名ヅケ東京ニ於テ遍ク之ヲ同志ニ授ケ副鳴種臣
ニモ授ケタレバ種臣ハ高官ヲ辭シ惠心コレニ從
事シタリトゾ而シテ親徳ハ神官トナリ駿河ニア
リ感スル所アリテ曰ハク神人アリ丹波ニ下ラン
ト之ヲ實驗セントシテ丹波ニ來リ賤囊ヲ落トシ
テ上田吉松父子ニ拾ハレタルナリ親徳熟喜三郎
ノ面相ト言行ヲ視テ以爲ハテク吾ガ求ムル所ハ
此ノ人數ト後會ヲ期シテ相別カレタリ明治三十
一年四月長澤楯雄後スニ出ノ母曰ハク本田親徳サ

シハ去ル二十二年ニ死去ナレタガ其ノ陰ニ丹波
カラ若イ男が來テ開クト妙ナ事ヲ曰ハレタ梨峠
デ四百圓ノ金ヲ落トシテ拾ハレタトモ話サレマ
シタ或ル人ノ云フニハ王仁が相模ノ三浦半嶋ニ
於テ神學ヲ修メタリトハ此ノ翁ニ倚リシモノカ
ト或ハ然ラシ又或ル人ノ云フニハ此ノ奇話ハ王
仁が後日ノ地位ヲ造ラシガ爲ニ設ケタル一場ノ
脚色ナリト又或ハ然ラシ
鎮魂專門神道者杉庵志道ハ京都ノ人長澤楯雄ハ
薛岡縣御徳神社ノ祠官ニシテ亦鎮魂家ナリ王仁
ハ志道が著ハセル瑞徳傳ニテ大元靈學ヲ習ヒ又
名古屋市ノ皇風幼稚園主朝倉成綱ニ就キ言靈ヲ

丹波
志道

學ビタリ 長澤ガ直ノ事ヲ聞キ尋ネ来リテ之ニ
向レ告ゲテ曰ハノ御身ニハ國武彦命ガ懸リテ居
ルト直ハ其ノ神降ヲ肇ニシ三十六年頃ヨリ改
メテ其ノ神降ヲ國常立神トセリ 王仁ハ二十三
年ノ頃ヨリ直ノ事ヲ傳聞シ神懸カリノ話ヲ聞キ
實驗マントテ綾部ニ直ヲ訪ヒ其ノ人ト爲リニ感
ジテ交ヲ結ビ二度行キ三度四度終ニハ其ノ家ニ
眠食スルニ至リ直ノ信任ヲ得テ其ノ女ト誓ヒ遂
ニ本姓ヲ棄テ、出口姓ヲ冒スニ至ル王仁ノ人ト
爲リヤ膽力ニ富ミ交際ニ長ケ大ニ爲スアラント
スルニ於テ一大助カヲ得タルモノ之ニ加フルニ
文學ニ優ナル成野和三郎ヲ得テ愈々其ノ規ヲ大ニ

シ巧舌方便以信者ヲ集メ直ノ不學無術其ノ人ニ
接シテ其ノ醜ヲ露ハサンヲ懼レ身其ノ衝ニ當リ
直ヲ與ニ秘ノ漫ニ人ニ接セシメズ
王仁ハ前年京都ニ在リ加茂川ニテ一個ノ石ヲ
拾ヒ其ノ奇形ナルヲ以テ神賜品トシ胡椒油ニテ
三四週間之ヲ磨キ本部金廣殿ニ祭リ猥ニ人ニ示
サズ大正五年以来信徒ノ増加シ寄附金銭木材諸
器人力等ノ集マルヲ以テ本宮山及ビ其ノ山麓一
帯六萬坪ノ地ヲ買收シ三層樓ヲ建テ名ヅケテ黃
金閣ト曰ヒ又五六殿外二十餘ノ大小堂宇ヲモ建
設シ信徒ヲ其ノ内ニ收容ス 信徒トシテ集合ス
ルモノ常ニ數百具ノ中ニ就キ神學生數十百名ア

リテ王仁ノ爲ス所ヲ習ヒ髮ヲ斬ラズ鬢ヲ剃ラズ
粗衣短袴菜食云飯時ヲ定メテ一日數回ノ祈禱ヲ
爲シ習學シ勞動ス具ノ王仁ニ敬奉スル神ニ事フ
ルカ如ク一令ノ下水火モ避ケザルノ趣アリ王
仁ガ長髮スル所以ハ前年風邪ニ罹レル際コレヲ
斬ラズ長スルガ儘ニ爲シタルヲ後日ニ理窟ヲ附
シ親ヨリ受ケタルモノナレバ手ヲ着ケルハ宜シ
カラズトノ言ヲ附シタルナリ具ノ教義ノ原ヅク
所ハ大石凝ノ著書ニ係カル彌勒出現成就教トス
凝ハ滋賀縣甲賀郡油日村ノ人又水野文助水谷清
等ノ著ハセル大日本神典釋義等ニ在リ大正年
間ニ於テ王仁ハ和三郎及ビ文學士某々等ニ囑託

シテ雜誌神靈界ト大本時報具ノ他二十四種ノ著
作ニ於テ又口説ニ於テ有ラシ限リノ手紙ヲ以テ
教義ノ宣傳ニ從事シ信徒ヲ得ルニ汲々盡瘁シタ
ル結果歿時拾有餘萬ノ徒輩ヲ數フルニ至ル具ノ内
ノ高等ナルモノニハ

海軍省ニテハ艦政本部兼兼造兵監督官造兵大佐 武藤箱太郎

海軍教官大佐 矢野祐太郎

軍需局第三課大佐 東嶋猪之助

右ノ外ニ三四十名 舞鶴佐世保ニモ許多アリテ
在艦ノ兵士ハ供給セラル、肉類ヲ食ハザルニ由
リ談信者ナルヲ知ラル肉食ハ教式上嚴禁ナレ
バナリ

黄金閣



阿部，像

本宮山ニ建築中ノモ、ハ宮中ノ賢所伊勢大廟ヲ
 模造シ総坪數二千五百餘アリテ外苑内苑ヲ設ケ
 花崗石ノ疊石階具ノ頂上ニ間口十二間ノ拜殿ヲ
 設ケ左右前側ニ手水鉢ヲ置キ拜殿裏ヨリ後方四
 面ニ玉垣及ビ透見牆ヲ二重ニ環ラセ内苑ニハ常
 磐木ノ間ニ玉川砂利ヲ敷キテ參道ヲ作り正面ニ
 間口十六尺奥行十二尺ノ神殿ヲ安置シ左右前側
 ニ六尺ト七尺トノ攝社ニ棟ヲ立テ孰シモ瓦葺屋
 根用材ハ木曾山中ノ檜ニテ版ハ柱目一枚モノ而
 レテ建築様式ハ神代ノ直線式ヲ採リ一ヨリ十ニ
 テ一燕ノ相違無キ大廟賢所ヲ此ノ所ニ顯ハセリ
 教祖ノ墓ハ忍多クモ皇陵ヲ模擬シタリ或ハヨリ

阿部
 實
 志

天壯重ナリト曰フマシ是亦其第ノ疑視注目スル
所タリ 其ノ側ニ信者中死亡シタル者ノ墓數基
アリ 名ヅケテ天王平トス
黄金閣三層樓ハ金色瑤瓏トシテ人目ヲ奪フ外門
扇ニ金鑰ヲ施ス具ノ戸ヲ開ケバ數個ノ室奥ニ入
ルヲ得
教祖直女ノ物セリ御筆先ハ教義ノ基礎ニシテ無
學ノ者ニ似ズ優稚ナレテ手迹ト真摯ナル文章ハ田
舎生マレノ一老婆手中ヨリ出デタルモノトハ想
ハレズ其ノ内ノ一節ニ曰フ神ハ實際ニナルマデ
ハ何事モ申サズゾヨノ言 大正十年ニハ世界ノ
立テ替ヘガアルゾヨ歐米軍ノ襲來ガアルゾヨ電

氣ノ神界回收ガアルゾヨ日本國民三分ノ二ハ亡
滅シ天下闇黒ト爲リテ鼻ヲ摘マレテモ分カラ
ヌ様ニナルゾヨナドノ言アリ 王仁ガ人知レズ
裏手ノ山ニテ燒キ捨テタル者一キ部アリ升ハ世
上ニ知ラレテハ餘リニ馬鹿々々敷キヲナレバナ
リ
神諭父ノ卷ト曰フ文中ニ三千世界一度ニ開ク梅
ノ花 梅デ咲イテ松ヲ浴マルノ語アリ王仁ノ解
ニ曰ハク三千世界トハ久レキ歴史アル大日本ノ
事一度開ケバ俄然トシテ擊破スル事 梅ノ花ハ
〇〇〇〇秘密ノ事 梅デ咲キノキノ字ハ破壊
ノ意 松ヲ浴マルハ自分ヲ仁ナリ云々

神諭
梅
松

鎮魂歸神ノ法ハ教義ノ骨子ニシテ信者ニ命ジ端坐熟禱セシメ神人同一ナラシムルニ在リ外評ニハ一種ノ催眠術トス

符牒習禱 改心トハ國事主義 又ハ皇室中心主義ヨリ〇〇〇〇〇〇、、、、、 錦ノ機ヲ織ルトハ〇〇ノ機會ヲ作ル事 庭ノ白藤トハ直女ノ娘ノ事 梅ト櫻トハ久子ト純子トノ事 大洗濯トハ△△戦争ノ事 以下畧ス

主義宣傳 土地財産ヲ一切神有トシ私有スルモノハ神ニ對シテ具ノ罪ヲ謝ス可シ且神前ニテ遠慮スバシ 各階級ヲ通ジテ世襲トシ保存シ又渝ハル事無シ 神ノ中府タル綾部生活ヲ祈レ

陸ノ龍宮殿ハ龍ノ模様アルモノ寄附セヨ 現今ノ通用貨幣ハ改廢セラル可シ 銀行預金ハ危険ナリ

此ノ宣傳ニ由リ通貨ヨリ器械物件ノ龍ヲ畫ケルモノ彫リタルモノ等信者ヨリ屬々寄附シタル事夥多ニシテ床下所々ニ儲藏セリ

祭政ニ大部 大日本修齋會本部 教務部。庶務部。財政部。出版部。本部附秘書。青年隊。顧問。

内事寮 祭務部 内政部 辨務部

警察關係 天正八年三月三日綾部警察署ハ王仁三郎和三郎ヲ召喚シ其ノ言フ所行フ所ヲ指摘シ其ノ誇大驕傲ナル數點ニ付テ警告ヲ與ヘタリ

町誌

朝王仁ハ早起シテ玄閑ニ五千高聲ニ令ス曰ハク
馬ヲ牽ケト馬至ル此ノ馬匹ハ浅野中將ノ贈レル
運物粟毛ノ駿驥コレニ跨ガリ悠々然ト遠クモ有
ラヌ教祖ノ墓ニ詣テ下衆黙禱シテ又騎リ歸ルヤ
急令職負ヲ招集シテ曰ハク神諭ナリ謹聽セヨト
衆敬伏ス曰ハクかり乃よりふびだしてめんど
うなしらべがあゝぞよこゝろをいためることハ
ないぞよ云々爾後其ノ言行ノ不穩當ナルヲノ益
加ハルモノカラ内偵トシテ表面ハ信者ヲ装ヒタ
ル刑重具々ハ千辛萬苦シ漸、幹部役員ノ過剰思想
ナレヲ探リ得且ノ一二端緒ヲ把握シタルヲ以
テ之レヲ警察高等科ニ密報シタリ此ニ於テ藤沼

警部長ハ證據書類ヲ一括シテ京都地方裁判所ニ
送致シ栗田檢事ハ時ヲ移サズ東京大改ノ控訴院
ニ控訴院ヨリ大審院ニ通牒シ同時ニ綾部本町ノ
本部ヲ中心トシ龜岡道場ト大阪ニ在ル大正日々
新聞本社ニ對スル刑事隊ノ大活動ハ開始セラレ
同十二日夜十一時京都裁判所黒田檢事ハ王仁三
郎ヲ不敬事件新聞紙法違反事件ニ依リ刑法第七
十四條新聞紙法第二十三條ヲ以テ又吉田祐定ハ
新聞紙法違反ニ由リ同法第二十一條ヲ以テ夫々
令状ヲ執行セリ
同十二日総員百八十人ノ警察大部隊長藤沼部長
ハ京都ヨリ龜岡ニ入り龜岡道場ヲ襲ヒ圖書編集

明
技
誌

至注吉田正治ノ家宅搜索ヲ爲シ八時四十分綾部
ニ着シ粟田檢事及ヒ綾部署員ト相合シテ三部隊
ト爲シ本宮通リ新宮方面并松方面ノ三方進撃中
九時中川警部一隊ハ並松ノ和三郎宅ヲ包圍シテ
樓上ニ於ケル禮拜中ノ和三郎ヲ逮捕シ往復書類
王仁三郎ノ揮毫勅物具ノ他關係證據書類ヲ押收
シ又綾部署楠勢刑事ノ一隊ハ本所ノ吉田祐定宅
ニ於テ同人ヲ逮捕シ日記外書類ヲ押收シ田中次
席檢事ノ一隊ハ都旅館裏手ナル陸軍大佐石井彌
太郎方ノ搜索ヲ爲シテ著作書類原稿等ヲ押收シ
九時半全部ヲ以テ本部ヲ衝キ周圍十餘町ニ亘リ
テ嚴重ナル非常線ヲ張り一部隊ハ内庭ニ入り黄

金閣教祖殿教主殿神殿地下室等ヲ開放シ二時ニ
及シテ周到ナル大搜查ヲ爲シ郡會公堂或多野紀
念館及ヒ綾部署ヲ以テ假相收所ニ當テ荷馬車七
臺ニ書類刀劍神器神體等ヲ積載シタルヲ搬入シ
調査ノ上ソノ一部ヲ算筭長持行李等嚴封ノ後十
一時四十分綾部馭ヨリ京都檢事局ニ押送セリ而
シテ和三郎ハ中川警部ニ祐定ハ楠勢刑事ニ引カ
レ檢事局へ護送セラル警戒線ハ午後五時ニ其ノ
一部ヲ解キ他ハ同夜深更ニ至リ解カレタリ王
仁三郎ハ大放火正日々新聞社々長室ニ朝拜ヲ終
ハリタル所ヲ十二日午前十一時警吏ノ爲ニ捕捉
セラレ裁判所ニ收監セラレ十九日祐定ハ保釋

ワラレ王仁ハ長髪ヲ斬リ和三郎ト各獨房ニ沈黙
端坐ス 長髪ハ該教々職ノ特長姿装ナルニ何故
惜氣モ無ク斬リタルト問ハバ答ヘテ曰ハク自分
ニ惡靈ガ倚リ附キ居タルヲ知ラザリシハ職務上
其ノ資格無キニ由ルト思フガ故ニ斬リ去リタル
ナリト
捜査ノ結果公示スル所ニ由レバ幹部信者ノ修行
ナル出齋殿ノ床下入口ヨリ二十間ハ疊敷位ノ所
天井ハ板張圓坐五枚ヲ敷キ刀劔印刷物ナド散亂
シ有リタリ此所ゾ婦女子貞操ノ凌辱所トカヤ
裁判所記録數ニ萬八千枚
舊録至九鬼隆治子曰ハク大本教ノ算信スル良ノ

全神トハ吾ガ郎内ノ方除ケノ社ナリト
今回ノ大捜査後ハ教内議論沸騰シ御筆先ヲ燒却
スルトト爲リ出齋全文ヲ唱フルヲ以テ教義トシ
教祖激出口激ノ大反目ト爲レリ次文十五箇條中
参考ノ了
京都地方裁判所加藤豫審判事ハ最初ヨリ特ニ證
據事状書類ヲ把握シ居タルモ之レヲ呈示セズシ
テ訊問ヲ好メタルニ王仁ハ說教的口調モテ蕩々
ト演ベ出シタルヨリ判事ハ王仁ガ直筆ニ成レル
理想ノ〇〇主義ナル論文ヲ面前ニ衝キ着ケ神靈
界筆先ノ伏テ字ナル論文ヲモ下示セシニ大膽漢
モ今ハ陳辯スベキ一句モ無ク沈黙少時首ヲ伏テ

叫
技
誌

恐レ入りマシタト曰ク私ニ惡靈ガ懸カリ國常立
 ノ神又ハ良ノ金神ト曰フテ私ヲ騙シテ居マシタ
 又曰ハク前年竊ニ筆先ヲ燒キタルヲアリ升ハ私
 ノ惡口ガ書イテ有リマシタ故又私ノ氣ニ喰ハマ
 所ガアリマシタ故ト遂ニ十五條ヲ草シ以テ謝罪
 ノ實ヲ示ス
 一 信條ノ改正 二 誓約ノ改正 三 出
 口直ノ筆先ヲ用ヒス 四 王仁三郎歸神ノ筆
 先ヲ用ヒス 五 出口澄ノ筆先ヲ用ヒス
 六 浅野以下ノ著作ヲ用ヒス 七 筆先全部
 ヲ燒キ捨フル事 八 皇道大本教ハ單ニ大本
 教トシ度シ 九 祭神ハ古事記日本書記ノ主

タル神ヲ奉祀シ敬神尊皇愛國ノ精神ヲ發揮スル
 事 十 産靈神及ビ各種ノ祖先ヲ崇拜スル事
 十一 今迄王仁三郎ノ誤解シタル缺點ヲ各地
 ノ支部會所ニ印刷シテ通知スル事 十二 各
 支部ヲ通ジテ反對ビシメガル様辯明スル事
 十三 時ヲ得バ誤解ヲ各信者ハ辯明スル事
 十四 神靈界ニ發表スルハ如何シトモ考ヘラレ
 (此所不分明) 十五 大本教私有ノ天火ノ卷及
 ビ足立船ノ文ニ付調査シテ意見ヲ發表スル事

京都府立総合資料館所蔵

謎乃平假名あり端牛も壁ニクいたるお筆先
 こゝや昔々鬼住む丹波大正恐ろしワニが住む
 入口と出ロヨウチグハ五月濁
 沖様と綾部ニ秋乃哀れ之
 黄金畑より金瓢を又へ
 梅の湯や金乃匂さごり漏りし迹



五月廿五日大正日々新聞社長出口王仁三郎同顧問我野和三郎ハ雜誌神靈界掲載記事ニ関シ不敬事件被告人ト爲レルヲ以テ辭任シ上瀧七五郎後任社長タリ

信者 宮内省侍醫寮御用掛松浦徳三郎ハ免官セラレ

教祖ノ墓地ハ共同墓地ニ違反スルヲ以テ共同墓地ニ縮小スベシト命ゼラル

王仁ガ裁判所ニ於ケル告白ハ不敬事件ニ涉ルノ多キヲ以テ其ノ過激ナル部分ハ之ヲ豫審決定書ニ記載ス可ラズ之ヲ省畧シテ只裁判所ノ判事ガ心證ニ供ス可ク豫審調書ニ書キ入ル、事トス

五月末日マデニ五十回、訊問ヲ受ケタルガ其ノ
 四十六回ニハ教祖ヲモ惡評シ四十七回ニハ浅野
 頼問ヲ罵倒シ四十九回ニハ信徒ヲ覺醒セシガ爲
 ニ本教主旨ヲ世間ニ公告セントノ意向ヲ示セリ
 其ノ多クハ皇室ニ關連スルヲ以テ秘密ニ附セラ
 レタリ
 五月末日東京所々ニテ宗教思想啓蒙運動ナルモ
 ノ起コリ大本教ノ如キ浅薄ナル教義ヲ擡頭セシ
 メサル様ノ運動アリ
 王仁曰ハク誓約改正ヲ致シ第三條ヲ大神ヲ敬シ
 皇國ヲ愛シト致シ度シ又曰ハク筆先ニハ不敬ナ
 ル所アリ豫言モ適中セズ 私が明治三十二年筆

先ヲ始メテ見テ半信半疑デアリマシタガ日露戰
 ガ始マリマシテ稍、信ジ歐洲大戰ニ由リ九分信ジ
 浅野カ凌部ハ參リ論議致セシヨリ十分信ジマシ
 タ 今ヨリ視レバ邪神ニ憑ラレタノデアリマス
 之レニ由リ不敬事件モ左程ニ思ハス書キマシタ
 立碇立直シノ一ガ善カラネハ純神道ニ致シマ
 ス
 是レ迄ニ祭リタル所 日、神 月、神 天照大神
 國常立尊 良、金神 坤、金神 金勝金、神 龍宮、乙
 姫 日、出、神 雨、神 風、神 荒、神 岩、神 地震、神
 大將殘ヲス、神 禰、勤、神ヲ改メ
 天、御、中、主、神 高皇靈神 神皇靈神 天照皇太神

神皇正統記

皇孫神

任辨那伎神

國常立神

豐雲野命

大國主命

須世理姬命

産土神

氏神

等ト致

シマシヨウ

教祖墓地ニ付キ綾部墓地管理者ナル同町長ハ府
 ニ出テ衛生課長ニ語りテ曰ハク大本教祖ノ墓ノ
 一部ガ墓地外ニ在ルヲ今回實測ノ結果始メテ
 判ツタ様ナリテアル故出口家ノ所有地ヲ寄附ス
 ルカラ共同墓地ノ補足ヲ願フトノ歎願書ヲ呈出
 セリ
 課長モ呆レテ曰ハク今更ソシナリガ出来ル筈ガ
 無イト町長恐レ入ルトテ退廳ス
 六月五日幹部ノ者綾部警察署へ出頭シテ曰ハク

大本教ノ神様ハ質素ト宗トナサル、ニ彼ノ様ナ
 大キナ墓ヲ造リタルハ神慮ニモ叶ヒマセヌ故ニ
 小規模ニ致シマストノ豹愛説ヲ呈出シタリ之
 レニ由リ近日ヨリ墓地區域外ニ出デタル部分ハ
 削ラレ墓前ノ廣キ空地ニハ多數町民ノ墓ヲ設ケ
 ラレ共同墓地ノ形體ヲ整ヘルトナレリ
 浅野和二郎ハ司法當局ヨリ王仁ガ懺悔シタル艱
 末ヲ聞カサレタルモ頑平トシテ之レヲ容レカシ
 テ曰ハク王仁三郎ガ何シト申サウトモ私ニ於テ
 信仰ノ動搖ハゴザラヌトテ王仁ノ豹愛ニハ大反
 對ニテ十年ノ世界立テ替ヘ立テ直シニ付斷平夕
 ル信念ヲ持シ本年ノ終局ヲ期待シツ、アリ

京都府立総合資料館所蔵

王仁ハ痔疾ニ悩ミ豫審廷へ引キ出サル、ヲ苦シ
 ヲリ 手帳ニ記載セル種痘事件ト日露事件トノ
 訊問ニ對スル陳述ニ曰ハク私ガ静岡行ノ留守中
 ニ教祖直女ガ申スニハ王仁三郎ガ静岡へ行キ長
 澤ニ大陽ヲ封ジル術ヲ學ビ之レヲ行フ上ハ世界
 カ國ニナルカモ知レヌ故種痘ヲドツサリ買ヒ込
 レテ貯ヘマシタトガ有リマシタ又日露戰争中我
 ガ軍ガ九連城ヲ占領シタル大勝利アルヤ直女ハ
 日本ガ大負ケニタト筆先キ書キマシタ私ハ直ヤ
 直ノ連中ガ私ニ反抗シタナラバ此ノ事實相違ヲ
 持出し彼等ノ頭ヲ押ヘル用意ニトテ備忘ノ為ニ
 記シ置キタル迄ノトデアリマス

信者ノ一人ナル東京ノ醫學博士岸一太ハ東京ノ
 信者ヲ代表シ書ヲ王仁ニ寄セ五十葉ニ餘ル改正
 論ヲ作製シテ其ノ意見ヲ問ヒ御筆先ニ私心私筆
 ヲ加ヘタル罪ヲ天下ニ謝セヨト勸告セリ

思ひきんはふの爲につくまをのをくたんと王仁

大正六年十一月一日ヨリ同八年八月一日マデ約
 二年ニ亘リ意志ヲ繼續シテ前後八回刑法第七十
 四條ニ該當スル不敬ノ記事ヲ機關雜誌ニ掲載シ
 タリトノ事實ヲ認定シテ起訴セラレタルハ寛假
 ニ過ギタルモノニ非サル半警誠スバキニ警誠ヲ
 爲サハリシハ誰レノ愆ゾヤ大正七年二月十二日
 新聞ノ記事差止メノ命令アリ同十年五月十一日

之レヲ解除シタリ雜誌神靈界、檢閲者タル内務
 省檢事局司法警察官等、其ノ職責トシテ每晝之
 レヲ檢閲シタルナルベシ何故ニ年間ニ亘リ之レ
 ヲ放任シタル乎大正六年十月一日ノ記事即犯罪
 ト爲ルベキ最初ノ記事ヲ告發シテ之レニ制裁ヲ
 加ヘタランニハ三百ノ警吏ヲシテ包圍攻撃ヲ爲
 サシムルニモ及バザリシナラシテ十數班ニ分カレ
 テ家宅ノ搜索ヲ爲スガ如キ煩勞モ無カリシナラ
 シ檢事正ノ苦心談ヤ警保局長ノ危險談モ豫審判
 事ノ臨檢調査ノ小大斷定審案モ無カリシナラシ
 呵々
 憤慨投井 鹿兒嶋下日置郡上俣集院村上ノ谷口

二次郎次男吉永覺昭ナルモ、ハ王仁ノ郎内ニ假
 住スル迷信疑結者仲間ノ一人ナルガ敷祖墓地ノ
 改造論ヲ縮小説ノ起コルヲ聞クヤ敷祖ノ墓前ニ
 起臥シ日夜熱烈ナル祈禱ヲ爲シ遂ニ投井自盡セ
 リ
 猛信者ノ一人ナル栗原白嶺ハ文學士淺野和三郎
 ニ亞ク教内ノ人物ナルガ六月十六日府廳へ出テ
 墓地ヲ其ノ儘ニシテ置キ度云々自分勝手ノ事ノ
 ミヲ叙ベテ退出セリ
 辯護人選定 江木哀 平山六之助 渡邊昭 足
 立進三郎 外ニ信者側ヨリハ松岡 富澤 土井
 植月 大西 等ニ依頼セリ

京都府立総合資料館所蔵

豫審決定

豫審判事加藤健一

辯護士 森田

渡邊

決定

京都府何鹿郡綾部町大字本宮村小字本宮下三番平民

大日本修齋會之長大正日々新聞社之長

出口 王仁三郎

明治四年七月十二日生

京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字上番取十六番地平民

大正日々新聞顧問

浅野 和三郎

明治七年八月十三日生

京都府何鹿郡綾部町大字本宮町三十四番地平民

新聞業

吉田 祐

明治十年七月二十五日生

右王仁三郎和三郎ニ對スル不敬新聞紙法違反
祐定ニ對スル新聞紙法違反被告事件ニ付テ豫審
ヲ遂ゲ決定スル事左ノ如シ

主文

本件ヲ京都地方裁判所ノ公判ニ付ス

理由

被告王仁三郎和三郎ハ京都府何鹿郡綾部町出口
直(天保七年生レ大正七年十月死亡)を關祖トセヨ皇道大本乃
主腦者トシテ直ハ明治二十五年以來神憑リナリ
ト稱シ平假名を用ヒテ神人乃關係靈主體從主義
(排物贗主義)乃警告教訓及ビ豫言を内容トセヨ多
數乃筆先(大本神諭ト稱ス)を作製シ良乃金神具乃他

乃神を祭祀し居たる慶王仁三郎ハ明治三十二年
直乃末女也ミ乃塔養子ト爲リ爾來多少乃慶遷あ
りたるも直乃筆先及び自己乃修得セシ靈覺を骨
子トシ大本言靈學(杉庵志道著水徳傳第七十一號と同
一内容)及ビ大石研疑真素美言靈乃學ニ依リ解釋セ
る古事記乃趣旨を加味して教義を組織し之を皇
道大本と名づけ而して其乃教義ハ直ニ憑依セシ
良乃金神國常立尊乃神勅ニ依リ政治宗教實業其
乃他人生乃經綸一切を實行セんとするニ在リテ
治教乃一種なりと稱し幽顯兩界乃立替立直しを
爲し將來我が天皇乃陛下ニ世界を統一し畿部ハ
帝都を遷し出口家オ祭祀長となりて神勅を受け

之れを天皇ニ養上し天皇ハ之れり依り政務を親
裁せらるべき趣旨乃祭政一致稱勅乃世乃出現ス
べきものなることを説き神風純愛教の信條を撰
攷して大本乃信條を作成し信者吸集の手段とし
て水谷清著大日本神典釋義雜誌國華教育皇風教
育其乃他教義ニ関する記事を恰自己乃著作セシ
との、如く装ひ大本宣傳の機關雜誌等ニ發表し
て大本の教義の深遠なることを誇稱し且信者を
して自己を崇敬せしめんがため自己をキリスト
の再現ミロクの出現なりと鼓吹して右教義乃宣
傳ニ務め居たる折柄被告和三郎ハ直の筆先及び
右教義ニ對し大ニ共鳴し海軍機關學校教授乃職

を辞し大正五年十二月綾部に移住し爾後王仁三郎と共に皇道大本の主腦者となりて口に筆に最も熱烈に之れが宣傳をなしたる結果從來微小なりし信者の集團ハ俄に信者を激増して大集團を形成するに至れり而して被告王仁三郎和三郎ハ其の主義宣傳の機關として綾部町に於て大正六年一月より新聞紙論に依り定期發刊乃神靈界と題する雜誌を發行し之れを主として大本神義(直の筆先王仁三郎の神論)を掲載せんことを謀り王仁三郎ハ大正六年一月より同年十二月迄其の發行兼編輯印刷人となり尚同人ハ其後大正十年二月迄和三郎ハ大正六年一月より大正九年八月迄各編

輯人以外に於て同雜誌乃實際の編輯を擔當したる被告王仁三郎和三郎ハ表面皇室中心主義を標榜しなかり直に憑依せる神の威嚴及び右教義の崇高なることを誇示宣傳せんとする目的を以て兩陛下に對する不敬の記事を神靈界に掲載せんことを共謀して犯意を繼續し一 大正六年十月一日發行神靈界第五十二號十九二十頁に明治三十一年十一月三十日附神諭として上り云々現代の大將までも云々なる天皇陛下乃御行動を妄評せる記事ニ大正七年三月一日發行同雜誌第五十七號三頁に大將まで云々なる天皇陛下乃御慮を干犯せる趣旨の記事ニ大正七年三月

京都府立総合資料館所蔵

十五日發行同雜誌第五十八頁六頁は大正六年十一月二十三日附、神論として日本の〇解りて居る云々 天皇陛下乃御威徳を冒瀆せる事 大正七年五月一日發行同雜誌第六十一頁十一頁ニ於て或野知通三郎(被告和三郎、別名)と署名し地之高天原なる顯下ヲ現世界の事柄ハ何れも神界が主で原動力で云々皆皇道大本の認可を受けず初めて地球上ニ存在を許すのが正式なものであります云々なる 天皇陛下乃統治權を無視せる趣旨の記事 五同年十二月一日發行同雜誌第七十五頁八九頁ニ明治四十三年十一月一日舊九月二十八日附、神論として元の國常立尊乃御魂と稱日

女若命乃二ツ身魂が一ツニなりて出口乃神となり地乃世界の大神と現れるのである云々神ニも人民ニも知りた事でない云々天と地と揃ふたから是れより斯世の自由ニ致さると申して口で言ハしてある事と手で書してある事と持ち出して來る云々違ふ様な氣遣ひハない云々出口ハ世乃元尊と云々なる 天皇陛下乃統治權を無視せる趣旨乃記事(第四頁證の六神字記入乃原稿同日付、筆先参照) 六同雜誌十頁ニ神論として日本乃結構な〇〇〇云々今乃世乃持方ハ薩張り畜類乃行リ方である云々なる 天皇陛下乃御威徳ヲ冒瀆せる記事(第四頁證乃六神字記入乃原稿参照) 七

大正八年一月一日發行同雜誌第七十七號十五
六頁ニ大正七年十二月廿四日陰曆十一月廿二日
附神諭として大出口乃神顯ハれて天々ら斯世を
見渡セバ何處も同く秋乃夕暮霜光乃烈しき状態
口で言ふ様な事でないぞよ。今。今。今。今。云
々なる。兩陛下乃御行動を妄評せる記事(第四號
證乃七神字記入乃原稿参照)ハ大正八年八月一日發
行同雜誌第九十一號十頁ニ大正六年舊閏二月二十二日乃
神諭として日本乃國ハ日本乃行リ方で行くねならん
乃云々なる。天皇陛下乃御行動を妄評せる記
事を掲載して。兩陛下乃御尊嚴を甚しく冒瀆し
不敬乃行爲を爲したるとのこして和三郎ハ右四

フ乃記事乃原稿を作成し王仁三郎ハ右一乃至三
五六八乃原稿を作成する方乃直乃平假名ヲ記
載せる筆先ニ基き其意味を了解し易くしむる
爲重複せる記事を省略し其趣旨を採りて漢文交
りの文章を編綴したるとのなり
被告祐定ハ大正七年一月一日より大正十年二月
迄右神靈界乃編輯發行兼印刷人にして犯意を繼
續し前記ニ乃至ハ乃事實の如く。兩陛下ノ御尊
嚴を冒瀆せる記事を神靈界ニ掲載したるとのな
り前記事實ハ其乃證悉十分ニして被告王仁三郎
和三郎ノ行爲ハ各刑罰第百七十四條第一項新聞紙
法第百四十二條第百九條刑罰第百五十四條第一項前段

第十條第五十五條ニ該當シ被告祐定の行為ハ新聞紙法第四十二條刑法第五十五條ニ該當スル犯罪ナリと思料ス仍テ刑事訴訟法第六十七條第一項ニ則リ主文乃如ク決定ス

大正十年五月十日 京都地方裁判所豫審判事 加藤健一

各務、京ノ美濃國航空隊ハ福知山聯隊ト、飛行連合會ヲ催シ大正十年五月廿四日午前八時ヨリ開始シ爆彈照明彈ノ投下又ハ陣地撮影及ビ飛行機射撃等ノ演習ヲ了リ福田中尉ハモ式第百七十六號ヲ揮舞シテ附近ノ各町村ノ飛行訪問ヲ爲シ綾部ノ空中ヲ四百采突ノ低空飛行ヲ爲シ黄金閣ヲ見下レナガラ悠々ト數回廻旋シタリ大本教本部ノ

人々ハ曰ハク扱モ無謀ナルヲ遺ルゾヨ夫レ見タカ反應ハ靦面ジヤニ十三日ハ不時ノ雷鳴アリ政廣軍曹ハ墜死シ一名ハ墜落シテノ大輕我ヲシタゾ兼ネテ曰フ通り黄金閣ヲ見却スナンテ無禮無法ナラヲスル者ニ神罰ノ無イ筈ハ無イナド取り沙汰スルヨリ府ノ警察署ニテ眉唾モノトシテ事實ノ調査ヲ爲セリ其調書ニ 小嶋軍曹ニ七三號 杉下軍曹ハ二七六號 正弘軍曹ハ二七九號 搭乗

二十五日朝福知山大野ヶ原出發 綾部大本本部ノ上空ヲ飛翔シ 午前九時 京都市上ニ顯ハレニ七九號ハ美濃國安八郡三城村大字須賀谷ニ墜

落レテ正弘軍曹ハ燒死ス其黄金閣上ヲ飛翔セシ
 ハ福田中尉ニシテ元氣旺盛大本々部ノ朝罵ヲ聞
 キ呵々大笑セリ 本部ノ人々ハ曰ハクハ罰ハ觀
 面ナレモ大罰ハ緩々徐々ニ來ルモノナリト
 墜落原因調査委員 堀中佐 佐藤大尉 有田
 大尉 岡田中尉 加藤軍曹
 調査事實發表 政廣軍曹墜落ノ主因ハ惡氣流ト
 強風ノ爲ニ機體全部ニ緩ミヲ生ジ遂ニ空中分解
 ラ爲スニ至ツタモノトス杉下軍曹ノ山腹ニ衝突
 エタルハ猛烈ナル濃霧ニ襲ハレ全ク視カラ遮ラ
 レタル爲ナリ
 大本教本部門前ニ捨文アリ曰ハク 神綾部モ式

乃危險故ハラレ
 大正十年十月五日京都地方裁判所ニ於テ公判
 懲役五年 出口王仁三郎
 同十ヶ月 浅野和三郎
 禁錮三ヶ月 吉田祐定
 罰金百五十圓
 神殿取毀 并ハ無頼ノ社寺ハ明治五年太政官達
 書ト内務省令トニ違反スルヲ以テナリ
 其ノ達書ニ無頼ノ社寺ハ従前之通禁制ノ事トア
 リ 十月廿八日取毀了リ警察側一同引キ揚ゲト
 ナル 神殿建造費六十萬圓迹方モ無シ
 魔神乃正體どうちつと五年乃地獄に落ちこ
 んど おうげてお化け逃げ出して綾部の空

京都府立総合資料館所蔵

も晴れて来た やれく 閻魔のつまげも地
獄の里においでくれ

六月十三日丹後雄嶋靈地渡りハ年中行事ノ一十
リ凌部ヨリ九曜星ノ旗章ヲ船頭ニ五テ四隻ノ發
動船ニテ出帆シタルガ長髪者ハ大ニ威ゼリ本年
ハ澄女ガ信徒ヲ率ヒテ鳴渡リセリ雄嶋雄嶋一名
冠嶋皆嶋ニテ教祖ガ行ヲ爲セシ所ト云フ老人嶋
大明神社アリ其ノ前ニテ教祖ニ習ヒ皆水行ス
神殿拜殿取毀實見談 去ル廿日(十月)ヨリ始マリ
表門内ノ小部分ヨリ始マリ第三日目ノ廿三日午
前六時ヨリ始マリ人夫モ前日ニ比スレバ増加シ
テ三十餘名午前中ニ二棟ノ手洗場ハ取り去ラレ

夕リ信者連ガ此處彼處ニ聚集スルモノカラ警察
ノ注意警戒ハ嚴重トナル漸ニシテ夜ニ入ルヤ三
々五々悲憤慷慨ノ徒輩出現シ神殿取壊シハ警察
自分ガ我が國本ヲ破壊スルノデアルナド警察ニ
對スル不敬呼ハ、リノ聲アリ中ニ就キ青年信者
ノ不穩舉動モ見ユルモノカラ警戒一層嚴重ナリ
シ折柄劉亮タル進軍喇叭ノ響アリテ四師團ノ篠
山歩兵第七十聯隊ガ武装嚴シク凌部町ニ入り
本宮山上ニ行進シ見學ト稱シテ取毀キノ現場ニ
又銃シ暫時休憩シテ三六七殿附近ヨリ大本教境
内ヲ練行シ上町ニテ午喰ヲ了リ退去シタリ引キ
續キ福知山歩兵聯隊ノ一個中隊ガ將校指揮ノ下

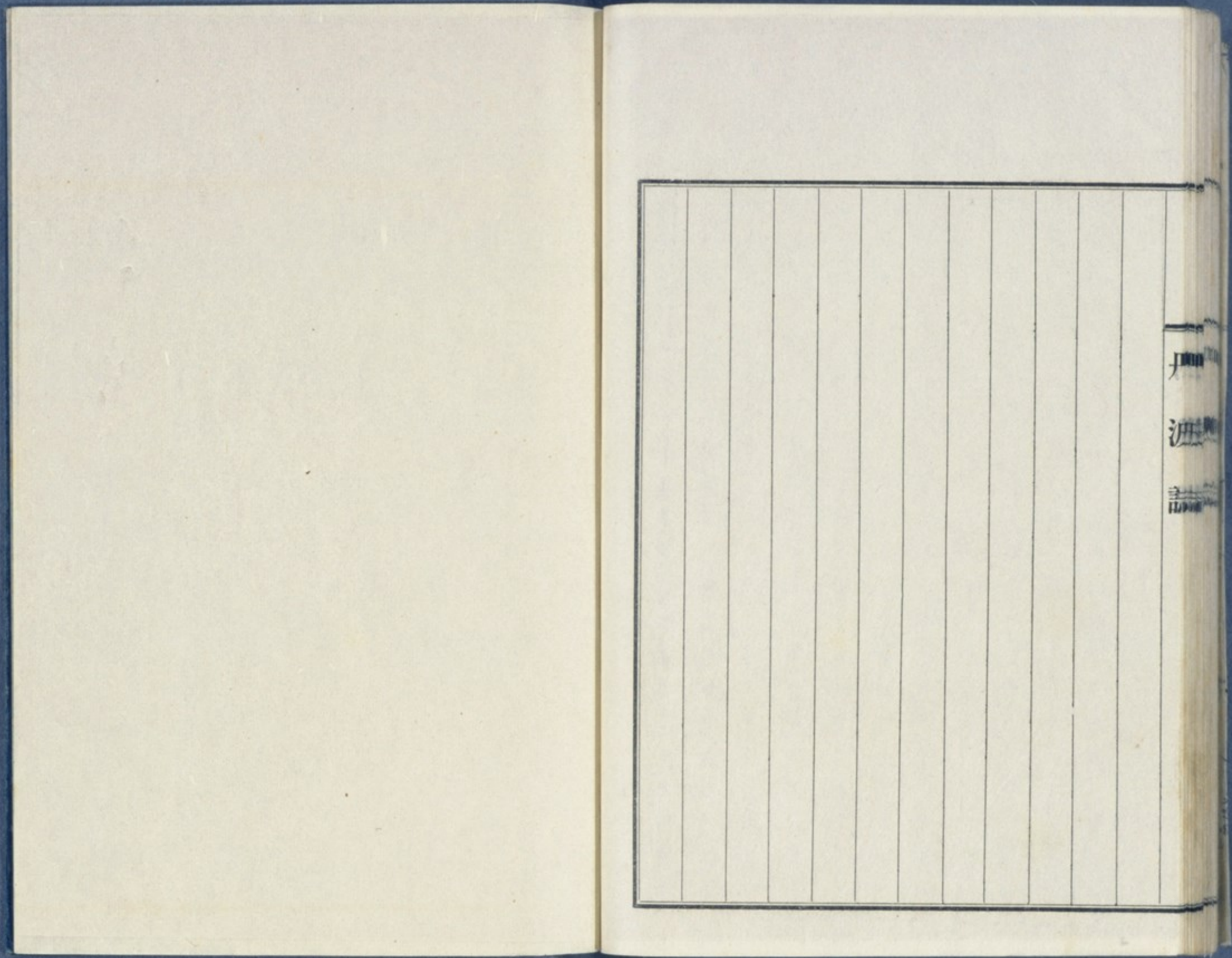
京都府立総合資料館所蔵

ニ前同様ノ行動ヲナセリ

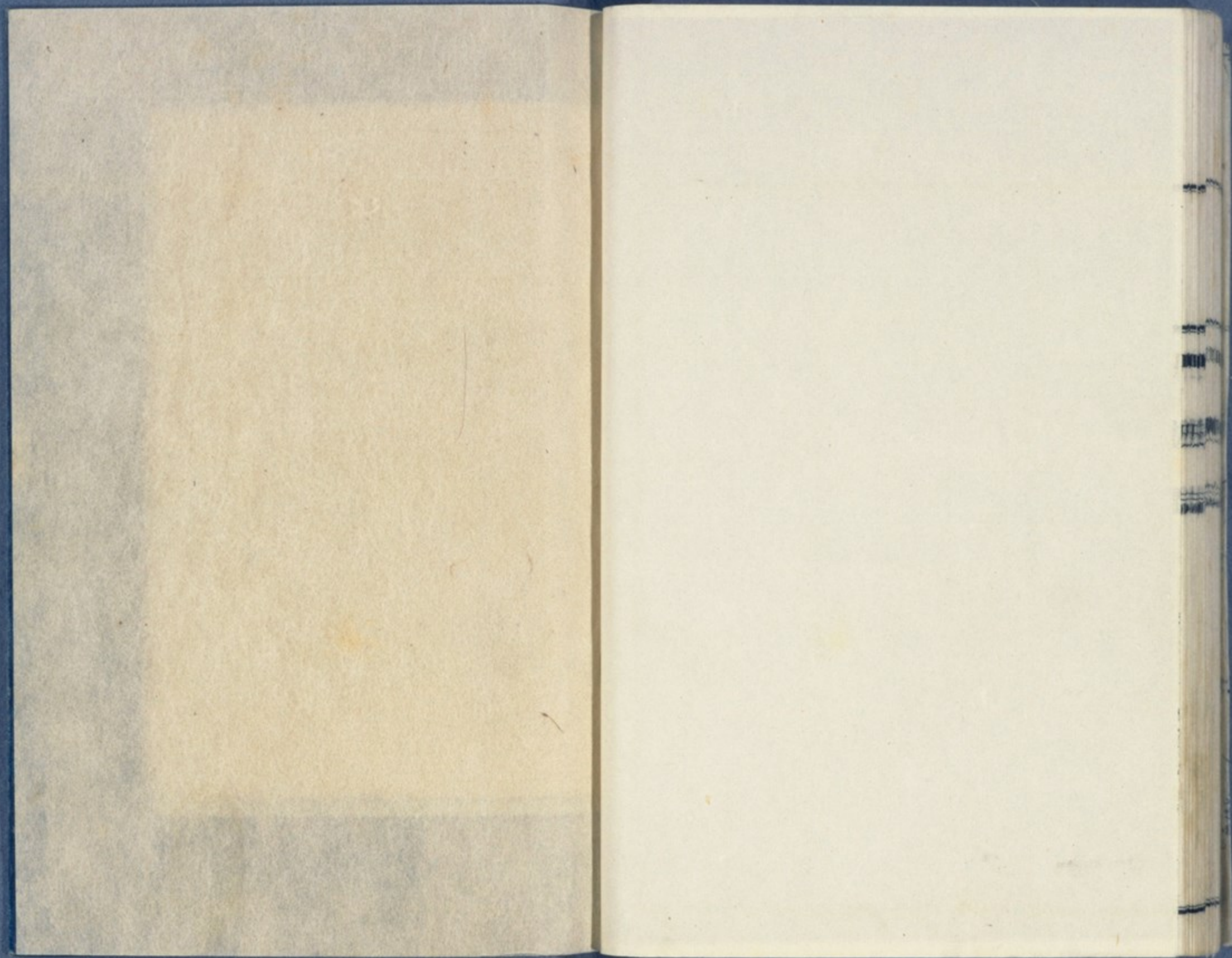
兵庫縣兵庫吉田新田濱山鐘紡職工柳精一年齢三十九數年來大本教ノ大信者ナルが大正十一年二月ヨリ異状ヲ露ハシ憂調ヲ吐キ二月十二日後妻キチニ向ト今此ノ家が天上スル最中ナレバ外ハ出ラハ危キト語りテ瞑目シ居タルが妻ノ看護中ノ隙ヲ見テ出刃庖刀ヲ以テ便所ニ入り腹ヲ十字ニ截リ更ニ咽喉部ヲ刺シテ即死セリ
御筆先ニ明治五十五年五月五日ハ良キ日デアラゾヨト記載セラレアルヲ以テ其ノ日即大正十一年五月三十一日ニ當ルノ故ソノ預言ヲ信ジタル信仰者が三口ク殿ニ三百ノ頭顱ヲ并ベテ福音ノ

實顯ヲ待テタルが其ノ甲斐モ無カリシカバ皆茫然トレテ薄暮ニ退散セリ信者目下百名ばかり孤域落日ノ姿ナリ

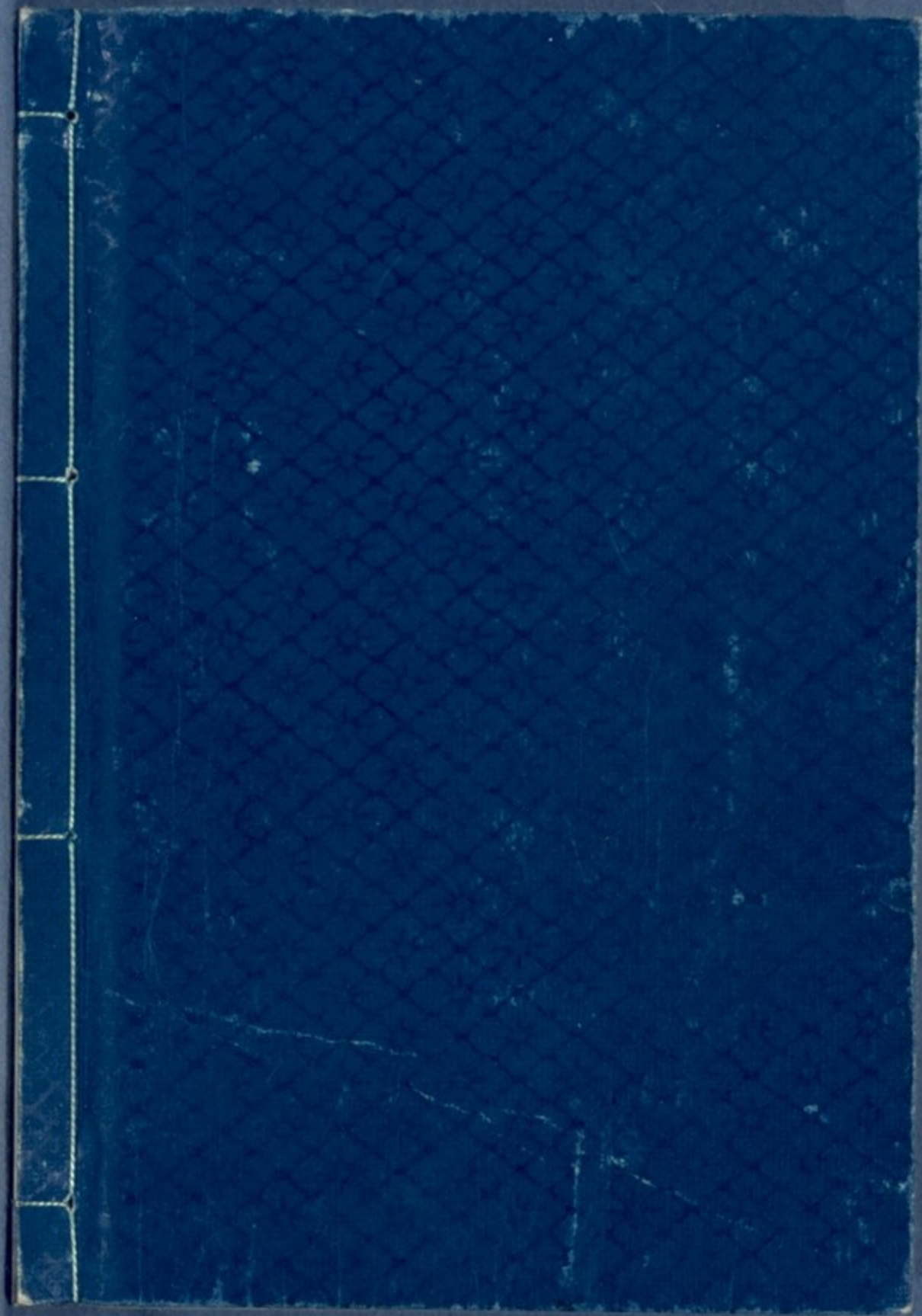
京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵